

令和2年度3年度 日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業

海外に赴く日本語教師【初任】研修

# 事業報告書

令和2年度3年度

株式会社インターカルト日本語学校

## はじめに

本事業は、海外の日本語学習ニーズの高まりを受け、世界各地で求められている日本語教育人材の中で、特に各国の民間の日本語教育機関で主に成人を対象とした日本語教育を行う日本語教師が備えておくべき知識、技能、態度を身につけられる人材養成・研修カリキュラムを開発し、提供することを目的とした。

インターカルト日本語学校日本語教員養成研究所は、1978年より日本語教師養成事業を開始し、44年目を迎える。当機関は、日本語教師養成と、海外への教師送り出しや提携先機関での海外研修の実績があり、その知見を時代の要請に生かすことができると考える。

文化庁日本語教育小委員会による『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』で示された内容に適合する内容にし、今回の取り組みを実施した。

本報告書は令和2～3年度の2か年に渡る事業の結果の報告である。

目次

1	教育課程の検討	4
(1)	実態の把握	4
(2)	カリキュラム・シラバスの検討	4
(3)	研修方法の検討	6
(4)	評価の方法を検討	6
2	教材の検討・開発	7
3	養成・研修の実施	10
(1)	目標	10
(2)	修了要件	11
(3)	科目ごとの実施状況	11
4	研修内容と報告	12
(1)	令和2年度	13
(2)	令和3年度	83
5	事業全体の評価	149
(1)	検討方法	149
(2)	検討結果	149
	添付資料	152
	添付1 令和2年度海外機関向け事前アンケート結果	
	添付2 令和2年度日本語教師向け事前アンケート結果	
	添付3 令和2年度教育内容の確認	
	添付4 令和3年度教育内容の確認	
	添付5 振り返りレポート	
	添付6 令和2年度修了アンケート結果	
	添付7 令和3年度修了アンケート結果	

## 1 教育課程の検討

### (1) 実態の把握（令和2年に実施済み） 添付1、2

2か年計画の1年目である令和2年度は、本事業が対象とする、海外各国の民間の日本語教育機関における状況および日本語教育人材について、二種類の聞き取り、及びアンケート調査を行った。一つ目は、海外の日本語教育機関に対して「求める日本語教育人材と事前に身につけておいてほしいと考える教育内容」について、二つ目は、海外に赴任中もしくは赴任経験のある教師に対して「海外で日本語教育活動を行うにあたって学んでおくべきと考える教育内容」についてである。

アンケートの内容は、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」（以下、報告書）の「海外に赴く日本語教師【初任】に求められる資質・能力」（p.30）に基づいて、予備調査を行った。その結果、5つの日本語教育機関と44名の教師から回答を得た。この調査結果を基に、報告書の「教育内容」「教育課程編成の目安」と照らし、最終的な項目を定めた。

### (2) カリキュラム・シラバスの検討

（教育課程・シラバス・教材などの成果物 令和2年度3年度「教育課程」「シラバス」参照）

- ・海外の日本語教育機関及び、海外に赴任中もしくは赴任経験のある教師に対して行った事前アンケートの結果を集計、分析したうえで、報告書の「教育内容」（p.56,57）「教育課程編成の目安」（p.92,93）と照らし、「求められる資質・能力」の知識、技能、態度の中から、当該研修において重要と考えられる項目を検討した。
- ・教育課程検討委員会において、海外での日本語教育現場で求められている知識や技能がどのようなものであるかを、改めて有識者の助言を得ながら検討し、必須の教育内容を具体的な科目に編成し直した。

#### ① 受講形式

- ・令和2年度、3年度ともに、研修は全国どの地域に在住していても受講が可能なように、また新型コロナウイルス対策として、zoomと「ひかりクラウド スマートスタディ」（NTT 東日本）を利用し、全てをオンラインで受講できるようにした。特に、令和3年度は、多くの科目をビデオ授業とライブ授業のセットにし、ビデオ授業で知識を得てライブ授業に参加するスタイルにした。これにより、受講者は一定の共通認識を持ってライブ授業に参加することができた。ライブ授業では、ビデオ授業を踏まえて、講師に質問をしたり受講者同士で話し合ったりする時間を多く取った。

## ② 講座アンケート

(教育課程・シラバス・教材などの成果物：令和2年度3年度「講座アンケート」フォーマット参照)

受講者自身の理解のため、また、事務局側と講師が受講者の理解を把握し講座に生かすため、各授業後、講座アンケートを実施した。

令和2年度、3年度とも、毎回ビデオ授業後とライブ授業後、アンケートに受講者自身で学んだことと感想、疑問などを記入することで、理解を深められるようにした。ビデオ授業を視聴した後の受講者のアンケートは、講義2日前に講師が目を通し、ライブ授業に生かすようにした。また、ライブ授業後は、受講者が2日以内にアンケートに記入したものを、事務局から講師に伝え、改めて書面での回答を求めた。講師の回答については、令和2年度は質問した受講者だけに伝えていたが、令和3年度は受講者の質問と講師の回答を受講者全体で共有するというスタイルにすることで、受講者それぞれのさらなる気づきや理解につながったと思われる。

令和2年度は講座前にも「この講座で特に学びたいこと」というアンケートを取ることで受講者が積極的に授業に参加できるようにしたいと考えた。しかし、受講者の学びたいことと講座内容の乖離の可能性を考え、令和3年度は講座前アンケートは実施しなかった。

## ③ スケジュール構成・内容

(教育課程・シラバス・教材などの成果物：令和2年度3年度「スケジュール」参照)

- ・講座は「全体的な知識を得る」「各国の日本語教育事情について知る」「海外で教えるという視点から言語教育に関わる知識を得る」「教育実践をし、意見交換をする」と大きく4つのパートに分けて行うことを検討した。また、【初任】に向けた研修であるが、赴任国・地域の日本語教育機関の事情によってはマネジメント能力も必要になる可能性もあるため研修に組み込むことを検討した。
- ・必要な教育内容を網羅するよう、令和2年度は単位数を51単位時間（ビデオ授業21単位時間、ライブ授業29単位時間、レポート1単位時間）、令和3年度は52単位時間（ビデオ授業20単位時間、ライブ授業31単位時間、レポート1単位時間）とした。令和3年度は、令和2年度で不十分だった「ICT」について、教材作成をする時間を設けるなど改善した。これは、海外で十分な教具・教材が揃えられない地域もあることから、日本語教師には様々なツールを利用して作成する力を求められるが、その活用方法に精通していないという教師もまだまだ多いため、その解決を目的とした。また、「継承日本語」（日系社会ではない）についても新たに盛り込み、より多様性を有す講座となるよう努めた。
- ・特に知識を得る研修内容については、日本語教師養成講座などで教える内容ではなく、海外で教えるということに特化した内容になるよう講師と細かい打ち合わせを行う

こととした。

- ・ライブ授業については、受講者が無理なく研修を受けられるような期間と時間を考慮した。

令和2年度、3年度ともに土曜日の午前（令和2年度1回午後あり）、全10回、約4か月で実施した。

時間：1時間目 9:30-10:15

（10分休憩）

2時間目 10:25-11:10

（10分休憩）

3時間目 11:20-12:05

（10分休憩）

4時間目 12:15-13:00

### （3）研修方法の検討

- ・知識を得るだけでなく、自ら調べる、作成するなど主体的・協働的に学べる学習形態にする。
- ・研修が長期に渡るため、出席できない場合を考慮し、全講座を録画しておき、後日視聴できるようにする。
- ・オンライン研修 1) ビデオ授業 スマートスタディを利用  
2) ライブ授業 zoomを利用
- ・受講者の提出物 1) 講座アンケート、修了アンケート Google フォームを利用  
2) レポート・課題 Google ドライブを利用
- ・受講者の教材のダウンロード Google ドライブを利用
- ・各講師の作成教材のアップロード Google ドライブを利用

### （4）評価の方法を検討

#### ①研修受講者による評価

- ・研修内容と教材の成果に対する評価…各回の研修後にアンケート調査を実施。
- ・研修受講者による成果の自己評価…教育内容について研修後にそれぞれ達成度合いの記入を実施。

#### ②実施機関による評価

- ・研修内容と教材の成果に対する自己評価…カリキュラム検討委員会、教材検討委員会、および研修担当講師それぞれの自己評価と三者間の成果の振り返りを実施。
- ・研修受講者の成果に対する評価…講義への参加度、レポートの結果等による評価を実施。

### ③カリキュラム検討委員会・海外提携機関・評価委員会による評価

上記①②を踏まえた上で事業全体の成果の検討を、カリキュラム検討委員会において行う。

また、海外提携機関も適宜、第三者的な評価を行う。プログラムの中盤と最終時には、評価委員会がそれらすべての結果をもとに事業全体の評価をし、以降の研修実施に反映させる。

## 2 教材の検討・開発

教材検討委員会を組織し、以下のようにカリキュラム検討委員会が作成したカリキュラムに対応した教材を検討し、開発・作成する。

1. カリキュラム検討委員会が策定した教育カリキュラムに従って、研修教材検討委員会が必要な教材の骨子を固める。
2. 上記1. 教材の具体的な内容を、体裁・フォーマット等とあわせ、研修担当講師に対して示し、作成を依頼する。
3. 最終的には、研修教材検討委員会が全体のとりまとめを行い、本研修の教材として完成させる。

研修の実施に際し、効果的な教材の提示を検討した結果、以下のように準備した。それぞれの目的と内容、成果・課題を示す。現物は「教材等の成果物」参照のこと。

### ①講師作成のPPTフォーマット

(教育課程・シラバス・教材などの成果物：「PPTフォーマット」参照)

目的：各科目、表紙やフォント、フォントのサイズを統一することで見やすくする。

内容：フォントはUDデジタル教科書体を用い、フォントの大きさは、28-48程度とした。特にビデオ授業ではスマホで受講する受講者もいるため、文字が小さくなりすぎないようにした。

提出：令和2年度はメールで送付

令和3年度は講師ごとのドライブを設け、講師にアップロードを依頼

提出期限：講座の2週間前

成果・課題：各講師がそれぞれ作成したものにも統一感を持たせられた。文字の大きさを指定することは必要

## ②ビデオ

目的：知識を伝える内容をビデオ授業とし、受講者が時間に縛られることなく視聴することができる。

内容：ビデオではできるだけライブ授業に向けての課題も示し、ビデオ授業とライブ授業の連動を図る。

PPTを使用する際、できるだけ講師の顔が右上に出るようにする。

提出：講師ごとのドライブを設け、講師にアップロードを依頼

提出期限：講座の2週間前

成果・課題：ビデオ授業で得た知識をもとに考え、ライブ授業では受講者同士意見を述べあったり、講師に質問したりすることで、ライブ授業を有意義に使えた。

ビデオに講師の顔が出ていることでライブに近い感覚でビデオ授業を視聴できる。

## ③ノート（教育課程・シラバス・教材などの成果物：「ノート」例参照）

目的：令和2年度は受講者に資料を渡しておらず、アンケートでも資料の配布を希望された。その反省をもとに、令和3年度は受講者が書き込める授業のレジユメの作成を各講師に依頼した。各自授業での学びをまとめることで理解の促進を図り、自己評価にも活用する。

内容：各科目ごとの授業のレジユメで、受講者が授業に参加しながらメモが取れるようにしたもの。

提出：講師ごとのドライブを設け、講師にアップロードを依頼。

受講者には提出を求めない。

提出期限：録画配信の1週間前

課題・成果：受講者の75%が「ノート」を使い、メモを取ったという結果が出た。「ノート」を使わなかった受講者は自分でメモを取っていたとのこと。「ノート」を使用した令和3年度は、受講者からこれ以上の講師の資料を求める声は出なかった。「ノート」は手元に残るため、研修を振り返ることができる。また自己評価にも活用できる。

## ④講座アンケート

（教育課程・シラバス・教材などの成果物：令和2年度3年度「講座アンケート」フォーマット参照）

目的：各回の講座について、受講者の感想、ニーズなどが把握できる、また受講者自身も講座内容について改めて整理をし、講師に質問ができる。

令和2年度 内容：講座前アンケート この講座で特に学びたいこと



講座後アンケート この講座で新しく学んだこと、考えたこと  
講座後の感想

提出：Google フォーム

提出期限：講座翌日

講師の回答：講座アンケートを講師に送り、受講者の質問の回答を依頼。  
回答のあったものから、質問した受講者にメールで送付。

令和3年度 内容：講座アンケート この講座で学んだこと  
この講座の感想  
本日の講座内容について講師への質問

提出：Google フォーム

提出期限：講座翌日。アンケートは遅れても構わないが、講師への質問  
は講座翌日までのものとする。

講師の回答：講座アンケートを講師に送り、受講者の質問の回答を依頼。  
講座終了後、5日程度でドライブにアップし、受講者に共有する。

成果・課題：令和2年度に行った講座前アンケートは、受講者の学びたいことが講座内容と乖離することがあり、講座への不満にもつながることを懸念し、令和3年度は行わなかった。また、令和2年度は、質問への講師からの回答を、質問した本人にだけ知らせていたが、共有することでさらなる学びにつながると考え、令和3年度は、一人の質問の回答も全員で共有するようにした。

#### ⑤振り返りレポート

目的：全体を通して、講座を振り返ることで、受講者自身が今後どのようにこの講座を生かすか考える。

本研修で受講者が学んだことや考えたことなどを事務局側が把握するため。

内容：「この研修で学んだことを、今後どのように生かしていこうと考えていますか」

形式：自由。A4、1枚。

提出期限：全講座終了後10日程度

提出方法：メール

成果・課題：全体を通じた振り返りレポートは、受講者自身、省察する機会になった。  
また、事務局にとっても受講者の感想や考えを把握する機会となった。

#### ⑥修了アンケート（令和3年度のみ）

（教育課程・シラバス・教材などの成果物：令和3年度「修了アンケート」フォーマット参照）

目的：受講者が振り返りレポートには書けなかったことを拾い、本研修に対する総合評価を得るため。

内容：・研修は有意義だったか・日程は適切だったか・研修に参加する曜日、時間帯・受講料・講義の「ノート」・連絡の方法・研修で取り上げてほしかった内容・その他

提出期限：全講座終了後10日程度

提出方法：Google フォーム

成果・課題：講座内容だけでなく、事務的なことなども含め、本研修の反省につながることを聞くことができた。

#### ⑦研修スケジュール

（教育課程・シラバス・教材などの成果物：「研修スケジュール」参照）

目的：日時、内容、担当講師をわかりやすく知らせるため

内容：大まかな内容、科目名、担当講師、ビデオ授業を視聴する期間、ライブ授業の日時

提示：Google ドライブで受講者と共有

「ノート」「講座アンケート」「研修スケジュール」「課題」などは、受講者が各自ドライブからダウンロードしたり、閲覧したりできるようにした。

## 3 養成・研修の実施

### （1）目標

- ①自らが異文化の環境に置かれる新任の日本語教師が、教育実践の前提となる知識と技能、生活・文化に関する知識と自立する技能、そして文化多様性・社会性に対する態度を学び、赴任国・地域で生かせるだけの基礎を身につけること。
- ②日本語の教授に関する知識、成長する日本語教師になるための技能、言語教育者としての態度、学習者に対する態度について学び、赴任国・地域で生かせるだけの基礎を身につけること。

(2) 修了要件

- ①日本語教師有資格者であること（養成講座 420 時間修了または日本語教育能力検定試験合格、大学で日本語教育の主専攻副専攻）
- ②全体の出席率が 90%以上であり、かつ毎回の事後アンケートを提出していること。  
なお、録画受講の場合は録画動画の視聴とアンケートの提出をもって出席とみなす
- ③課題を全て担当の講師に提出、講師が課題を確認し、評価する。  
その際、評価が C (70 点) 以上であること。

課題の評価基準

- A： 目標を十分に達成し、かつ優秀な成果をおさめている B： 目標を達成している  
C： 目標を最低限度達成している F： 不可

(3) 科目ごとの実施状況

「知識」に関わる科目については各界の専門家が担当し、「技能」に関わる科目については海外の提携教育機関および海外での日本語教育経験者が中心に行う。

## 4 研修内容と報告

(1) 令和2年度

科目名	海外で必要な能力
担当講師	加藤早苗（インターカルト日本語学校校長）
単位時間数	2 単位時間
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外に赴く日本語教師に求められる能力や役割について理解する</li> <li>・海外の現役日本語教師の事例から、国や文化、それぞれの機関の役割による違いや特徴を理解する</li> <li>・海外においては自らが外国人となる教師自身が、異文化について学ぶ</li> </ul> <p>必要性を理解し、今後の継続的な学びに繋げる</p>
教育概要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 当研修の概要</li> <li>2. 海外で日本語を教える人に求められる能力</li> <li>3. 海外で活躍する日本語教師たちへのインタビュー</li> <li>4. 海外に赴く日本語教師に必要なこと</li> </ol> <p>～異文化理解を中心に～</p>
内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 当研修の概要</li> <li>2. 海外で日本語を教える人に求められる能力 知識、技能、態度</li> <li>3. 海外で活躍する日本語教師たちへのインタビュー</li> <li>4. 海外に赴く日本語教師に必要なこと</li> </ol> <p>～異文化理解を中心に～</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p><b>【受講者の声】</b></p> <p>◆授業で学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・赴任する国によって心得となるものが違うのだと分かった。漠然と海外で教えたいと思っていたが、どの国で教えるのか絞って考えようと思った。</li> <li>・日本語教師は単に日本語を教える人間ではなく、教育者として学習者の人生をより豊かにするための手助けができる知識が必要になると分かった。そのために、相手の文化に理解を示し、さらに日本についての知識も必要だと思った。</li> <li>・日本語と現地語の言語的な違いを比較し授業に反映させるために、現地語の習得はもちろん、基礎となる教育能力を養うことの重要性。</li> <li>・学習者のキャリアプランについて、日本語を勉強することはそれ</li> </ul>

	<p>自体ゴールでなく、次のステップへ進むツールで、日本語を勉強することで人生がより豊かになること知ってもらい、より広い可能性を引き出すのが日本語教師の役割ということ。これは国内でも常に念頭に置いて学習者と接したい。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・自らが異文化を知り理解し楽しむこと、そして積極的に行動することの大切さを学んだ。自分はどんな引き出しを持っているのかどんなことができるかを考えた。そしてこれは海外か日本かを問わず、すぐにでも実行できることがあれば授業に生かせるものでもある。</li><li>・日本語を教える事だけに焦点を絞ってもそれだけでは不十分である、異文化社会で生きる力、赴任国の生活の中から経験も授業にとり入れる事が有効であること。</li></ul> <p>◆授業を受けて感じたこと、考えたこと</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学習者の日常生活の中で、日本語と触れ合う機会を増やしてあげることこそ、日本人教師が現地に赴いて活躍する意味があると感じた。</li><li>・現地のことを理解した上で、授業準備をし、学習者に合わせた授業を提供することは学習者の理解を促すだけでなく、学習者との距離を縮めるためのきっかけになるかもしれないと思った。</li><li>・学習者は教師というフィルターを通して日本を見ている、という言葉を見た時に緊張感を得た。</li><li>・海外でどの教育機関（現地日本語学校、公立学校、送り出し機関等々）に携わるかによってスタンスが変わってくるかと思うが、教育の中の語学教育というカテゴリーだけでなく、もっと大きな枠組みの「教育」について意識を持って取り組まなければならないことに海外で働くことの難しさを感じた。</li><li>・ニーズが多様化している中で、自分は誰に対して教えているのか、自分は誰に対して教える力があるのか、得意なのか考える必要があると思った。</li><li>・海外に赴く前に身に付けたい事柄の外観を学んだ。しかし渡航前に全て網羅するのは現実的には難しい。自己を理解したうえで必要なことを準備し、現地では柔軟な姿勢が必要だ。</li></ul>
参考資料	

科目名	国際関係・海外の日本語教育事情
担当講師	西原鈴子
単位時間数	4 単位時間
目的	日本から海外に赴任する日本語教師のために、知っておくべき教育関連のテーマを、教育理念、教育機関、言語政策、教育文化の4側面から考察・検討し、紹介する。
教育概要	提供した4コマのタイトルは以下の通りである。 (1) 国際関係・国際情勢 (2) 海外における日本語学習 (3) 赴任国・地域の日本語教育事情 (4) 赴任国・地域の言語政策
内容	各テーマの内容は以下の通りである。 (1) 国際関係・国際情勢 SDGs、キーコンピテンシー、21世紀型スキル、CEFR (2) 海外における日本語学習 世界全体の日本語教育概況、各地域の日本語教育概況 (3) 赴任国・地域の日本語教育事情 日本語母語話者としての役割、赴任先ですべきこと 赴任先で期待されること (4) 赴任国・地域の言語政策 言語政策とは何か、日本語教育に関連する言語政策 世界の言語政策例 以上4つのテーマに関して、調査・研究データを紹介し、実際に海外に赴任するとき備えるべきことについて考察した。
受講者の声／ 成果と課題	《受講者の声》 1 「国際関係・国際情勢」 ・ 今後は、住む地域に関わらず多文化共生が求められる世の中になっていくと思うので、日本語教師だけではなくどんな職業であっても「地球市民」という言葉を意識していきたい。 ※CEFRに関して ・ 習得した言葉を使って何ができるのか、いかに行動するのが重要であるということを再確認した。

	<ul style="list-style-type: none"><li>・言語習得の判断基準が知識量ではなく、「何ができるのか」という実用性を重視したものが主流となっているので、この基準をクリアするための教授法が必要なことが分かった。</li></ul> <p>※SDGs に関して</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・SDGs が日本語教育にも深く関わりがあることや、その 10 の目標を詳しく知ることができた。</li><li>・日本語教育が日本社会、そして世界で起きている問題の解決策につながっていると知り、目の前の学習者の日本語を伸ばすことも大事だが、その先にある世界的な貢献にも目を向けていきたいと思った。</li></ul> <h2>2 「海外における日本語学習」</h2> <ul style="list-style-type: none"><li>・国ごとの政策や文化の違いが反映されていることが分かり、赴任国によって生徒のモチベーション維持のさせ方が変わってくるということが分かった。今後の調査結果により日本語教師のあり方も変わっていく必要があるのではないかと。</li><li>・国や地域により学習目的にも差異があり、どの教育段階で学習するかによっても目的、ニーズが異なってくるということが理解できた。日本語教師には目的に応じた指導が求められる。</li></ul> <h2>3 「赴任国・地域の日本語教育事情」</h2> <ul style="list-style-type: none"><li>・現地教師の優位性に関して、「日本語教育の目的は日本人をもう一人作ることではない」という話を聞き、自身の経験から、そんな風に指導していた事が間違いであった事に気づいた。</li><li>・海外では自分が外国人であることを忘れず、また学習者への理解を常に心がけ、自分の立ち位置や役割をしっかりと把握していこうと思う。</li><li>・赴任先ではまず自身が異文化に適応し、自文化中心主義からの脱却する必要があることを心得た。</li><li>・「臨機応変に」というのがよく海外で働く教師の適性に求められるが、態度のみならず、自分の持つ日本人っぽさ、日本の考え方なども臨機応変に出し入れできるようになるべきなのだと思った。</li><li>・それぞれの立場を考慮することが重要な一方で、現地のシステムが化石化しているところもあると思う。対等な立場で話し合い、お互いの合意の元で、よりよい日本語教育を目指すことも大事だと思った。</li></ul>
--	--



	<p>4 「赴任国・地域の日本語施策」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言語選択からその国の歴史や文化を見られることが分かった。</li> <li>・赴任先の言語政策や、学習者の民族語と公用語との関係といった言語環境、背景は日本語の学習動機とも関わり、適した日本語指導を行ううえで必ず調べておくべきであることを理解した。</li> <li>・日本語を第三外国語として学校教育に取り入れている国があり、これは国同士の関係性だけでなく、言語教育そのものが子供の成育段階で効果的な働きをするから、と学び面白い側面だと思った。</li> <li>・日本語教育が単なる語学学習に留まらず、多文化共生を支え、人材育成につながるのだということを改めて考えるきっかけとなりました。</li> <li>・アジア、周辺国は、世界史的背景や経済的背景から日本語教育が存在する、必要とされていることも、教師は自覚的であるべきだ。</li> </ul> <p>◎講座を通して</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・柔軟かつグローバルな視野を持つことが不可欠であり、日本語教師として自分が教室という場で未来を学習者と共に考えていくということが重要なのだと考えることができた。</li> <li>・今後の言語教育の在り方に関して、言語教育はより深く社会に参加し、より多くの場面で自分らしさを発揮するための手段であり、それを教える自分の立場は、言語教育の枠を超えて、「教育」そのものに根差した教師でなければならないことを実感した。</li> <li>・諸外国では低年齢で日本語を学ぶことから、低年齢者への学習指導の面も考慮した教授法があれば学んでみたい。</li> <li>・海外の現地で求める日本語の教員と海外に向かう日本語教師の問題のとらえ方が違っている。現地で求められる日本語教師の内容を赴任前に告知しある程度のレクチャだけでなく、現場の状況を踏まえた模擬授業や生活サイクルの実施をすべきである。</li> </ul>
<p>参考資料</p>	<p>カルヴェ, ルイ＝ジャン (西山教之訳) 2000 『言語政策とは何か』 白水社</p> <p>河原俊昭 (編) 2002 『世界の言語政策—多言語社会と日本』 くろしお出版</p> <p>河原俊昭・山本忠行 (編) 2004 『多言語社会がやってきた—世界の言語政策Q&amp;A—』 くろしお出版</p> <p>国際交流基金 2010 「J F 日本語教育スタンダード 2010」</p>

	<p>国際交流基金 2019 『海外の日本語教育の現状』 グリフィン・R/マクゴー・B/ケア・E (三宅なほみ監訳) 2014 『21 世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち』 北大路書房 JICA (独立行政法人国際支援機構) ホームページ <a href="https://www.jica.go.jp/sdgs/index.html">https://www.jica.go.jp/sdgs/index.html</a> 平高史也 2005 『総合政策学としての言語政策』 総合政策 学ワーキングペーパーシリーズ 83 慶応義塾大学大学院・メ ディア研究科 文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 2020 「日本語 教育の共通参照枠に関するワーキンググループ一次報告(案)」 ライチェン・D./サルガニク・L (立田慶裕監訳) 2006 『キー・ コンピテンシー 国際標準の学力を目指して』 明石書店 三好重仁 2003 「言語政策・言語計画」 小池生夫(編)『応用言 語学事典』 研究社 353-362 Daoust, D. 1997 Language planning and language reform. In <i>Proceedings of the International Colloquium on Language Planning</i>. University of Laval Press 406-428 S p o l s k y, B &amp; S h o h a m y, E. 2000 language practice, language ideology, and language policy. In Lambert &amp; Shohamy (eds.) <i>Language Policy and Pedagogy</i>. John Benjamins 1-41 山本忠行・河原俊昭(編著) 2007 『世界の言語政策 第2集』 くろしお出版 吉島茂/大橋理枝(編訳) 2004『外国語の学習、教授、評価のた めのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版社</p>
--	--

科目名	日本語教育事情 マレーシアの事例
担当講師	西尾亜希子 (ATOZ ランゲージセンター)
単位時間数	2 単位時間
目的	マレーシアでの日本語学習状況や民族性を知り、ATOZ ランゲージセンターでの活動や在職する日本語教師の声などを通してマレーシアにおける日本語教育事情を学ぶ
教育概要	マレーシアにおける日本語教育事情
内容	<p>1. 自己紹介 自己紹介に絡めて、自分自身が日本語教師を目指した理由と今の学校立ち上げの経緯と当時の意気込み、学校や日本語教育に対する想いを紹介した。</p> <p>2. 当校について クアラルンプール2拠点、ジョホールバル、ペナンと合計4拠点のスタッフや立ち上げの経緯、事業内容などを紹介した。</p> <p>3. イベントについて 夏祭り、カラオケ大会、スピーチコンテスト、多読、料理教室などの今までに行ってきた交流イベントについて紹介をした。</p> <p>4. 授業について 現在行っているクラス（インテンシブクラス、グループクラス、プライベートクラス、企業レッスン）の使用テキストや対象者、授業時間や学習の目的、注意点などを説明した。</p> <p>5. 日本語教師のマレーシア生活 実際に当校の日本人日本語教師にアンケートを取った結果をまとめた。マレーシア人の生徒とは、教えやすさについて、また生活におけるいい点、悪い点などもあげてもらった。</p> <p>6. マレーシア人日本語教師について 1年前からマレーシア人日本語教師の採用を始めたことを紹介しどのような形で関わっているかと今後どうしていくかについて話した。</p> <p>7. コロナ禍マレーシアと当校の取り組み 3月16日のロックダウン以降オンラインに切り替えどのように授業をしているかを紹介した。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <p>※講座で新たに学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現場に密着した、一つの教育機関の経営者から見たミクロな視点を知ることができた。教室で起こることの背景、目の前のこの学生</li> </ul>

	<p>がなぜ学ぶのか、なぜこのように学ぶのかということの背景には、ビジネス・経済の動向が影響を与える。日本語の需要に深く関わる経済、政治、外交、国際情勢に、強く関心を持ちきちんと情報収集していく必要がある。ただ呼ばれたからそこで教えるという態度ではなく、その土地で日本語教育を提供する意義や価値、需要を高めるためにできるように動けるような人材も必要。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・マレーシアは物価が日本と同じくらいで、日本で働きたいという人が少ないということを知った。</li><li>・マレーシアは多民族国家で文化や価値観が民族で違うため、現場では異文化の相互理解が重要だと感じた。</li><li>・日本語学習者の動機について、マレーシアでは個人の趣味や知的好奇心が中心であることが分かった。</li><li>・海外へ赴任する際は、その国の教育制度、社会情勢、経済状況、風土、文化、歴史などさまざまな背景をできる限り知っておく必要がある。また、その国の教員との連携の必要性も改めて感じた。</li><li>・マレーシアの多民族性について。様々な宗教や人種のなかで、その文化を理解しリスペクトしたうえで授業を組み立てる必要がある。</li><li>・マレーシアでは生徒の民族を判別しそれに配慮した話題を授業で取り上げる必要がある。多民族国家ということで同じクラスに様々な学生がいる環境は、日本にある日本語教育機関に通じる部分があると感じた。</li><li>・マレーシアで日本語教師として働くうえで戦争の歴史も忘れてはならないことを学んだ。</li><li>・マレーシアの学生は多民族国家ならではの多様な言語環境下で耳が良いという文化背景からフラットな発音で聞き取りやすいということを知った。</li></ul> <p>※講座を受けて新たに考えたこと、感想</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・マレーシアは他民族で形成されている社会であり、宗教の多様性や民族格差についてなどが興味深かった。</li><li>・マレーシアでは混じりあわない多民族国家、それぞれが独自の文化を保っている事が新鮮だった。</li><li>・ATOZ ランゲージセンターでは現地の採用の先生を初めて採用したとのことで、英語教育では他の言語話者が英語を教えるのはよくあり、そこからいろいろと学べそうだった。</li><li>・マレーシア人日本語教師の話は、海外でともに働く仲間として、</li></ul>
--	--

	<p>また、自分が現在日本でかかわる学生の中に、将来そのような道に進むという目標があるとき、その実現のために何をどのように一緒に考えていけばいいかを具体的にイメージすることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・非母語話者講師は重要だと感じた。特に初級の指導場面において、クラスの国籍が同じであるならば、日本語で教えるよりも現地の言葉で説明すれば事足りる。学習者としても心理的ハードルが下がりメリットは大きいと思う。</li><li>・現地では日本文化への関心が高く、書道や華道など、なかなか日本での生活の中であまり触れないところにアクティビティとしての需要があり、一芸身に着けることも大きなアドバンテージになると思った。</li><li>・オンラインレッスンへの移行などが今後の課題になると思うので、これから教師になるにあたり ICT の能力が必要だと感じた。</li></ul> <p>※取り上げてほしかった内容について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・私自身まだ授業をしたことがないので、授業に即した内容で、教科書、PCをどのように活用しているのか、授業準備はどのくらいやっているのかなども知りたかった。</li><li>・現地在学生、卒業生のトレース（どのように学習者向き合えばいいのか）なども盛り込んで欲しい内容だった。</li></ul>
参考資料	なし

科目名	日本語教育事情 イタリアの事例
担当講師	西岡芳栄
単位時間数	1 単位時間
目的	イタリアにおける日本語学習の現状や、学習者のニーズについて知る。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イタリアと日本の関係</li> <li>・イタリアの教育事情</li> <li>・イタリアの日本語学習事情</li> </ul>
内容	<p>イタリアと日本は友好関係を150年以上前から続けている。</p> <p>現在は日本文化に関心を持つイタリア人がその延長線上で日本語学習を始める場合が多い。そこで、日本語学習に関心を持つ人がイタリアでどのような場で日本語を学ぶことができるのか、現状を初等教育から高等教育にかけて説明した。</p> <p>また今後イタリアで日本語教育に従事することを希望する方に、どのような機会があるのか、またどのような心構えが必要かについても話した。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <p>※イタリアの日本語教育事情に関しての気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イタリアではアニメなどを見た第1世代が日本語を勉強するには周りの理解が得られにくかったが、第2世代の今、若い人が増えていると知り、興味深かった。</li> <li>・イタリアで日本語教育が盛んであり、特に親子2代に渡ってアニメを通して日本語に興味を持ち、勉強をしている学習者がいることを知った。</li> <li>・アジアの国とは違い、日本文化への興味から日本語を学びたいという人がほとんどなので、勉強へのモチベーションの違いが興味深かった。</li> <li>・アニメなどの日本のサブカルチャーを通して、無意識的に日本文化がイタリア人の中に入り込んでいっているというのはとても興味深かった。</li> <li>・イタリアは多言語に触れる機会が多く、日本語も言語を通して文化を知るといふ好奇心が強いのかと感じた。そのため、授業は実用的なものというよりも学習者の興味が失われないように工夫していく必要があるように感じた。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・イタリアの日本語教育について学校制度のいつから日本語が科目として入ってくるのか、またその目標などとてもわかり易かった。</li><li>・イタリアでは就職目的よりも純粋に文化を学びたいと思っている学習者が多いこと。</li><li>・イタリアにたいするステレオタイプの社交的なイタリア人は間違いで、北部、中部、南部で違うことを知った。</li></ul> <p>※成果</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・単一言語国家であっても近年は移民の流入により多文化社会化が進んでいることは欧州諸国に共通であろうと思う。赴任して初めて知るその国のマイナスな面も前向きに捉えて、その国の社会の一員として自分から積極的に社会に入っていく心構えが必要であること、学習者の文化や考え方を拒否しては学習者との信頼関係を構築できないことなど、求められる姿勢を学んだ。</li><li>・各学生の指導にあたり、対照言語学的知識や、文化背景などをよく理解し配慮したトピックの選定や教授法を取り入れていきたいと思った。</li><li>・海外へ赴任する際は、その国の教育制度、社会情勢、経済状況、風土、文化、歴史などさまざまな背景をできる限り知っておく必要があると感じた。また、その国の教員との連携の必要性も改めて感じた。</li><li>・日本人教師に共通して求められることは、教室や学習環境の場を小さな日本社会としてとらえ、学習者の日本への興味関心を引き出すことではないかと感じた。</li><li>・現地では日本文化への関心が高く、書道や華道など、なかなか日本での生活の中であまり触れないところにアクティビティとしての需要があり、一芸身に着けることも大きなアドバンテージになると思った。</li><li>・インターネットの発達により、学習者が様々な形で日本と触れ合う機会が多くなり、いろいろなところにアンテナを張っておく必要性、またアニメでもどのアニメがテレビで放送されているのかも知ることが大事だと思った。</li></ul> <p>※課題</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ポジティブな意見が多く出ていたので、日本人が現地で困難に感じること、学習者が日本語教師に望むことや改善点などマイナスな</li></ul>
--	---

	<p>側面に関しての情報もあるとよかった。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・各国で日本人講師の絶対需要はあるのか、現状の政府ビザ認可状況についての話等も一部含まれていたが、政府等渡航実務面に突っ込んで、今の入国可能性を知りたかった。いい面だけではなく、特殊な現状と見込み等、現地ならではのニュースをシェアできれば、尚有意義ではなかったと思う。</li></ul>
参考資料	国際交流基金 日本語教育国 地域別情報 イタリア



科目名	日本語教育事情 アメリカの事例
担当講師	井上 とも子
単位時間数	1 単位時間
目的	アメリカ合衆国における日本語教育の状況を歴史や教育制度などの大枠を知り、公立高校と日本語補習校で実際に働く日本語教師の声を通して、現状のアメリカ合衆国における日本語教育事情を学ぶ。
教育概要	日本語教育事情 アメリカ合衆国の事例
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● アメリカ合衆国と日本との関係</li> <li>● 日本語学習者の状況、日本語教育の歴史</li> <li>● 日本語教育事情：国の特徴、日本語教育機関の種類、学習者数、対象者および学習目的（中学生、高校生、大学生、社会人、海外在住日本人）など</li> <li>● アメリカの教育制度内の日本語教育の位置づけ</li> <li>● 教員資格、日本語教師会</li> <li>● 公立高校と日本語補習校の教育内容、授業の様子、イベント、オンライン教育への取り組みなど</li> <li>● 高校生、海外在住日本人が日本語を学んだ後の様子</li> </ul>
受講者の声／ 成果と課題	<p>「受講者の声」</p> <p>※授業で新たに学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカの学習者は明確な目的をもって日本語を学習する。教育は常に動いているので、古い教育の考え方に固執しては学習指導の面で、かなり難しく、フレキシブルな状態で新しい事を学んでいかなければならない、という点が印象的だった。</li> <li>・授業内のインタビューであったが、その国の言語を学んでいく中で、どうして学習者の誤用が生まれるのかも理解しやすくなるため、その国の言葉を学ぶことはとても重要だと再確認できた。</li> <li>・アメリカの学習者は、大学生など若い人が8割を占め、アメリカ人だけでなく、日本人にも日本語教育のニーズがあるということ。</li> <li>・学習者（子供たち）の親と話すために赴任先の語学力（この場合は英語力）が不可欠である。ただ話すだけではなく、説得し、理解してもらい、共感も得なければならない状況があり、生半可な語学力では通用しないと感じた。</li> <li>・アメリカでは教科書が高額であることを初めて知った。国によっては使用したい教科書が手に入りにくい可能性もあるので、インタ</li> </ul>

<p>ーネットをうまく活用して自分で適切な教材を作れる能力が必要だ。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・大人は学習目的があるが、高校生以下の子ども達は目標がないことが多い。異文化交流として日本語教育を行うなどモチベーションの維持につながるなにか別の視点を持つことが大切だと感じた。</li><li>・海外では自分のティーチングスタイルに合う教材を日本で用意して行くと役に立つ。</li></ul> <p>※ハイブリッド授業について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・現在の状況下でオンライン授業についてはよく話題になるが、ハイブリッド授業についてはあまり考えたことがなかった。オンライン授業オンリーに比べて大変な面は多々あるだろうが、上手くやればメリットのほうがより大きいだろうと思った。</li><li>・オンライン授業と対面授業とのハイブリッド授業で工夫されていること、カメラの設置や在宅受講生のモチベーション維持について、とても勉強になった・</li><li>・クラスでもオンラインでも同じスピードで学習できるように指導するのは、とても難しく経験が必要になると感じた。</li><li>・コロナが落ち着いた後も、対面とオンラインのハイブリッド型教育が進んでいくのではないかとこのことで、時代の流れに適応して教師も化石化することなく、状況に応じて学び、教え方も変えていくことが今後日本語教師を継続する上で必要であると思う。</li></ul> <p>※授業を受けて考えたこと</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日本語を学ぶ理由について、自身の価値観を一步広げるための文化学習であるという話が印象に残った。改めて、言語教育がただの言語への学びにとどまらない多くの意義を持つものなのだと実感した。</li><li>・海外の中学・高校で日本語を学ぶ意義や目的について、自分が何かをしたいからではなく、世界は自分の国だけではなく色々な国の人々が協力してできているのだから、文化理解が大切というより必要だということは、アメリカに限らず世界中の児童・生徒、そして大人にも当てはまることだと思った。</li><li>・今回補習校について初めて知ることが多く、日本語教育といっても、多様な学習者や学習機関があるのだということ、様々に携わっていくことができるのだと再認識した。</li></ul>
---

	<p>・公立校、補修校、学校の形態は違えど、先生方の思いは共通で、できる限りの努力をし続けることはどの現場にいても教師として必要な能力であると感じた。</p> <p>・「いつも新しいこと」と言われることの中にコロナなどの状況だけでなく、そもそもある学習背景、目指すところの違いそういうものをたくさん吸い上げて、学ぶこと自体を常に問い直しながら最適解を探さなければならないことがこれからもっと加速していく気がしている。</p> <p>「成果と課題」</p> <p>本講座では、アメリカの日本語教育や日々の授業を取り巻く様々な話題を、長年アメリカで日本語教育を行ってきた教師へのインタビューを交えて、具体的に紹介した。</p> <p>受講者は興味を持って学ぶだけでなく、個々の事柄に対して個人的な興味や、疑問、意見を持ち、またこの知識を今後の自分の日本語教育にどう活用するかに発展させた受講者もいた。それらの受講者の興味、疑問、意見などは、講座の中で講師と学習者、学習者同士が話し合う時間やスペースを設けることによって、更に深い有益な学びに発展させることができると思われる。</p>
参考資料	なし

科目名	日本語教育事情
担当講師	坂本彩（インターカルト日本語学校講師）
単位時間数	1 単位時間
目的	海外に赴任する前に自身で調べておくべき項目について考え、調査してみることで、実際の赴任時に役立つ調査能力や観点を身につける。
教育概要	日本語教育事情（自主調査）
内容	<p>事前課題：既に受講済みの講座「国際関係・海外の日本語教育事情」「日本語教育事情マレーシア・タイ・ベトナム・イタリアの事例」を参考に、受講生各々が興味を持っている国、赴任したいと考えている国の日本語教育事情について調査をする。 調査項目は指定せず、各自必要だと思う項目を調べてもらった。</p> <p>ライブ授業：ブレイクアウトセッション機能を使い、グループに分かれ、事前課題で調査した内容を共有してもらった。 各グループ 5～6 名で、授業内で 2 回のグループセッションを行った。</p> <p>受講生が調査してきた項目は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各国の基本情報：人口、教育制度、言語環境、言語の特徴、国民性、住環境、インフラ、物価</li> <li>・日本語教育の概要：歴史、学習者数、教育機関、教師数、学習動機、日本語教師の需要、雇用条件</li> <li>・その他：各民間語学学校・大学の給料等の待遇面や応募資格ビザの取得について 赴任経験者の体験談（使用教材、授業時間数など） 日本語学習者へのインタビュー （教師に求めるものなど）</li> </ul> <p>授業後：調査結果を A41 枚程度にまとめ提出。その後、受講生に全ての調査結果を共有した。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>「受講者の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・住居環境や収入など、生活していく上で必要となる面にフォーカスされた方や、日本と全く生活環境の異なるアラブの国や山奥で日本語教育を広めていきたいと熱く夢を語る方がいたり、興味のある国への関心のポイントが異なっているのが面白く、新しい発見が</li> </ul>

	<p>たくさんあった。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・タイなどのリソースが豊富な国を目指している方の発表を聞いて、リソースが多い国を選ぶということもまだ経験が浅いうちは成長のスピードを考えても必要なことかもしれないと感じた。</li><li>・フランス、アメリカ、カナダの教育事情について聞き、アジア圏の国とは違い、どの国も純粋に日本に興味を持った人に教えることになるとのことで、教師自身の日本語以外の日本らしさを求められるように思った。</li><li>・ラオスの教育事情を聞き、現状日本語の教育機関は少ないものの近年日系の工場がタイから移動してきており、今後日本語需要が高まる可能性があるとのことだった。安価な人件費を求めて、工場が移転していき、それに追従して日本語教育、日本語需要が高まるというのは理解しやすい論理だが、今後このような安価な人件費を追い求めることが続くのか、続いていいのかとも思った。</li><li>・現地に日本企業が進出しているか、または技能実習制度が確立されているか、などの違いで日本語教育の普及率は大きく異なる。現地にまったく日本人がいなかったとしても、文化交流センターなどを通して、独自に日本文化の普及に取り組んでいる国もあるということが、とても興味深かった。</li><li>・日本語教育についてあまり普及されていない国や、そもそも日本人自体の在住・在留が少ない国の日本語教育や日本文化への取り組み方は独自の方法をとっており、むしろあまり知られていない国の話のほうがとても面白く興味深かった。</li><li>・日本で得られる情報量はその国の学習者数、機関数、教師数や需要に比例している場合が多いように思った。</li><li>・すでに教えている教師の多い国、部門を選ぶことと、あまり経験者のいない国などに興味を持つ場合ではリソースの探し方、人との繋がり方など工夫の観点も違うかもしれないと講座を通して再認識した。</li></ul> <p>「成果と課題」</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・受講生自身が調査した国以外に、さまざまな国の日本語教育事情を知ることができたと同時に、赴任前にあらゆる視点・観点から赴任国を調べることの重要性を認識できたのではないかと。</li><li>・他の受講生と話す時間を持てたことで、それぞれのバックグラウンドや思いを話し、互いに刺激し合い日本語教育へのモチベーション</li></ul>
--	--

	<p>ンにもつながる有意義な時間となった。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・各グループでの共有時に口頭での発表としたが、資料にまとめることまで事前課題にしていれば、画面共有ができ、各自の発表がよりスムーズに行えたのではないか。</li></ul> <p>「成績」 A:41名 B:5名 F:8名</p>
参考資料	なし

科目名	多文化社会
担当講師	清水広美
単位時間数	1 単位時間
目的	ボリビア多民族共和国の日系社会の事例から、日本はどうであるか、受講者が自分ごとにおきかえ、真の多文化共生とはどういうことかを考える。
教育概要	ボリビアの日系社会と継承語教育、アイデンティティーについて。
内容	<p>本講座の中では、時々受講者の既成概念を外す試みをした。例えば、3つの世界地図をはじめに見せ、最後にもう一度見せて、同じものでも見る角度によって、違って見えることに気づかせる等。</p> <p>また、ボリビアは、多言語・多文化社会であるが、その中で日本人はマイノリティーである。日本人の海外移住の歴史を概観し、ボリビアの日系人の継承語教育について戦前移住と戦後移住の違いをその背景から考察。また、母語と母国語の違い、アイデンティティーとは何で決まるか、サードカルチャーキッズという概念についても触れた。そして多様性とは何か、多文化共生のために必要なことは何か考えた。最後に、今後海外派遣される際の心構えとして「当たり前を疑い、思い込みを捨てる」というメッセージを伝えた。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本が共生社会となるために、異なるもの同士が共に生きる社会を創造する手段としての「やさしい日本語」の存在に気付いてもらう活動をすることができるのではないかと考えた。</li> <li>・移住地の取り組みによって、母国語であるはずの日本語が外国語の一つとして扱われているという現実を初めて知った。</li> <li>・南米ボリビアの教育事情について知り、世界中に日本語学習者がいるのだと改めて思った。</li> <li>・常識を再考してみることや、海外では自分がマイノリティーだと考えて行動することが多文化社会の中では必要なことだと感じた。</li> <li>・自文化中心主義に知らず知らずのうちに陥ってしまう恐ろしさ。</li> <li>・日本で学ぶ留学生の気持ちがわかる、想像できるのは日本語教師に不可欠な資質ということも、日々学習者と接するうえで常に心に留めておきたい。</li> <li>・多文化共生を実現するため、自分以外の誰かのことを想像する力、多角的な視点を養わなければいけないと学んだ。</li> <li>・日系人対象の日本語教育について、その歴史背景、事情、状況により、継承語としての日本語教育というよりも JFL 環境になってい</li> </ul>

	<p>る場合もあるというのは新しい学びであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人により考え方も多様だと言う事も日々心に留めて置かなければと感じた。</li> <li>・各国の日本語継承語教育の事情を共有するネットワークがあれば良いと思った。</li> <li>・自分の内心にも常に「差別的ではないか、否定的ではないか、不寛容ではないか」と問いかけていきたいと思う。</li> </ul> <p>※多文化社会とは何かについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多文化社会は多様な人たちの自己同一性のぶつかり合いと認め合う事の葛藤だと思った。</li> <li>・多文化社会は国籍に限らず、国内の地域や障害も含まれること。</li> <li>・「多文化共生」とはお互いの文化的な違いを認め、対等な関係を築き、共に生きていくことであると思う。</li> <li>・まずは身近な学習者の国について知ることも多文化社会・多文化共生につながると思った。</li> </ul> <p>※サードカルチャーキッズについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いくつものルーツを持っている子供たちが新しい文化を創っていくということは素晴らしいことであり、それこそが文化の多様化だと思った。</li> <li>・個人の中に複数の文化を持っていていいわけで、相手が何人であろうとその人に魅力があることには変わりはないのだと改めて感じた。</li> </ul> <p>《成果と課題》</p> <p>多文化共生とは何か、海外に身をおくということはどういうことなのか考える手掛かりとなったと思われる。</p> <p>質疑応答の時間がとれなかったため、事後アンケートで後日回答することになった。</p>
<p>参考資料</p>	<p>外務 HP<a href="https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bolivia/index.html">https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bolivia/index.html</a>          海外日系人協会 HP  <a href="http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html">http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html</a>          一般社団法人日本ボリビア協会 HP<a href="https://nipponbolivia.org/">https://nipponbolivia.org/</a>          『日本人移住 100 周年誌 ボリビアに生きる』 ボリビア日系協会          連合会</p>



科目名	言語の構造
担当講師	石原 嘉人
単位時間数	2 単位時間
目的	東アジアにおける現在の漢字・漢字語彙の使用状況を示し、それと対比する形で日本語の漢字の字形・発音・語彙・文法の特徴を理解する
教育概要	旧漢字圏における言語の構造と表記
内容	<p>1) 表記について 繁体字・常用漢字・簡体字の成立事情と特徴を示し、同時に音声記号の表記についても言及した。</p> <p>2) 音韻について 韻尾「-n/-ng/-p/-t/-k」を中心に、それぞれの音韻体系の相互関連を示し、母語の漢字に関する知識を日本語の「特殊モーラ」習得に役立てる方法を示した。</p> <p>3) 共有されない漢字語彙について 日本語の字音語と各言語の漢字語彙を対比して、共有されない例と語義が微妙に日本語とずれている例を示し、母語の影響による誤用の傾向を示した。</p> <p>4) 同形同義語について 欧米の言語からの翻訳語として共有されている語彙を紹介した。</p> <p>5) 語順・品詞・格助詞について 後置修飾を原則とするベトナム語の漢字語彙の例、語義が近くて品詞が異なるため誤用に結び付きやすい例、格助詞「を」の誤用を招きやすい例を示して、頻繁に見られる誤用のパターンを紹介した。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <p>※講座で新たに学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各言語の固有の漢字語彙は興味深く、日本固有の語彙も多数あり、漢字だから漢字圏の学習者には意味が分かるだろうという思い込みが間違いであることを知った。しばしばみかける誤用にはパターンがあり、背景にどのような原因があるのかを知っておくことは、誤用の訂正指導するうえで大変有用だということがわかった。</li> <li>・旧漢字圏の国の学習者にとっては、漢字文化や知識を持つことが、日本語の漢字を習得しようとするときに、誤解を生む可能性があるということ。旧漢字圏のメリットをいかすことばかりに注目していたので、逆影響もあるという視点を知れたことが新しかった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・非漢字圏の人を含め、自動詞と他動詞を格助詞とフレーズで覚えさせることが効率的であると感じた。</li><li>・中国の中古音は日本語の促音のルーツであるということ。</li><li>・音韻の韻尾と特殊モーラについて日本語のモーラ語と韓国語の音節との違いは、手を叩いたりリズムを取ったりして学習者に実際にやらせてみながら提示していくとわかりやすく学習させられることがよくわかった。</li><li>・学習者には初級から拍感覚を身に付けさせることの重要性和、手を叩くだけでなく腹筋で意識させるということは新しい情報だったので、指導方法の幅が広がった。</li><li>・韻尾と撥音・長音との対応関係を利用してパターン別に発声練習するという方法は実際に取り入れたい。</li><li>・「単語ではなく文章で練習、訂正する」は、教える時に必ず実践したい。</li></ul> <p>※講座の感想</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・漢字圏の学生の発音の訂正はその都度やっていたのだが、音韻の「韻尾と撥音・長音の関係」は知っておくと体系的に教えられるので、非常に役に立った。</li><li>・音韻について撥音・長音の日本語の漢字との対応関係はすぐにも実践できる内容だったので、さっそく授業で行おうと思った。</li><li>・日本語教師として外国語を勉強することは学習者の誤用などを論理的に説明する上でとても大切だと実感した。</li><li>・中国語の学習者などは漢字で意味を理解してもらえこともあるが、意味が違っていてトリッキーな言葉の紹介など勉強になった。この違いに敏感なのは日本語学習者であった海外出身の日本語教師であり、なかなか日本母語スピーカーには気づきにくい点だと思った。</li><li>・日本語教師として学習者の母語体系の知識はやはり必要であると改めて感じた。</li><li>・漢字の変遷等、なんとなくで停止していた知識、思考が、本講義を通してかなりクリアになった。また、自動詞、他動詞、発音の指導法等具体的な技法があり実践的だった。</li><li>・旧漢字圏以外を想定した、言語構造に関連する講義も受けておきたいと思った。</li></ul>
--	---

	<p>《成果と課題》</p> <p>短い時間で要点を提示し、それぞれの問題点の「入り口」を提示することはできた。もっと多くの例を示すことができれば理解が深まったかと思われるが、時間的な制約もあり、最小限の例しか挙げられなかった。</p>
参考資料	<p>「漢字圏の学生にとっての漢字語彙習得」2012年 『留学生教育 第9号』 琉球大学留学生センター紀要</p> <p>「ベトナム語話者に対する漢字語彙の指導について」2014年 『留学生教育 第11号』 琉球大学留学生センター紀要</p> <p>※どちらもインターネットで閲覧・ダウンロードが可能です。</p>

科目名	言語習得と人の発達
担当講師	大関浩美
単位時間数	2 単位時間
目的	母語習得および第二言語習得について理解を深め、日本国内と海外での日本語教育における違いを理解し、第二言語習得からの知見を現場に応用できる力をつけることを目的とする。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・母語と第二言語の習得</li> <li>・発達段階に応じた言語学習</li> <li>・日本国内と海外における言語習得プロセスの違い</li> </ul>
内容	<p>1 コマ目では、まず、母語習得と第二言語習得の違いをおさえ、第二言語の習得プロセス、およびインプット・インターアクション・アウトプットの役割を考えた。そして、その役割が海外ではどのように変わってくるか、どのような工夫が必要かを考えた。</p> <p>2 コマ目では、文法学習の役割を考え、さらに、発達段階に応じた教育やフィードバックの必要性に関する講義を行った。また、外国語学習適性の影響、動機づけの影響についての基本をおさえ、これらが海外の教室ではどう影響するかを考えた。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <p>※新たに学んだこと、考えたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「理解可能なインプット」は多いほど学習者の気付きや興味に繋がるため、とても大切なことだと思った。クラスの中では、小さい日本として（理解可能な）インプット、アウトプットの機会をできるだけ多く設けていきたい。</li> <li>・日本が溢れている訳ではない海外で学習のモチベーションを維持するには、教師が学習者の興味を刺激し続けることが必要である。</li> <li>・日本に比べ、教室外でのインプットが少ない、インターアクションの機会も少ない、アウトプットの必要性も機会も少ない、海外での教室では、教室内でのやりとりはもちろん、教室外でもインターネットやYouTubeなどを活用して、とにかく日本語に触れる機会を増やすことが重要である。</li> <li>・JSL 学習者と JFL 学習者の学習環境の違いを踏まえ、日本語の教室内での工夫の必要性を感じた。教室外にもインプットやアウトプット、インタラクションを行う機会を増やせるよう地域コミュニティを巻き込んだ工夫もできるのではないかと考えた。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・第二言語を習得する過程は、人間としての成長過程であるということが印象的だった。</li><li>・自然なやり取りの中に繰り返し練習行い、アクセスの自動化に繋がっていきけるようになりたい。</li><li>・簡略化されすぎたティーチャートークになっていないか気を配ることは、国内においても常に意識しなければならないことだと思う。自己参照効果も現在の授業にも積極的に取り入れたい。</li><li>・自分自身がティーチャートークを簡略化しすぎているという認識があったため、既習の表現を取り入れてコントロールできるようになりたい。</li><li>・教師はプッシュにより強制アウトプット (pushed output) を導くことが大事ということなど、初めて学んだことが多々あった。</li><li>・自然なやりとりの機会を授業でできるだけ多く作るのみならず、宿題も有効に活用する必要があることを学んだ。</li><li>・教室の一步外に出ると日本語から離れてしまう学習者のモチベーションの維持の難しさを改めて実感し、達成感があるような活動を組み込むなど、トライしてみたい活動も出てきたので、機会があったら挑戦してみたい。</li><li>・言語発達段階で学習の発達が途中で止まってしまうことを化石化ということ。また性格や態度モチベーションなどの要因によって第二言語習得が大きく影響を受けることを情意的要因ということを新たに学んだ。</li><li>・学習者の定着度合いや発達段階に合わせてフィードバックをする必要があること、プロンプトカリキャストどちらが効果的なフィードバックになるか判断が必要であることを学ぶことができた。</li><li>・言語適正について、「適性が低い」と思うと、ガッカリしてしまうし、「適正が無い」と思うと頑張れなくなってしまう。適性は克服できるのだろうか、できるとすれば適性を乗り越えるために必要なことは何だろうか考えていきたい。</li><li>・実践の場では中間言語の発達過程については授業の際も理解可能なインプットを増やす活動をはじめインターアクション、アウトプットなど工夫して行ってきたが、今回の講義でさらに効果的に行うための注意点を学ぶことができた。</li><li>・今回海外で自分が実践していくことをイメージしながら受講したが、訂正フィードバックについては、日本に住んで学んでいる学習者にとってもローカルエラーに関して訂正フィードバックを得る</li></ul>
--	--

	<p>機会はあまりないと考えられるので、教室での対応をもっとしっかりできるよう見直すことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日本に住んでいる学習者なら外の日本語を授業の中に持ち込んで、学ぶこともできるが、海外だとそれが難しく、教室を一種の日本社会に作っていく必要があると実感した。</li><li>・海外では媒介語を用いたほうが学習効率があがる気がしていたが、ネイティブである自分の強みを生かすには、教室内でなるべく意味のあるインプットやアウトプット、自然なやり取りをする機会を増やすことが重要だと再認識した。</li><li>・送り出し機関では、道具的動機づけや外発的動機づけの人が多いが、日本語が使えるようになったらなにができるか、なにがメリットになるのかを具体的にイメージさせ、モチベーションが維持できるようにする必要があると感じた。</li></ul> <p>※講座の感想</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日本語教師として実践の場を経験してから、もう一度言語習得を学びなおすことができたので、今まで見逃していたことにも気づくことができた。</li><li>・養成講座や検定試験の準備で学んだときより詳しく言語習得について学ぶことができた。</li><li>・JSL 環境に比べ、海外での教室の環境がいかに言語習得に不利な環境下であるのか、という事実を改めて知るととても良い機会になった。</li><li>・養成講座受講中には当然のこととして考えていたことが、現在きちんとできているかという（特にアウトプットに関して）、日本語能力試験対策のため、単に問題を解くためだけの知識やテクニック習得のための指導になっていないか？など反省する点多々あり、自身の指導方法を見つめ直す良い機会になった。</li><li>・理論を現場に結び付けた講義で大変わかりやすく、国内でもすぐに授業に活かせる事柄を多々学ぶことができた。大関先生の「教師は単に言葉を教えていくということだけでなく、学習者の成長を助けるような人材になることが重要」という言葉がとても印象的だった。</li><li>・第二言語の習得について、具体的な例も交えながら説明があったのでわかりやすかった。</li><li>・概念的な内容から実践的な事柄まで理論的に学ぶことができ勉強に</li></ul>
--	--

	<p>なった。</p> <p>《成果》 第二言語習得プロセスに関する基本的な知識をおさえ、海外における日本語教育での留意点を伝えることができたのではないかと考える。</p>
参考資料	特になし。

科目名	異文化コミュニケーション1
担当講師	室田真由見
単位時間数	2 単位時間
目的	海外で教えることを意識した上での異文化コミュニケーションのあり方、教室で日本語教師が直面する異文化について考え、理解を深める。
教育概要	海外に赴く日本語教師のための異文化コミュニケーション
内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 香港の日本語教育事情 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 香港における日本語教育について</li> <li>- 香港の学習者の傾向について</li> </ul> </li> <li>2. 日本語教師が異文化コミュニケーションを学ぶことの意味 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 「文化」とは？「異文化」とは？</li> <li>- 「異文化コミュニケーション」とは？</li> <li>- 異文化適応とその過程</li> </ul> </li> <li>3. 日本で教えることと海外で教えること <ul style="list-style-type: none"> <li>- 香港で日本語を教えるということ</li> </ul> </li> <li>4. 教室の中の異文化 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 私の出会った教室の中の異文化（ケーススタディ・グループワーク）</li> <li>- 日本語の授業で「日本文化」を教えるということ、日本語教師として「日本」、「日本人」のイメージにどう向き合うか</li> </ul> </li> <li>5. 実践紹介 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 「ステレオタイプに向き合うための実践」紹介</li> </ul> </li> </ol>
受講者の声／ 成果と課題	<p>&lt;受講者の声&gt;</p> <p>※講座で新たに学んだこと</p> <p>・どんなフィルターを通したかで見方が違ってくるとのこと。教師も学習者の文化について決めつけを行っていなかったか、多様性を尊重していたか内省をしてみることが大切。</p>



- ・それぞれの国での文化の違いによって人の考え方やこれは受け入れられる受け入れられないという気持ちの違いもあることがよくわかった。その上で海外で教えるにあたって、その国の文化や母国語をある程度知ってから赴いた方がコミュニケーションがスムーズに運びその国の文化や生活の状況も理解して行動できるのではと感じた。
- ・日本、日本人についての傾向について学生に伝えることは、学生が日本で生活していくためには必要だが、どう伝えるかをよく考える必要があるということ。以前学生から、教科書にある相槌やハッキリ言わないで曖昧に答える表現について、日本人はみんなそうなのかという質問を受けて困ったことがあった。そういう人は多いが、それが全てではないこと、学生にとっては教師の一言は大切な情報になるため、どう伝えるかということをしっかり考えなければならない。
- ・自分ではフラットな状態であろうとしても、これまでの自分が経験してきたことを基準に物事を見てしまうことは止められないので、感じたことや行動を俯瞰して見直すことが必要。海外でも日本でも、異文化への気付きに敏感でありたい。
- ・「日本語教師の仕事は日々が異文化コミュニケーション」であり、そのバランスを取ることの難しさ。
- ・日本語を勉強しているからといって必ずしも日本に対して好意的であるとは限らないという考え方が自分にはなかったので新しい発見だった。
- ・同じ国・同じ人種の日本人との間でも価値観の違いは大いにある中で、国も人種も文化も違う外国人との間に、「なぜ?!」と思うことはあって当たり前、と前提で臨まなければならない。
- ・コミュニケーションを意味付けするときには、その背景となるもの（コンテキスト）が非常に重要になる。相手の文化を理解していないと、何気ない行動でも相手に思いがけない誤解を与えてしまう可能性があり、それを避けるためにも異文化理解が必要である。
- ・異文化＝「自分と同化した文化」とは異なる文化。

※講座を受けての感想

- ・今回の BOR での課題の中に「同性愛」のテーマもあり、これまで宗教の違いなどまでは踏み込むこともあったが、同性愛の話題を教室でしたことはまだなかったの、こうしたテーマも取り上げられるようになっていくと知って少し驚いた。
- ・海外で教えるということは、その土地の常識が優先され、マイノリティーである教師に適応が求められることは深く心に刻んでおきたい。
- ・異文化で教えることの様々なハードルが浮かび上がってきて良かった。
- ・海外での仕事では特に自分の心身のバランスをとることが大切だと思った。
- ・外国に対するステレオタイプ的なイメージはなるべく払拭して学習者に接しよう意識しているが、日本についてのステレオタイプ的なイメージは無意識のうちに学習者に伝えてしまっていると思ったり、反省した。
- ・国民性を知ることは大切だが、ステレオタイプに陥らないよう一人一人の個性を大切に、接するように努めていく必要があることを実感した。
- ・420 時間養成講座受講中は、異文化対応の U 字曲線は、主として①日本語教育能力検定のための知識で、②どちらかという学習者（留学生等）の問題として捉えていたが、海外に赴任したい日本語教師としては逆に自身の問題になるのだということが再認識できた。
- ・オンライン授業でのグループワークに使えるツール「padlet」を自分達で使ったワーク、とても良かった。
- ・多様な学習者に教えるということは、教師自身も常に異文化接触し、葛藤させられ、変化や許容を求められるのだろうと思った。また、そういうことを負担に思わない、楽しめるマインドでいられるように、心や頭をセッティングしておきたい。
- ・日本語教育だけでなく、価値観のズレの埋め合わせも日本語教育を通して行っていくことも大切だと実感した。
- ・世界地図やジェンダーの事例で、「誰も傷つかないことが大事」と

	<p>という言葉が最も印象に残った。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・普段からニュースや出来事を自分の感覚だけでとらえずいろいろな側面から見て考える思考の筋トレを行っておかないと臨機応変に対応できないと思った。</li><li>・ケーススタディでは、いろいろな意見、自分とは異なる立場の意見もあったのが新鮮だった。</li></ul> <p>&lt;成果と課題&gt;</p> <p>教室で直面し得る異文化について対処法や考え方などを話し合い、お互いの考えを共有してもらえた。</p> <p>実践を紹介したことにより、異文化を授業で取り扱うヒントとしてもらえるのではないかと思う。</p> <p>時間配分、時間の有効な使い方については再度検討する必要有り。</p>
参考資料	<p>ゴーシュ編『ニッポンのトリセツ』立東舎 2015</p> <p>国際交流基金ウェブサイト <a href="https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/hongkong.html">https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/hongkong.html</a></p> <p>香港日本語教育研究會ウェブサイト <a href="https://www.japanese-edu.org.hk/jp/jlpt/zh/statisticsg.html">https://www.japanese-edu.org.hk/jp/jlpt/zh/statisticsg.html</a></p>

科目名	異文化コミュニケーション
担当講師	渡辺彰吾
単位時間数	4 単位時間 (2 単位時間 ビデオ授業、2 単位時間 ライブ授業)
目的	講師の経験をもとに、インドネシアを例として、外国での日本語教師着任を目指す研修参加者に外国生活において日本語教師としてだけでなく、生活者として注意しておくべき事柄を学ぶ。 また、その中でインドネシアにおける日本語教育を語学学校ジャカルタコミュニケーションクラブ、日本語ミュージカル劇団 en を事例として紹介する。
教育概要	異文化理解～インドネシアを例に～
内容	<p>「ビデオ授業」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. インドネシアの基本情報</li> <li>2. インドネシアと日本との関わり</li> <li>3. インドネシアにおける日本語教育</li> <li>4. 語学学校ジャカルタコミュニケーションクラブ</li> </ol> <p>概要説明、日本語教育事業、学校行事、学外での活動、など</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>5. 劇団 en 塾</li> </ol> <p>概要説明、活動内容とその歴史、日本語教育への寄与、など</p> <p>「ライブ講義」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. インドネシア人の性質</li> </ol> <p>みえっぱり、相互扶助、長期的見通しが苦手 など</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2. インドネシアを象徴する単語</li> <li>3. 日本人がインドネシア人に抵抗を感じる部分</li> </ol>

	<p>「すみません」が少ない、時間にルーズ、効率を考えない など</p> <p>4. 日本人がインドネシア人に疎まれる部分</p> <p>お金の細かい、日本の尺度を強要、宗教理解が少ない など</p> <p>5. インドネシア人とうまく付き合っていく方法</p> <p>柔軟性を持つ、なんでも試す、返事ははっきりと など</p> <p>6. インドネシア生活で初めにしておきたいこと</p> <p>友人を作る、習慣や民族性を知る、交通網の把握 など</p> <p>7. 日常生活で心がけておきたいこと</p> <p>派手なことや目立つことを避ける、宗教理解に努める など</p> <p>8. 赴任地の言語を理解することの利点</p> <p>学習者の誤用や疑問の原因の推測ができる など</p> <p>9. 赴任地の生活習慣・価値観を理解することの利点</p> <p>学習者にとって身近な例文の提示ができる など</p> <p>10. 赴任地と日本との関係を理解することの利点</p> <p>学習者が話しやすいトピック、話しにくいトピックがわかる など</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>「受講者の声」</p> <p>※授業で新たに学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インドネシアでの日本語教育は高校生が多く初級レベルが多いものの学習者、教育機関も世界2位であり、日本語に興味を持ってくれている人がとても多いということを知った。</li> <li>・直接法で教える場合であっても相手の言語を学ぼうとする教員の姿勢は必要で、現地の言語を知ることによって学習者が引っかかる問題点や学習者の意図を教員が理解する手助けになるという点は、とても</li> </ul>

	<p>共感した。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日本語教師として働くのであれば現地語はあまり必要ないと思っていたが、自分が授業で使える手段を増やすためや同僚とのコミュニケーションツールの一つとして、現地語の習得はメリットが大きいと分かった。</li><li>・「その国の生活習慣・価値観を理解すること」は、現地でのコミュニケーションの円滑化に役立つものと漠然と思っていたが、それだけでなく、授業中の例文などにも活用すれば学習者の理解の容易さにも繋がるということは、授業内に分かりやすい例もあり、よく理解できた。</li><li>・いくつもの宗教が信仰されている国では、それぞれの人が何を大切にし、何が許され何が許されないかを知ることが、自身が生活するうえではもちろん、日本語を教えるうえでも非常に重要だということ学んだ。</li><li>・当たり前のことだが、日本人が外国人に対して抵抗を感じるように、外国人からしても日本人が疎まれる点はたくさんあるということ。「外国人が来日して不思議に思ったこと」や「困ったこと」などは耳にすることがあっても、改めて「疎まれる」点については知る機会がなかったので、参考になった。</li></ul> <p>※授業で感じたこと</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学習者の文化的背景、習慣、生活スタイル、価値観を知っておくことの大切さと同時に日本についても普段からアンテナを張って色々な事を知識として入れておかなければと思った。</li><li>・「日本人であるだけで給料が高いこと」という話に関して、その経験に胡坐をかくのではなく、自分の市場価値高めるためにも日本人である強みを身に付け、提供し続けていくことが大切だと感じた。</li><li>・宗教観と日本との歴史問題はしっかりと認識しておかなければならない。</li><li>・非常時に一人で行動できる知識と経験を持っておくこと、一人でどうにもならないときはインドネシア人の知り合いに助けをもらえるよう人とのつながりを作っておくということ。海外へ赴いたらインドネシアに限らず心構えとして持っておかなければと思った。</li><li>・相手の理解できない行動にも文化的背景があり、一旦立ち止まって、考えていくべきだと感じた。</li></ul>
--	---

	<p>「成果と課題」</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・比較的若い世代の研修参加者には全体的に興味を持って研修内容を聞いてもらえたかと思うが、豊富な社会人経験を経て今回の研修に参加された方には既知の基本的な内容も多かったかと思う。</li><li>・特に上記のような参加者には日本語教師として外国に赴任する際に心がけたい点をお話できて良かったと思う。</li></ul>
参考資料	なし

科目名	シラバス・カリキュラム作成
担当講師	久保田美子
単位時間数	3単位時間
目的	シラバス・カリキュラム作成について基本的な知識を整理し、新しい考え方について理解すること。さらに、実践するうえで直面する課題について自律的に考えることができるようになること。
教育概要	<p>1. シラバス・カリキュラムを作成するために必要なこと</p> <p>①日本語教師としての仕事 ②コースデザインの流れ ③ニーズ・レディネス調査 ④目標言語調査・目標言語使用調査 ⑤コース目標と評価基準</p> <p>2. シラバス・カリキュラムの作成の実際</p> <p>⑥シラバス・カリキュラムとは ⑦各国のガイドライン ⑧教える内容 ⑨教え方・教材</p> <p>3. シラバス・カリキュラムの作成について具体的な例をもとに検討する</p> <p>⑩シラバス・カリキュラムの変更がもたらすもの ⑪シラバス・カリキュラムを見直す ⑫まとめ</p>
内容	<p>最初にシラバス・カリキュラム作成に関して、知っていること、理解していることに関する簡単なチェックリストに回答することを求めた。</p> <p>1回目（オンデマンドによる授業）シラバス・カリキュラムを作成するために必要なことについて解説。</p> <p>①日本語教師としての仕事：日本語教師としての仕事は、コースデザインという大きな枠の中で捉える必要があるということを確認。</p> <p>②コースデザインの流れ：コースデザイン全体の流れの中で、シラバス、カリキュラムの位置づけについて解説。</p> <p>③ニーズ・レディネス調査：特に個別の学習者の学習スタイルやピリーフなどにも注目する必要があることを解説。</p> <p>④目標言語調査・目標言語使用調査：母語話者の言語行動だけでなく、非母語話者の言語行動からも目標を検討する必要があることを解説。</p> <p>⑤コース目標と評価基準：様々な目標や評価基準について解説。</p> <p>2回目（オンデマンドによる授業）シラバス・カリキュラムの作成の実際について解説。</p> <p>⑥シラバス・カリキュラムとは：様々な解釈のあるシラバス、カリキュラムという用語について解説。</p>



	<p>⑦各国のガイドライン：各国のガイドラインの情報を入手することの必要性を説明。</p> <p>⑧教える内容：教える内容を考えるうえで必要な要素について解説、検討。</p> <p>⑨教え方・教材：シラバス、カリキュラムと、教え方や教材との関係性について解説。</p> <p>3(ライブ配信授業)シラバス・カリキュラムの作成について具体的な例をもとに受講生に考えてもらった。</p> <p>⑩シラバス・カリキュラムの変更がもたらすもの：1, 2で学んだことを基に、実際に特定の対象者をイメージしてどのようなシラバスやカリキュラムが考えられるかをグループで検討。さらに、カリキュラムを変更した際に、隠れたカリキュラムと呼ばれる背景にあるカリキュラムも変化することを解説。</p> <p>⑪シラバス・カリキュラムを見直す：具体的な例をもとに、様々な教室内での問題なども、レディネス調査やニーズ調査の不備が原因の場合があることを説明。</p> <p>⑫まとめ：これまで学んだことを総括。最初に回答したチェックシートに関して、どのように変化したか各自チェックを促した。</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <p>※講座で新たに学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テクニカルな側面のみならず『雑談』の中にも、レディネス、ニーズが潜んでいて、学習者にとっても『雑談』は極めて重要であることを感じさせられた。外国語学習で雑談としての日常会話が最も難しいと、第二言語を自身が勉強していて最も強く感じていたが、日本語でも同様だということ肝に銘じてその解を探していきたい。</li> <li>・現場で使われる日本語と教科書の不一致などは多様化が進む中で、難しい問題だと感じたと同時に、教科書にプラスαして、実際の現場で生徒に日本語を使わせるなど、柔軟な授業を作っていく必要があると考えた。</li> <li>・シラバスを決める時の幅広い考え方や視点について学べた。</li> <li>・学習者のニーズ・レディネス分析と到達目標をしっかりと把握してシラバスやカリキュラムを決めないと、その後の学習意欲にも影響を与えかねないということ学んだ。</li> <li>・学習者は変わっていくので、カリキュラムが合っているかどうか常に考えなければならないということも非常に重要なことだと思</li> </ul>

った。コース開始時にレディネスやニーズの調査をしたらそれきりではなく、学習が進むにつれ変化に柔軟かつ慎重に対応する必要があることを学んだ。

・「シラバス、カリキュラム変更」の「隠れたカリキュラム」については大変興味深く、変更により失われることもあることを熟慮しなければならないことが分かった。漢字を書くという作業は、棒の数や向き、留め、はね等に注意深さが必要なことは日々の授業でも体感していたが、心を落ち着ける作用があるということには気が付かなかった。目に見えることのみならず、学習姿勢などの精神的な作用もあるという新たな視点が学べた。

・授業で問題が発生した時は、レディネスやニーズに立ち返ればよいという言葉が重要だったと思う。

・シラバスには専攻シラバス場面シラバストピックシラバス技能シラバスタスクシラバスなどがありそれぞれのシラバスを上手く使い分けて各学習者の状況やニーズに合ったものを選び指導していくことが大切であるということがわかった。

・個人レッスンでないかぎり、教科書やシラバスを一から組み立てることはないと思うが、決められた中で生徒の希望とやる気を起こさせる授業をする必要があるということが分かった。そして、自分が働く国や学校のカリキュラムを知っておくことの大切さを再確認した。

#### ※講座の感想

・ビデオの授業では、シラバス・カリキュラムの基本的な意味などを理解できた。オンラインの授業では実際にどのようにシラバスを選択するのか自分で考えたことや他の人の意見も聞いたことで勉強になった。

・ライブ授業でのグループワークは、将来的にティームティーチングの環境で働くことになったときの練習のように感じた。

・今まで学んだ項目ではあったが、講義前のチェックリストで、改めて自分の現在の理解度を確認することができたので、より深く理解することができたと思う。

・学校によるコースデザインに則って、1回の授業を断片的に見てしまっていることを反省した。全体の中の位置づけや目標などを知り、よく理解して、柔軟に対応していきたい。

・限られた人的リソースで、適法な労働時間で、現実的な作業量で、

	<p>成果がある程度予測できる内容で教育を提供するとなると、なるべくシラバス・カリキュラムを変更せずにおくというのが、費用対効果の面でも現実的な選択になる。ビジネスとして成立する一線を守りつつ、教育の質を担保する適当なバランスが知りたい。シラバス・カリキュラム変更をしたという現場の成功体験やそれにいたる経緯、または失敗談など聞く機会があればと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者の実例にあったグループトークは学習内容を認識するうえで参考になったが、時間が短くグループ内の意見調整とまとめ迄進めず、話し合いの提案レベルで終了してしまった。</li> <li>・”雑談”について今後は考えていく必要があると感じた。現在授業で教えられている表現は、依頼、謝罪、報告、質問等、何らかの目的を持ったコミュニケーションだが、日本で日常生活を送るとき、日本人の友人等と親交を深めるためには雑談というものが重要になってくると思う。今後カリキュラムを考える際に雑談の必要性を取り入れることができれば良いと思った。</li> <li>・「やる気がない」「学習者同士の仲が悪い」などの問題を学習者のせいにせず、教師の側がシラバスや教材、授業のやり方が合っているかどうか顧みなければならないという言葉を中心に留め、常に学習者に寄り添った授業を考えていきたい。</li> <li>・事前講義を聞いたうえで、リアルタイム講義では検討したりさらに理解を深めたりできる構成になっていてとてもよかった。欲を言えばあと一コマくらい質疑応答の時間がほしいと思った。</li> </ul> <p>《成果と課題》</p> <p>基本的な知識や予想される問題に対する解決策を考える力は身についたものとする。海外で様々な問題に直面したときに自律的に考えられるようになるまでには、さらに多くの時間と経験が必要になるものとする。</p>
<p>参考資料</p>	<p>国際交流基金／久保田美子 (2006)『日本語教師の役割／コースデザイン』ひつじ書房</p>

科目名	「評価法」
担当講師	伊東祐郎（国際教養大学専門職大学院 教授）
単位時間数	2 単位時間
目的	日本語教師の重要な役割である評価を、体系的に基礎基本を押さえた後、実際に海外の教育機関で評価を行う際の留意点について考える。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 海外に赴く日本語教師に必要な、言語テストの基本的な機能と役割、特徴を学ぶ。</li> <li>・ 言語テストが測定可能な日本語能力について理解する。</li> <li>・ 妥当性と信頼性の高いテスト作成に必要なヒントを獲得する。</li> <li>・ 海外の教育機関で評価を行う際の留意点について理解する。</li> </ul>
内容	<p>(1) 大規模テスト＝<u>集団規準準拠テスト</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 統合的言語能力の測定→<u>熟達度テスト</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 受験者の得点を全受験者の得点と相対的に比較・解釈→<u>相対評価</u></li> </ul> </li> <li>・ 日本語能力試験、TOEFL、TOEIC など</li> </ul> <p>(2) 小規模テスト＝<u>目標基準準拠テスト</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標基準に対する達成度・到達度の測定及び判定→<u>到達度テスト</u></li> <li>・ 受験者の得点は目標に対する絶対的なものとして解釈→<u>絶対評価</u></li> </ul> <p>(3) よいテストの基本要件</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 信頼性・信託性・妥当性・妥当性・実用性</li> </ul> <p>(4) テスト以外の評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 観察・授業中の質疑応答・紙筆（選択式／短文）テスト・エッセイ／作文・スピーチ／会話・実演・ロールプレイ activities</li> </ul> <p>(5) 海外の教育機関に赴いて日本語教育における評価を行う際の留意点</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 現地教育機関の日本語プログラムの位置づけや全体像を把握する</li> <li>2) 現地教育機関における日本語テストの種類や実施方法について確認する</li> </ol>

	<p>3) 現地教育機関の成績のつけ方、修了認定や進級許可に関する方針の有無や実情を把握する</p> <p>4) 現地教育機関の経験ある教師から、成績をつける際に留意すべき事項について事前に確認しておく。</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <p>※授業で新たに学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・海外で教師をするということは日本語教育ということだけでなく、その国の教育方針、日本語プログラムの位置づけやその期間の成績の付け方などをきちんと確認したうえで評価も考えていかなければならないということを学んだ。</li> <li>・コースデザインの中で、評価を明確に位置付け、説明責任を果たさなければならない。</li> <li>・テスト作成をするときは、目的を持って作成することが大事である。</li> <li>・テストの目的によりテストの種類が異なり分類の視点も変わるため、現地教育の経験者から留意すべき事項を事前に確認しておく必要がある。</li> <li>・テストの妥当性や信頼性、実用性を優先すると、知識中心（教授項目中心）のテストとなり、表現力や会話力を測ることが難しくなる。そういった項目を測るためには、複数の採点者や複数回の採点が必要となる。</li> <li>・答えが決まっているものではないスピーキングやライティングのテストの信頼性を保つ難しさが分かった。二回以上もしくは二人以上で確認しても偏りが生じる気がしたので、作問する際に気を配る必要があると感じた。</li> <li>・生徒を評価するにあたりテストだけではなく授業態度などに目を向けることも必要。</li> <li>・成績をつけるためのテストであっても、一人一人の学習者が授業で行った内容の中でどこを理解しているのかいないのか形成的な評価として学習状況の把握に利用し、その後の指導に役立てることもできる。実施しっぱなしではなく、学習者にも教師自身にもフィードバックしていくことが重要である。</li> </ul> <p>※授業で感じたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・海外において評価を行う際の留意点で、やはり現地の事情を事前によく調べ、それらに沿った適切な対応をすることで初めて役に立</li> </ul>

	<p>てるという話は、自分がよいと思うことをするのではなく、現地で求められていることをすることで現地や国際交流に貢献できるのだと理解した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語学校で働く際には、評価も先輩方がどのように行っているのかしっかり確認をしていこうと思った。また、従来の点数化する方法ではなく、代替アセスメントなども取り入れていくことはとても大事だと感じた。</li> <li>・テストにはプラスの波及効果があるという話は興味深い。学習者がテストのために一所懸命頑張って勉強しようと思うか、ネガティブな反応をするかは、教師にも責任があるのだと感じた。</li> <li>・「直接テスト」「間接テスト」はどちらも重要であり、どちらかを省くことはできない。これからは両テストとテスト以外の評価項目（授業態度など）をうまく組み合わせて、適切な評価方法を考えていきたい。</li> <li>・「今」の日本語需要が変われば、求められる日本語も変わるので当然評価も変わる。そういうものをきちんと踏まえてブレのない評価軸を生み出すことは学習者の信頼を得ることでもあり、大切にしたい。</li> <li>・日本語学校でのテストは文法知識中心となるため、「話せる」表現能力の高い学生よりも「知っている」知識能力の高い学生のほうが必然的に成績が良くなる。しかし多くの学生は「話せるようになる」ことを希望している。学生からの需要と学校からの供給、学校が目的・方針としていることと評価の関連性、妥当性についても深く考えさせられる内容だった。</li> </ul> <p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・海外赴任後に日本語教師が直面する評価について講義を行った。評価自体は重要であるが、広くその内容が把握されているわけではなかったため、今回の研修を通して学び直しを実感した受講生が少なくなかった。体系的に基礎基本を押さえた内容が「概要」把握においては役立ったようだ。課題としては、実際のテスト問題の分析やテスト作成などの演習があると、テスト作成にかかわるスキルの向上がめざせたであろうと思われる。</li> </ul>
<p>参考資料</p>	<p>『日本語教師のためのテスト作成マニュアル』伊東祐郎, アルク, 2008</p> <p>『日本語教師のための評価入門』近藤ブラウン妃美, くろしお出</p>

	版, 2012 『言語テストの基礎知識』 ブラウン, J.B., 和田稔訳, 大修館書店, 1999 『言語テスト作成法』 バックマン, L.F. 他, 大友賢二他監訳, 大修館書店, 2000
--	--

科目名	教具・教材のリソース
担当講師	鶴山真実（JEDUCATION CENTER 講師）
単位時間数	2 単位時間
目的	ICT 教材の活用事例として、ロイロノートの使い方や実際の授業での活用方法、授業の様子を知り、ICT 教材の効果的な活用について考える。
教育概要	CAN DO について ロイロノートの使い方
内容	<p>海外で日本語を使う頻度が少ない学習環境で、目的を明確にして学習し各課の最後に CAN DO を確認する手法を導入。</p> <p>CAN DO の流れ 目標確認 文型練習 CAN DO 活動</p> <p>実際の授業風景 学生が3名程度のグループに分かれ、各グループがスクリプトを作成、練習して動画で撮影、それを皆で視聴。</p> <p>これらの活動に「ロイロノート」を使用。その使い方の説明。動画の撮影から先生への提出、それを皆で共有するところまでこのアプリを使用。</p> <p>その他、ロイロノートの活用事例等</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <p>※授業のなかで紹介されたロイロノートの活用方法について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師同士教材や教案をシェアしたり、教師と学生で課題のやりとりができること、特に質問に対する回答を学生が音声データで提出し、教師が採点をするという方法は良いアイデアだと思った。</li> <li>・活用事例のなかで特に有用だと感じたのは、教師・学生共に録音して相互に送信できる点だった。教室を出れば日常生活で日本語を使う機会が少ない海外の学習者には、宿題で特に音声に触れることは大変有効だと思う。</li> <li>・音声を宿題にできるという点は宿題のバリエーションが増える</li> </ul>



	<p>ため、学生もあきらめことなく自宅学習ができると思った。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・音声データにより、質問文を学生が正しく聞き取り、理解できているのか、そして正確に発話できるか個人の習得状況をはっきりと確認することができ、指導に生かせるのがよい。</li><li>・紙媒体で行うことが多い課題も容易に学習者に送り、学生は学校に来ないで提出し、添削・返却ができるため、一連のやりとりが非常にスピーディーで、返却した頃には学生は内容を忘れていたことにならずに済むのがとてもよい。特に現在のコロナ禍で登校が制限される状況では、ICT教材の利便性が大いに発揮されると感じた。</li><li>・予習、復習などにも応用できることは、教師としての負担軽減にもなるので有効なツールだと思う。</li><li>・アイパットなどの機材を使い動画を見ながらのロールプレイは臨場感もあり、学習者が楽しみながら学習出来てよいと思う。</li><li>・会話のビデオを撮り、クラスメートだけでなく自分の会話を客観的に見て、学生が主体となって授業に参加できるのがとても良いと思った。</li><li>・学習者に Can do を最初に提示することは、学習者のモチベーションにも繋がる大切なことだと改めて感じた。</li><li>・先生間、学生とのあらゆる配信が双方向及び体系的に行われ業務効率の向上に役立っていることが感じられた。</li></ul> <p>※ICT教材の活用について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ICTを活用する事によって、教師側と学習者側のどちらにもメリットがある。</li><li>・ZOOMであってもロイロノートの活用事例と同様に学習者の成果物を共有するなど、工夫次第でオンライン授業に応用できることを学ぶことができた。</li><li>・ICT教材は使い方次第で読む、聞く、書く、話すのどの分野でも、アクティブラーニングとしても、さまざまに活用できそうだと感じた。</li><li>・授業へのICT活用は各機関で違うこともあるがどんなツールがあっても、どんな使い方ができるかを考えていくことはとても大切であると思う。今後も積極的に興味を持って取り組んでいこうと思う。</li><li>・今後もアプリが増えていく中で、自分や生徒にあったものを見つけることが重要だ。</li><li>・日本語教師として新しい環境で仕事を始めるときに少しでも作業</li></ul>
--	--

	<p>負担を減らすため日頃から ICT など幅広くアンテナをはって知識向上に努め、様々な経験者の体験談を聞いたりすることはとても大切であると思う。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・オンライン利用できない紙媒体、その場だけのローカルなものの魅力はもちろんあるが、必要性・需要の点などからの ICT 教材を選択する機会は増えると思う。何を使うかも大事だが、どんな考えで使うかを見失わないようにしていきたい。</li></ul> <p>※課題</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ロイロノートはとても便利なツールだが、無料ツールではないため実際に授業に導入するハードルは高い。対面授業、オンライン授業でのツールの活用法の紹介を基に、ツールを使わずにできる授業展開を考える必要がある。</li><li>・ICT 教材は学習者の興味を引くということはとても大切な部分だが、同時に学習者側の操作性・デバイス条件・インターネット環境の確認も必要になる。これからはさまざまな国、さまざまな環境下にいる方を想定して進化していくのだろうと感じている。</li><li>・授業ではロイロノート以外のアプリケーションの活用方法についても紹介が欲しかった。</li></ul>
参考資料	なし

科目名	対象別指導法 1
担当講師	西尾亜希子 (ATOZ ランゲージセンター)
単位時間数	2 単位時間
目的	学習の目的や要望など学習対象の幅が広い企業レッスンを取り上げ、様々な事例から企業レッスンにおける注意点や指導法の実例を紹介し、対象別の指導法について考える
教育概要	マレーシア企業レッスンの実例
内容	<p>1 企業レッスンを受けることになった経緯と実績 なぜ対象別指導法のテーマとして企業レッスンを挙げたかを説明し、2004年設立以来50社以上の企業からの依頼を受けてきた会社の名前と傾向、学習の目的などを共有した。</p> <p>2 企業レッスンでの注意点 教える相手とお金を出してくださる方が異なる点、優先順位が授業より仕事になる点、授業料が会社負担のためモチベーションの維持が難しい点などを説明し、通常の授業とは対応の仕方を変える必要があるということに気づいてもらった。</p> <p>3 レッスン報告と評価について 企業レッスンは企業側の協力があってこそ成功するというところに触れ、どのように企業を巻き込んでいくか当校が行っている工夫や企業の満足度を高めるための効果的な報告について、また試験の意義と位置づけを具体的に紹介した。</p> <p>4 実例1～3 (企業からの要望、対象の学習者、立てたカリキュラム、実際にやってみた結果) 実例で1は通常のレッスンの例として17年にわたり日本語教育を続けてくださっている製造業の例を、実例2では観光客向けのガイド対象の日本語教室の例を、実例3では24時間でゼロ初級から日本語のマニュアルが読めるようになるかという体験談を実際に使った教材や方法を公開してその結果までを紹介した。</p> <p>5 企業様からの声 実際に社内日本語教育を実施して下さっている企業様2社にご協力いただき、学習の目的や目標、社内日本語教育に求めるもの、社内日本語教育を行って変わった点や良かったことなどを伺った。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <p>※講座で新たに学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・企業レッスンにおいては受講料支弁者である企業と受講者社員と双方を満足させなければならない難しさを知った。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・お金を払う人と実際に受講する人が異なる場合、双方のニーズを満たすためには事前のすり合わせが重要であること。</li><li>・企業の意向にもよるが、社内日本語スピーチや食事会、日本人スタッフに手紙を書くなど、教室での授業以外にも教師ができることが沢山あるということがわかった。</li><li>・実際に働く現場の日本人社員など、多くの人を巻き込むことで協力者を増やし、「自分ごと」として捉えてもらうことで会社全体での取り組みに発展させることが大切である。</li><li>・企業レッスンの評価について、優しく設定しているのは学習者ができないところを復習する機会を設けてあげることが目的であること、モチベーションを上げてあげるためにテストをすること、教師側の学習者の状況を把握するためでもあることがよく理解できた。</li><li>・企業レッスンでは企業のニーズに合わせる難しさを知り、シラバスと合わせて経験が必要なことが分かった。</li><li>・学習者にとって何が必要で何が不要かをしっかりと把握することが大切。</li><li>・日本語学習優先でない学習者のモチベーションを維持するための工夫を常に考えることが必要。</li><li>・経営者側と学習者（職員）の橋渡しの役割も日本語教育を通して、担うことが出来る。</li><li>・講座で示された事例が本当にケースバイケースで、必要とする日本語がちがうということを知り、ニーズ調査の重要性を学ぶことができた。</li><li>・ニーズ調査を綿密にし、それをシラバスにしっかりと落とし込んでいる具体例が分かり、ニーズによってはカタカナ、漢字、読みをメインにするなど柔軟な対応が参考になった。</li><li>・マレーシアから日本に来る留学生は少ないイメージだったが、ビジネス日本語の需要が高いことを知った。</li><li>・企業レッスンでは、ビジネス会話（敬語表現など）を目的として依頼されることが多いというイメージを持っていたが、目的は各企業によって多様であり、学習者だけでなく、企業ニーズにも応えるため多様なスタイルでのアプローチや、学んだことをアウトプットしていけるような環境づくりも必要なのだと知ることができた。</li></ul> <p>※講座を受けての感想</p>
--	--

	<ul style="list-style-type: none"><li>・教師は単に日本語を教えるのではなく、会社の想いと社員の想いを相互に伝え合う橋渡し役となって社内の関係を良好にし、延いては日本人と赴任地の人々の相互理解の架け橋となることができるという話を聞き、深い感銘を受けると同時に教師の責任の重大さも感じた。</li><li>・企業内での講義をする前のシラバスを立てていく方法について、成果が出ている具体例から今まで考えていなかった部分に対する気使い(全体のバランス / 何を捨捨選択するのかの基準 / 諦めずにポイントや解決の糸口を探し出す姿勢)をみることができた。</li><li>・今回の講座は、日本で働く技能実習生を雇用している企業に対しても参考となる内容だった。企業へのアプローチ、報告する事での信頼関係構築など、コロナ禍で外国へ赴けない現在で、十分活用出来るものが多かった。</li><li>・近年、海外進出した日本企業で従業員への日本語教育ニーズが高まっているように感じていたが、その背景は、以前と違って、国内外で英語教育がさらに浸透し、社内言語が英語になりつつあり、その上で、第3言語として日本語が求められているのかもしれないと感じた。</li><li>・女性が海外で日本語教師として生きていくリアルな姿をイメージでき、チャンスを逃さないことと生かそうとする姿勢を見習いたい。</li></ul>
参考資料	なし

科目名	対象別指導法2（日本語発音・アクセント指導法）
担当講師	笈川幸司（日本語学習サロン・ジャスロン代表）
単位時間数	2 単位時間
目的	中国人学習者に対する模擬授業を見学し、日本語の発音・アクセント指導の要点を考えることで、赴任国での実践に活かせる指導法を学ぶ。
教育概要	日本語発音アクセント指導
内容	今回実施したのは、中国人学習者にとって習得しにくいと思われる日本語アクセントの特徴を、独自に作成した日本語アクセント試験を用い、ルールを説明しながら、短時間で意識、習得してもらう試みである。この授業に参加していただく先生方の前で模擬授業を行うことで、中国人学習者の問題点を把握してもらい、提示した改善策によって、学習者の変化を実際に見てもらうことが目的である。後半30分は、先生方からの質問に答える形式で、交流を図った。
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講生の声》</p> <p><u>気づきと成果</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の知識が足りないと自分にばかり目を向けがちだったが、現在の学習者に対して自分に何ができるのか考えることが大切だと実感した。</li> <li>・日本語は優しく弱く小さな口で発音することが大事だと改めて気づいた。</li> <li>・声かけ、また訂正を行うときのポイントの洗い出し、ステップを積み重ねていく授業展開のあり方がとてもわかりやすかった。</li> <li>・アクセントのフィードバック、丁寧と普通体のスピード感あるスイッチング、感想の提示の仕方など、全てが実践的で勉強になった。</li> <li>・コツコツといろいろなところから情報を集めて学習者に提供できるように準備をしておこうと思った。</li> <li>・学生が流ちょうに日本語を話すために同じ練習を続けること。これを形を変えて持続可能にするのが私たちの仕事であることを考えさせられた。</li> <li>・継続して勉強する大切さは日本語教師にもあること改めて認識した。</li> <li>・教員が学習者の誤った発音を真似してみせることができれば、正しい発音、イントネーションと比較して聞かせることもできるので、より効果的だと感じた。</li> <li>・発音指導の難しさを改めて感じたと同時にオンラインでもここま</li> </ul>

	<p>で生徒のモチベーションを落とさずにできるものなのかと、実感した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テンポの良い授業では、学習者が飽きずに緊張感を持って、短時間でも声を出す機会が沢山持てることが分かった。</li> <li>・「これはとてもむずかしいから全部まちがってもいいよ」といった声かけは学習者の不安を和らげるのに効果的だと思った。</li> <li>・今まで学生に指導する際、ゆっくりハキハキと話そうとしてティーチャートークになってしまっていたが、ナチュラルスピードで理解させることや慣れさせることも大事であるということを知った。</li> <li>・「あ・い・う・え・お」をすべて「い」の形でいう改善のポイント、ナ行とラ行の区別の仕方、さらには単語のアクセントの下がり目についても細かい先生の指導を目の当たりにし、大変勉強になった。</li> <li>・教員が学習者の誤りの傾向を把握しておくことで、最小限の的確なアドバイスで学習者は自ら訂正できるようになる様子を見ることができた。</li> <li>・オンラインということで先生の手や口の動き、学生に対する反応をよく見ることができた。</li> <li>・学生が適度に緊張感を保ちながら、不要な不安は取り除いて良い意味でリラックスして受講できるように授業を行うことは教師の重要な役割で、学習効果も大きいと感じた。</li> <li>・日本語が上手になりたいと思っている学習者に応えられるだけの能力を持っていると自分の教師としての強みになると強く感じた。</li> <li>・中国の人の発音の特徴や独特な言い間違いや、アクセントの間違って覚えていくせなどがとてもよく理解できた。</li> <li>・サンプル文の扱い、提示の仕方などで難易度を下げるとともに学習者自身の「少し上のレベルに挑戦している感覚」をうまく引き出していけるのだと参考になった。</li> </ul>
<p>参考資料</p>	<p>『日本語発音レッスン』戸田貴子、『にほんご発音アクティビティ』中川千恵子、『発音ふしぎ大百科』金村久美、松田真希子、『OJAD チュータスズキクン』峯松研究室</p>

科目名	外国語コミュニケーション ベトナム語体験
担当講師	リ レ ウイエン (サイゴンランゲージセンターベトナム語日本語教師、インターカルト日本語学校卒業生) チン ティ フーン タオ (サイゴンランゲージセンター校長)
単位時間数	1 単位時間
目的	直説法による外国語学習体験を通じて、直説法で日本語を学ぶ日本語学習者の視点を知り、実践の場に活かす。
教育概要	基礎ベトナム語体験授業
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ベトナム語の6つの声調紹介および発音練習</li> <li>- 「私は～が好きです」の言い方紹介および練習。(食に関連する語彙を例に使用)</li> <li>- 数(1～10)の紹介および発音練習</li> </ul> 教師がスピードを調整することや受講者が容易に回答できないような質問を出すことなどをした。
受講者の声／ 成果と課題	《受講者の声》 ※講座で新たに学んだこと ・ゼロ初級では直接法だと分からないときに質問ができないのが不便なので、母語で質問できる時間を設けると学習者の理解が深まると感じた。海外で教える際には、教室での指示語など少しでもいいので自分が現地の言葉を学んだり、媒介語の教材を使ったり、もしくは現地人の日本語の先生と分業したりする必要がある。 ・ゼロ初級は手元に資料などのわかるものがないとかなり不安であることがよくわかった。 ・学習者を置いてきぼりにさせないために、あて方、進め方、スピード、練習内容、いろいろな点に注意が必要であることを学習者の立場になって知ることができた。 ・オンライン環境ではpptの画面共有は大きく見ることができる反面、先生が映っている画面が小さくなるため、指名されてもすぐに反応できないなど、今後online授業で気を付けるべき点を実感できた。 ・事前に語彙プリントを配付するかどうかについて、授業前はその日にどんなことを勉強するか心の準備ができ、授業中は参照した



り書き込みしたりができ、授業後には復習に活用することができるため、特に入門レベルでは配付するメリットが大きいことがわかった。

・教室であれば、空気感の共有がしやすいが、zoomでは反応が読み取りにくく教師と受講者のスムーズなコミュニケーションを図るために様々な工夫が必要となる。

・イラストや写真が理解の助けになることを実感したが、知らない写真がでると余計に混乱することも分かった。分かりやすい資料作りは、特に初級者には大切。

・最初の「教室の言葉」は、その後の自己紹介に使う表現を言う際に知っていて当然の言葉として何度も使われたので、強引に覚えたが、このようにスピード感を持って学習者に少し緊張感を持たせながら授業を進めるのもいい方法だと感じた。

・新しい言語を学ぶため、授業に出席するときは、予習をすることやその日の授業でどんなことを学ぶのか知っているのとそうでないのでは、授業を聞く心構えや姿勢が全然違うということを実感した。学生に日本語を習得してもらうためには、このことを教師の側から伝える努力を怠ってはいけない。

・スピードが早いと生徒が苦しくなるということが分かった。授業内での時間制限とスピードの調整が課題になる。

・オンライン授業では先生の声が聞き取りづらい＝発音がわからない、だから言えない、ということが直結するので、必要機器はそろえておく必要性を感じた。

・オンライン授業では音をとらえるのが難しい生徒には、授業外でも音を確認できるような工夫が必要だと思った。

#### ※講座を受けての感想

・学習者の当て忘れ、知らない食べ物を見せるなど意外とやってしまいがちなミスで改めて注意しなければと思った。

・「よくわからない」外国語を習っている学習者としては、教師の発音モデルが喉から手が出るほどほしくなるのだ、と教師のモデル提示の重要性のようなものを改めて感じた。

・自分たちは大人なので、こういう初級の教えかたは少々退屈に感じたが、これを日本語教師もやっているということ。学習者が高卒以上の留学生の場合、どうやって知的好奇心を満たしつつ進めれば

	<p>良いのかということを考えさせられた。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学習者側だと難しいと思うことも、教師側で学習者に求めてしまっていることがあるので、改めて振り返るいい機会になった。</li><li>・教え方について自分だったらと考える所があり、学習者と教師と両方の視点で授業を体験する事ができた。</li></ul> <p>※講座に望むこと</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・授業を受けてどう感じたか、問題点など教師の視点からと学習者の視点からとディスカッションをする時間があるとより有意義だった。</li></ul> <p>《成果と課題》</p> <p>大人数でオンライン形式ということもあり完璧まではいかないが、期待されるレベルの講義内容となったのではないかと。</p> <p>10分ほど授業時間が長引いたため、時間コントロールが今後の課題。</p>
参考資料	サイゴンランゲージセンターのベトナム語オリジナル教材

科目名	教材分析・教材作成
担当講師	深田みのり（インターカルト日本語学校講師）
単位時間数	2 単位時間
目的	海外では、十分な日本語教材・機材が揃えられない地域もあることから、様々なリソースを活用して教材を作成する能力を養う。
教育概要	<p>1. 絵教材 絵教材の特徴、教材用イラストの描き方、教材作成・活用例の紹介</p> <p>2. 写真教材 写真教材の特徴、写真を使った授業例</p> <p>3. ニュース素材を利用した教材作成 Web ニュースの文章・音声・映像・画像を教材化した例の紹介</p> <p>4. 多読教材の紹介</p> <p>5. まとめ</p>
内容	<p>1. 絵教材</p> <p>①絵教材の特徴 情報を絞り込み、伝えたいことだけを提示できる。</p> <p>②教材用イラストの描き方 インターネットでイラストも手軽に入手できる時代だが、求める絵が見つからない、現地のIT環境がままならないようなことは少なからずある。また絵を描くことに苦手意識を持つ教師も多い。しかし、教材用の絵に求められるのは、上手かどうかではなく伝わるかどうかであり、必要なのは、手早く、分かりやすく、必要な情報だけを描く技術である。そして、作成する前に、絵教材が本当に必要か、伝えたいことは何か、最低限何を描けばよいのかを考えることは非常に大切である。 具体的には以下のような点を参考に、楽しみながら練習してみてほしい。</p> <p>(1)○△□など、似ている図形を利用して描く</p> <p>(2)鼻の位置で顔の向きが表せる</p> <p>(3)目や眉、口の描き方で感情が表せる。マンガの簡単な技法も大いに参考になる。</p> <p>(4)体の動きは頭と胴体を先に描き、手足で細かい動きをつける。</p> <p>(5)背景や小道具、服装を少し描き加えることで、伝えたいことがより表せるようになる。</p>

	<p>③絵教材の作成・活用例の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字の字義、形が似ている仮名の違いを印象付ける</li> <li>・受身、使役、使役受身の違いを理解させる             <ul style="list-style-type: none"> <li>・4枚のイラストを見せて（あるいは学習者が描き）、即興でストーリーを作ってもらおう。</li> </ul> </li> </ul> <p>2. 写真教材</p> <p>①写真教材の特徴</p> <p>情報をリアルに伝えられるので正確に伝わり、イメージを想起させやすい。</p> <p>②写真を使った授業例</p> <p>「フォト・ランゲージ」</p> <p>※詳細は参考資料4を参照のこと。</p> <p>3. ニュース素材を利用した教材作成</p> <p>講座では、「今売れている季節物の商品」のWebニュース（200字程度）を取り上げた。Webニュースは、文章・音声・画像・映像が揃っており、様々な授業が展開できる。学習者の興味やレベル、授業のゴールに合わせて、さまざまな工夫を試みてほしい。</p> <p>4. 多読教材</p> <p>多読教材は、シンプルかつ優れた自律型学習教材である。紙媒体もデジタル媒体もある。読む力、語彙力、漢字力、聴解力など様々な面で学習効果が期待できる。</p> <p>※多読授業の運営方法など詳細は参考資料5を参照のこと。</p> <p>5. まとめ</p> <p>教材は、授業をわかりやすく、効率よく、そして豊かにする重宝なものであり、デジタル化も進む中、ますます便利で多様な教材が開発され続けている。そんな今日だからこそ、教師は「教材に振り回されない」「頼りすぎない」「授業の展開次第では捨てる勇気を持つ」ことを肝に銘じる必要がある。授業の中心は、あくまでも人と人のやりとりであり、教材は補助する道具として必要最低限あればいいのではないだろうか。</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>【受講者の声】</p> <p>※授業で新たに学んだこと</p>

<ul style="list-style-type: none"><li>・教師自身、その声、身体、表情が生きた教材であり磨きをかけなくてはならないということ学んだ。</li><li>・身近にあるものを教材として有効活用する方法を学ぶことができた。教師自身も教材になることができることを改めて気づかされた。</li><li>・即興で伝わる絵を描く方法は参考になったと同時に、教師が絵を描いて教えるだけでなく、授業中に学生に絵を描かせる活動にも応用できるのではないかと思った。</li><li>・図形利用やしめじの人物、背景・小物の利用などを学び、自分なりに少し描けるようになったことは自分にとって大きな進歩。</li><li>・ニュースは学習者のレベルに応じて非常に多角的に授業を展開できることが分かった。どのニュースを選ぶかは熟慮する必要があり、教師の力量が問われる。</li><li>・漢字指導について、まずは学生に書く作業を楽しませることが大切であるということ。</li><li>・教材として使う写真は、きれいな写真よりも、自分の撮った写真、のほうがリアルで興味深くなることを学んだ。</li><li>・いずれの教材を用いるにしても、目標設定が重要で、ゴールに到達するには時間配分も大事だということ。</li></ul> <p>※フォトランゲージについて</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・写真はシンプルな絵より情報が多いので学習者の話を広げることがしやすく、学習者がより「しゃべりたい」という気持ちになるのではないかと思った。</li><li>・写真は対話を広げるきっかけとして利用し、そこから学習者が考えていることを引き出し、教師自身の話もして、ラポールを築くことができる。そのように活用することができる質問力も身に付けていきたい。</li></ul> <p>※授業を通して考えたこと</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・初級を担当していると、言葉で説明できない分、イラストや写真を多用しがちだが、情報量の多いそれらを授業内で使うことが「本当に必要なのか」「最低限何が必要なのか」という点に立ち返って、もう一度自分の授業を見つめ直したい。</li><li>・オンライン授業が増え、授業に必要なパワーポイントなどを作成していると、作り込んでしまい、「本当に必要だったこと」を見過ぎ</li></ul>
--

	<p>してしまっていたように思う。教材や教材は一つの「手段」であり、授業本来の目的を見失ってはいけないことを思い出し、自身の授業を見つめ直すとても良い機会となった。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・今後オンライン授業の需要も増えると思うが、語学学習はコミュニケーションであることを忘れずに、パワーポイントばかりを見せる授業にならないよう気をつける必要があると感じた。</li><li>・音読について、自動で読み上げる機能が PC などでも利用できるようになってきていて、今後自分で音読をしたり、録音したりしておく必要もなくなっていくのか、著作権や使い勝手、学習者側の操作性などから取り入れることがどうなるのかとても気になるテーマだった。</li></ul> <p><b>【成果と課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・絵、写真、Web ニュース、多読などそれぞれの教材の特徴をよく理解し、活用の広げ方に着目してもらえたように思う。</li><li>・教科書の選び方、分析について学びたかったという声が若干あった。今回は取り上げなかったが、必要なテーマだと思った。</li></ul>
参考資料	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 『○△□ではじめるイラスト事典』長尾映美（池田書店）</li><li>2. 『絵を描いて教える日本語』永保澄雄（創拓社出版）</li><li>3. 『くらしを彩るカラーペンでかんたんイラストBOOK』eto（朝日新聞出版）</li><li>4. 『やってみよう参加型学習！日本語教室のための4つの手法』むさしの参加型学習実践研究会（スリーエーネットワーク）</li><li>5. 多言語多読 <a href="https://tadoku.org/">https://tadoku.org/</a></li></ol>

科目名	模擬授業
担当講師	西尾亜希子 (ATOZ ランゲージセンター) 椿文緒 (インターカルト日本語学校講師) 坂本彩 (インターカルト日本語学校非常勤講師)
単位時間数	2 単位時間
目的	模擬授業実習に向けて、各グループで発表のための教案を検討し、実習の準備をする。
教育概要	模擬授業 (準備)
内容	<p>模擬授業はマレーシアとベトナムの現地日本語学習者に向けて ZOOM で行う。</p> <p>事前に模擬授業の教授内容・学習者情報、担当を発表し、授業までに各自教案を作成することを課題とした。</p> <p>マレーシア担当 2 グループ・ベトナム担当 2 グループで全 4 グループ (6~7 名) に受講生を分けた。</p> <p>模擬授業の課題は以下。</p> <p>マレーシア</p> <p>目的：日本の食べ物や文化、日本での生活について知りたい。</p> <p>学生：20 代前半、中華系、大学生 3 名 (男性 2 名、女性 1 名)</p> <p>ATOZ ランゲージセンターの学生。</p> <p>JLPTN4~N3 の中間程度 (初中級)</p> <p>日本に旅行で行ったことはあるが、住んだことはない。</p> <p>YouTube や Vtube に興味がある。</p> <p>ベトナム</p> <p>目的：日本人の友達と日本語で日常会話がしたいので、友達会話を学びたい。</p> <p>学生：20~30 歳 男女 3 名 高校生、大学生、会社員</p> <p>サイゴンランゲージセンターの学生。</p> <p>JLPT の N5 取得済 (みんなの日本語・初級 I 修了程度)</p> <p>教室や、身の回りなど、日常生活の中でよく出会う場面での簡単な会話ができる。また、普通体はわかるが、日常会話で自然にうまく使えない。</p>

	<p>授業当日は、担当のグループに分かれ、各グループ内で受講生の作成した教案を共有し、一つの教案にまとめてもらった。</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p><b>【受講者の声】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークで他の方々と意見を出し合う事で色々な視点、考え方があり、教え方に正解はないのだと改めて感じた。</li> <li>・グループ内の話し合いで、他の受講生からアドバイスなどをもらい勉強になった。</li> <li>・グループ内でいろいろな人の意見を聞くことで、よりよい教案になったと思う。写真の使い方、意図など自分では気づかない視点の意見を聞くことができたので、とても勉強になった。</li> <li>・様々な方と話す中で、自分にはないアイデアがたくさんあり、自分1人で考えるのではなく、誰かと協力しながら考えることはとても大切だと思った。</li> <li>・受講者の数だけ、アイデアはあるということを感じた。自分だけのアイデアだけでは偏りがあり、視野も狭く、いろいろな方との意見交換や共有はとても大切なことだと思った。</li> <li>・自分の日本語教師としてのビリーフを見つめなおす時間にもなった。多くの受講者と対話をする事で、視野を広げることが少しできたように感じる。</li> <li>・話し合いの時、全くテーマもやりかたも違う案を1つにまとめるのは、難しかった。日本語教師は、チームのように授業をリレーすることも多く、きちんと自分の意見を伝えながらも、他の教師とも折り合いをつけていかなければならない。今回は時間の関係でできなかったがチーム内でうまくいかないときでも、時間をかけて話し合っていく必要があると感じた。</li> <li>・オンラインでのセミナーではなかなか横のつながりができにくいですが、少人数でお互いの顔を見て、情報共有することは今後もつながっていきけるきっかけにもなると思った。</li> </ul> <p><b>【成果と課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで教案を作成することに困難を感じる受講生もいた一方で、さまざまなアイデアや意見を聞くことが自身の新たな気づきとなった受講生も多かった。特に、教師経験の少ない受講生ほど、グループ内で話し合うことが勉強となったと感じていたように思う。</li> </ul>



	<p>・2コマ（90分）では時間が短く、全グループが終了後の延長を申し出た。受講人数やグループ内の人数によって必要となる時間が変わってくると思うが、時間設定を課題としたい。</p>
参考資料	なし

科目名	模擬授業
担当講師	西尾亜希子 (ATOZ ランゲージセンター) チン ティ フーン タオ (サイゴンランゲージセンター校長)
単位時間数	2 単位時間
目的	現地の学習者に対して授業をし、フィードバックを行うことで、海外に赴任した際の授業のポイントや注意点等を考える。
教育概要	模擬授業
内容	<p>各グループの代表者1名がベトナム・マレーシアの学習者3名に対し ZOOM にて模擬授業を行った。</p> <p>受講生が作成した教案は45分の授業だが、冒頭の10分間を発表、模擬授業の後、その後の授業展開の説明を行ってもらった。</p> <p>ベトナム サイゴンランゲージセンターの学生3名に対し、友達会話をテーマに2グループの代表者が授業を行った。</p> <p>マレーシア ATOZ ランゲージセンターの学生3名に対し、日本の文化紹介をテーマに2グループの代表者が授業を行った。</p> <p>事前に学生に写真を用意することを課題として出すグループもあった。</p> <p>模擬授業後は、担当講師からのフィードバックと学生からの感想をもらった。</p> <p>受講生は各グループへのコメントを授業後に回収し、発表グループに共有した。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>【受講者の声】</p> <p>◆模擬授業を見て気づいたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一方的に質問をして、学習者が答えるよりも、やりとりをしながら、学習者自ら気づく、という授業スタイルがいいという学びを得た。</li> <li>・答えを教えすぎない、問いかけながら進めるというやりとりをしながらの授業スタイルは見ていても楽しかった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・導入は、特に初対面であれば、非常に大事だと改めて実感した。「好きなアニメや映画」のような質問は学習者自身のことを答えるので比較的話しやすく、まず言いやすいことで発話しておくことで、その後の発言のハードルを下げるのは有効だと思った。</li><li>・チラシ一枚でも、十分に授業の教材をなり得ることを知り、自身の授業や教材教案に対する考え方が、より一層広がった。</li></ul> <p>※事前課題・宿題を出すことについて</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ある程度自由度のある事前課題を提示して、準備してきて発表してもらうことも、学習者の自由な発想を引き出し、授業への積極的な参加意識を高める効果もあるということがわかった。</li><li>・学習者のレベルや関心、得意分野に応じて適切な宿題(復習)を出すことも、非常に大きな学習効果が期待できることを学んだ。教室外では日本語を使う機会の少ない海外での学習者にとって、授業外でも主体的に楽しみながら日本語を使う機会となり、モチベーションの維持向上にもつながると思う。</li></ul> <p>※文化紹介というテーマについて</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日本文化を教えることの難しさを感じた。相手は大学生なので、それなりの知的関心を惹くものでなければならないと思う。</li><li>・日本文化を講師が一方向的に紹介するだけでなく、海外の学生に自文化を紹介してもらうことは能動的な活動となり、自文化に対する再認識や日本との文化比較にもなり、日本人講師側も学習者の文化に興味を持っていることを伝える機会にもなると思った。</li></ul> <p>※オンラインでの授業について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・オンラインでは学生の細かな表情がわかりづらく、コミュニケーションがより重要になると思った。逆に今回のように遠隔地から授業ができるというオンライン授業のオンラインならではの利点もあるが、オンライン授業でできる工夫についてもっと勉強したい。</li><li>・画面越しの学習者の表情やリアクションを適当に掬いあげる難しさを感じた。</li><li>・オンラインでのスタイルは継続されていく可能性が高く、授業スタイルも変容していくと思うので、どんな状況下においても対応できる力を養っていきたい。</li></ul>
--	---

◆模擬授業を通しての感想

- ・学生に実際に教える事を考えての教案作成は普段教えている学生ではないため、語彙や文法など気を配らなければならない事が多かったが、良い勉強になった。
- ・学生さん達の感想を直接聞けて、自分の考えとのズレも確認できた。自分が思っているよりももっとシンプルに簡潔な教え方を心掛けたい。
- ・日本で学ぶのとは状況の異なる学習者一人一人にしっかりと向き合っ、目的や興味、得意分野などを様々な機会にリサーチして分析し、学習意欲が高まるような授業を丁寧に準備して臨機応変に対応することが重要だと感じた。
- ・オンオフ関係なく大切なのは、教師が明るい表情で学生に問いかけ、学生が話しやすい雰囲気を作ることだと実感した。
- ・教科書とカリキュラムに沿って授業を行うことがほとんどだったが、海外へ赴任したら今回のように「友達会話を勉強したい」「日本文化について知りたい」というざっくりとした内容だけで授業をしなければならない、ということを実践を通じて学ぶことができ、大変有意義だった。
- ・教案や授業の流れを考えるにあたって、学習者の基本的な情報のみで、会ったことのない学習者が対象の授業を準備するのは非常に難しいことだった。学習者情報の重要性を再確認する機会ともなった。
- ・全てを教えるのではなく、伝えることを考えさせたり自主的に行動を起こすきっかけづくりと、相手に伝えるために学んだことから自分で組み立てていく過程を支援することが自分の役割なのではないかということを知ることができた。

【成果と課題】

- ・オンラインではあるが、実際に現地の学生と接し、声を聴くことができたことが、受講生の今後のモチベーションにつながったように感じる。
- ・日本にいる学習者と海外にいる学習者に教える違いというのを考え、また実際に感じることもできたのではないか。
- ・文化紹介は海外では求められる機会も多いテーマであるため、「海外に赴く日本語教師」向けの本研修では文化紹介というテーマのほうが相応しかったように思う。模擬授業のテーマ決めは検討が必要

	要。
参考資料	なし

科目名	イベント企画
担当講師	西尾亜希子 (ATOZ ランゲージセンター) チン ティ フーン タオ (サイゴンランゲージセンター校長) 長谷川卓生 (JEDUCATION CENTER 代表)
単位時間数	3 単位時間
目的	海外の日本語教育機関では、教師は授業以外に文化交流等のさまざまな目的を持ったイベントの企画・運営を求められる。今回の授業では、いくつかのイベント趣旨に沿った企画の考案、チームでの検討・発表を通して、実際の赴任時に活かせる能力や求められるものに応えるためのヒントを得る。
教育概要	イベントの企画考案
内容	<p>事前にマレーシア・ベトナム・タイの民間日本語学校からそれぞれイベント趣旨を発表。それに対し、受講生はイベント企画案を考えることを課題とした。</p> <p>イベント趣旨</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ベトナム</li> </ul> <p>300 人規模でオフライン形式のイベント。状況によってオンラインに切り替えることのできるもの。</p> <p>目的：1. ホーチミン市の若者、特に日本文化に興味を持つ大学生・中高生に新鮮で、独特なイベントを体験してもらいたい。</p> <p>2. サイゴンランゲージセンターのファンを増やしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マレーシア</li> </ul> <p>オンラインでのイベント。</p> <p>目的：1. マレーシアの生徒が日本文化に触れる機会を増やしたい</p> <p>2. マレーシアに日本ファンを増やした</p> <p>3. 交流の場として (学習者とマレーシア在住日本人)</p> <p>4. ATOZ ランゲージセンターのファンも増やしたい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・タイ</li> </ul> <p>赴任先の日本語教育機関の在校生に向けたイベント。</p> <p>目的：日本語学習のモチベーション維持</p> <p>ライブ授業では、グループに分かれ、各自の企画案を共有し、グル</p>

	<p>ープで一つの企画案を作成してもらった。各グループの発表後、担当講師からのフィードバックを行った。</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p><b>【受講者の声】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語を学ぶだけでなく、実際に言葉を使った交流やアウトプットしていく機会を学校としても創出していく企画運営力も大切なのだと実感した。</li> <li>・現地事情がわからない状況で立案する難しさはあったが、グループや全体で共有することで自分では考えつかないイベントについても知ることができ、学びがあった。オンラインで参加者に能動的に楽しんでもらい、全体として一体感が得られるイベントを立案することは難しかった。</li> <li>・そのイベントを実施するにあたりどういう意図があるのか、学校の宣伝をするためにどのようなアイテムを使うのか、いろいろな側面から考える必要があることを学んだ。</li> <li>・今回、制約を考えず、いい意味で無責任にこんなのもあるこんなのも楽しいと考えることはとても楽しかった。</li> <li>・目的によってイベントの内容が変わることを実感し、広い知識や発想の柔軟性が必要な点が難しく感じた。</li> <li>・新型コロナウイルスの影響やオンライン学習を考慮すると、一つの国にいる日本語学習者だけでなく世界の日本語学習者と会話をするなど、つながることができるシステムを整備することが今後はますます必要になることを感じた。</li> <li>・今後はオンライン・オフライン双方の利点を生かした実現可能なイベントを企画していくことが今後求められると思った。</li> <li>・いろいろな案があったが実際に実現するためのマンパワー等の学校側の状況をしっかりと考慮する大切さも感じた。</li> <li>・現実には、イベント企画をしてもそれを実施・運営するのはローカルスタッフになると聞き、現場の状況を事前に把握しておく事が重要だと気づいた。</li> <li>・コロナでオンラインが進んできた中で、各国学習者をつなぎ、お互いに話し合うのも興味深いと思った。一方で、日本語教師として授業をしていく中で、こうした外部との交流は手間暇がかかり、果たして自分ではできるのかを考えさせられた。手間暇をなるべく減らしていくためにも日頃、色々な方と関り、信頼関係を築いていくことは大切だと実感した。</li> </ul>

	<p>・日頃から教師同士やスタッフの方とのコミュニケーションを円滑にし、協力し合って物事を進められる体制を構築しておくことと、健康・体力、そして現地の状況に常にアンテナを張って柔軟に思考し、対応できる力が求められると感じた。</p> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>・受講生は海外に赴任した場合、授業以外のことも求められるということを経験を通して実感することができたのではないかと感じた。</p> <p>・イベントが必要とされている背景や企画案を実施する場合の問題点など十分な議論ができなかったのではないかと感じた。1か国45分の構成であったが、時間の配分が適切だったかは改めて検討したい。</p>
参考資料	なし



科目名	マネジメント
担当講師	加藤早苗（インターカルト日本語学校校長）
単位時間数	3 単位時間
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外での実務及び関係者との連携の必要性について理解する</li> <li>・日本語教師の海外でのマネジメントについて広い範囲から考える</li> <li>・講座全体を振り返り、各自の目標を明確にする</li> </ul>
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マネジメントの実際を聞き、考える</li> <li>・講座全体の振り返り</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際のマネジメントの実例を聞き、自分に引き寄せて考える</li> <li>・マネジメントをする際の考えを共有する</li> <li>・講座全体の振り返り</li> </ul>
受講者の声／ 成果と課題	<p><b>【受講者の声】</b></p> <p>◆授業で学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・赴任地域を知り、積極的にかかわり楽しむことが地域のニーズにあった日本語教育の実践につながるということを今回の授業でも学ぶことができた。</li> <li>・マネジメントをするには、全体を把握して行わなければならないこと。大事なことを決断するには、常に目的達成のための優先順位を意識し、常識にとらわれない柔軟な思考を持って取り組む必要があるということ学んだ。</li> <li>・教師経験のある方がマネジメント側に立つと、悩むことが多くなるが、やり遂げると深くて良い結果を残せる事。</li> <li>・マネジャーであれば契約内容、学校運営（企業）に精通していなければならない。しかし対処する相手は生身の人間である。人としての心で対応するも運営する立場の割合をどの程度まで維持できるか。赴任者には必要経費と時間が掛かる以上、交替でなく今を生かして使うことが最善であるという考え方。</li> <li>・固定観念に捕らわれず、日本とは違う現地の事情があることをよく観察して柔軟に対応すること、失敗を恐れ過ぎずに色々なことにチャレンジすること、うまくいかないことや想定外のことがあっても、これも海外ならではの経験と受け止めること、これらができるようなしなやかでたくましい心が必要だということ学んだ。</li> </ul>

	<p>・様々なポジションの教師に寄り添い、思いやりの気持ちを持つこと、運営面での現実的な側面とはかりながら組織を作っていくこと。日本語教師であるということに縛られずに、様々なものに関心を持っていきたい。</p> <p>◆授業を受けて感じたこと、考えたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・海外に行く上で、今までの日本での生活状況を払拭し新しい考え方を受け入れて「自分なりの」発信力も持ちながら柔軟に対応していくことの大切さを改めて感じた。</li> <li>・日本語学校だけに限らず、どの職場においても、職場の人々のコミュニケーションと連携がとても大切であると思う。</li> <li>・マネジメントを学び、海外で働くことは日本語を教えるだけではない、という点について考えさせられた。自分のことだけをしていればいいのではなく、ローカルスタッフや同僚の先生、学校運営にも携わらなくてはならない大変さは、日本にいただけではなかなか体験できないものだと思った。</li> <li>・教師は海外に出ればローカルスタッフとの橋渡しなど様々な業務を行わなければならないのだとその責任の重さを改めて感じた。</li> <li>・海外に派遣された場合、一教師という立場だけでなく特別なポジションにつく可能性があるという考えは今までなかった。中間管理職としての折衷案を考えるなど授業とは別の能力が必要になる。</li> <li>・日本や教師のイメージを守りつつ、ローカルなルールにも対応しなければならぬ点に矛盾とその国でビジネスをすることのバランスの難しさを感じた。その現地に合わせた柔軟さと、この点だけは譲れないと考える自分の「芯」となるようなアイデンティティーとを「良い」加減をもって働いていきたい。</li> <li>・海外では外国人の立場なので、現地の言葉を学んで使うことや、現地のことを知ろうとすることは大事で、その国の人に受け入れてもらってコミュニケーションが円滑になることはもちろん、自分自身も心豊かになり、それこそが海外に行く意義でもあると思う。</li> </ul>
<p>参考資料</p>	

【総合成績】 A: 2 2名 B: 3名 C: 8名 F: 4名 受講者合計: 37名

(2) 令和3年度

科目名	国際関係・海外の日本語事情
担当講師	西原鈴子
単位時間数	4 単位時間
目的	日本から海外に赴任する日本語教師のために、予め知っておくべき国際的理念、各国・地域の日本語教育事情とそれに基づく学習の在り方、日本語を母語とする教師の担うべき役割を紹介した。
教育概要	以下の4つのテーマに沿って展開した。 (1) 日本語教育に関連する国際的理念 (2) 海外における言語教育の現状 (3) 日本語母語話者教師の役割 (4) 赴任国・地域の言語政策
内容	<p>テーマごとの内容は以下の通りである。</p> <p>(1) 日本語教育に関連する国際的理念</p> <p>世界の国・地域に赴任する日本語教師は、自分のプロとしての経験と知識を、赴任先の教育文化的伝統と新しい潮流に沿って生かしていくことが求められている。特に言語教育の新しい潮流については、グローバルな教育改革の影響を受けていることが見受けられる。その潮流を支える代表的な理念を四つ紹介した。</p> <p>＊SDG s (持続可能な開発目標) :</p> <p>＊キーコンピテンシー</p> <p>＊21 世紀型スキル</p> <p>＊CEFR : (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment= 外国語の学習、教授評価のためのヨーロッパ共通参照枠)</p> <p>(2) 海外における言語学習の現状</p> <p>国際交流基金が3年ごとに実施している世界の日本語教育機関調査の結果と、それに基づいて世界各地の日本語の現状を分析し、学習者数・教師数・教育機関数・動機付けを比較しながら解説した。</p> <p>(3) 日本語母語話者教師の役割</p> <p>日本語母語話者として海外に赴任する日本語教師は、赴任先で現地出身の日本語非母語話者教師と協働することになる。それにあたって予め、教育現場での期待と現</p>

	<p>地教師との役割の違いを認識しておく必要がある。また、派遣先の教育文化、外国語教育政策を知り、生活文化を含めて自分自身の異文化適応へ姿勢を示すことが、現地からの受入れをもたらすことへの気付きを促した。</p> <p>(4) 世界の国・地域の中には多民族国家が多く存在し、言語を含む民族的背景の違い故に民族間に葛藤が存在し、政治社会的不安定の原因となっていることもある。言語の教師として、赴任地の言語政策を知ることは、学習者と彼らの言語文化的背景を知ることにつながる。そのようなかたちで学習者の全体像を知ることは、仕事の成功に繋がる一歩と訴えた。</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p><b>【受講者の声】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●現在の教育に関連する国際的理念が大変勉強になった。特に何を知っているかという従来のコンテンツベースより、その知っていることを使って何ができるのかというコンピテンシーベースへの移行という潮流が学校教育のみならず、日本語教育においても起きていることを改めて感じた。</li> <li>●日本語教育での基礎となる知識なので、海外への赴任有無に関わらず、日本語教師としてしっかり理解しておかなければいけない内容だと思いました。</li> <li>●様々な枠組みやモデル、目標などの説明を聞いて、今後ますます言語習得だけに注目するのではなく、個々のニーズや実質的なコミュニケーションに役立つ生活実践的なアプローチが必要になっていくと感じた。</li> <li>●世界の人々がなぜ日本語を学ぶのかについて、地域ごとの違いを細かく見ることができておもしろかった。実際現地へ行ったときの分析の仕方の1つとして使っていこうと思う。</li> <li>●赴任地の言語政策を知ることが重要であるということを学んだ。学習者の社会的立場やキャリア育成という観点から、日本語教師としてできることは何かを考えるのが大切であることを再認識した。</li> <li>●その国の言語政策を知るとは、現地学習者の言語文化的背景を知ることに繋がるし、学習者を知ることは、学習者との良い関係を築くうえでも大変重要であるため赴任先の言語政策を知ることが重要だと考えた。</li> </ul>

	<p>【成果と課題】</p> <p>海外に赴任して日本語教師として働くことを希望する日本語教師が、教育現場のスキルと同様に、言語教育の世界的潮流、国・地域の社会的事情および言語政策を知り、現地での生活について自分自身の異文化対応を含む知識を予め得ておくことの重要性を研修受講者と共有することができた。前提となる知識の感触は得られたと思う一方、実際に赴任して初めて納得できる事柄が多く、現段階では現実的な理解は得られていないと想像する。</p>
<p>参考資料</p>	<p>カルヴェ, ルイ＝ジャン (西山教之訳) 2000 『言語政策とは何か』 白水社</p> <p>河原俊昭 (編) 2002 『世界の言語政策－多言語社会と日本』 くろしお出版</p> <p>河原俊昭・山本忠行 (編) 2004 『多言語社会がやってきた-世界の言語政策Q&amp;A-』 くろしお出版</p> <p>国際交流基金 2010 「J F 日本語教育スタンダード 2010」</p> <p>国際交流基金 2019 『海外の日本語教育の現状』</p> <p>グリフィン・R/マクゴー・B/ケア・E (三宅なほみ監訳) 2014 『21世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち』 北大路書房</p> <p>JICA (独立行政法人国際支援機構) ホームページ <a href="https://www.jica.go.jp/sdgs/index.html">https://www.jica.go.jp/sdgs/index.html</a></p> <p>平高史也 2005 『総合政策学としての言語政策』 総合政策学ワーキングペーパーシリーズ 83 慶応義塾大学大学院・メディア研究科</p> <p>文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 2020 「日本語教育の共通参照枠」</p> <p>ライチェン・D./サルガニク・L (立田慶裕監訳) 2006 『キー・コンピテンシー 国際標準の学力を目指して』 明石書店</p> <p>三好重仁 2003 「言語政策・言語計画」 小池生夫 (編) 『応用言語学事典』 研究社 353-362</p> <p>Daoust, D. 1997 Language planning and language reform. In <i>Proceedings of the International Colloquium on Language Planning</i>. University of Laval Press 406-428</p> <p>S p o l s k y, B &amp; S h o h a m y, E. 2000 language practice, language ideology, and language policy. In Lambert &amp; Shohamy (eds.) <i>Language Policy and Pedagogy</i>. John Benjamins 1-41</p>

	山本忠行・河原俊昭（編著） 2007 『世界の言語政策 第2集』 くろしお出版 吉島茂/大橋理枝（編訳）2004『外国語の学習、教授、評価のための ヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社
--	---

科目名	海外で必要な能力
担当講師	加藤早苗
単位時間数	2 単位時間
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外に赴く日本語教師に求められる能力や役割について理解する</li> <li>・海外の現役日本語教師の事例から、国や文化、それぞれの機関の役割 による違いや特徴を理解する</li> <li>・海外においては自らが外国人となる教師自身が、異文化について学ぶ 必要性を理解し、今後の継続的な学びに繋げる</li> </ul>
教育概要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 当研修の概要</li> <li>2. 海外で日本語を教える人に求められる能力</li> <li>3. 海外で活躍する日本語教師たちへのインタビュー</li> <li>4. 海外に赴く日本語教師に必要なこと ～異文化理解を中心に～</li> </ol>
内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ・文化審議会国語分科会が示した「報告書」における、「日本語教育 人材の役割・段階・活動分野に応じた養成・研修のイメージ」 ・海外に赴く日本語教師【初任】研修の教育課程編成の目安 ・この研修における人材育成の目標</li> <li>2. ・海外の現職日本語教師へのアンケート結果の共有 「赴任する前に学んでおくべきだと考える知識／技能の重要度」</li> <li>3. ・(1) ニュージーランドの大学で教える教師の事例 (2) ベトナムの技能実習生送り出し機関で教える教師の事例</li> <li>4. ・海外で活動する母語話者日本語教師に望まれる資質 ・世界6カ国の公立学校で教育を受けた人の声 ・海外の新人日本語教師との会話の事例</li> </ol>
受講者の声／ 成果と課題	<p>【受講者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●実際に様々な土地でご活躍されていらっしゃる方々の生の声というのは様々な示唆に富んでおり、考えることがいろいろとあった。</li> <li>●海外で日本語を教える教師に求められるのは臨機応変な対応力と異文化を理解できる自立した人間力であることだと学んだ。</li> <li>●オンラインでも日本語が学べる時代になった今、日本語教師とし</li> </ul>

て海外に日本人が赴く意義について、日本語を使う場面の提供や、日本を理解してもらおう・日本を伝える場面を作ることがオンラインではできない現地に赴く日本語教師に求められている価値だという点に共感した。+αの価値が提供できるようにしていきたい。

●日本語教育は、コロナ禍にあってオンライン授業が一般的になりつつあるが、現地に赴いている生身の日本人教師だからこそできることが沢山ある、言語を習得してもらうには、人的交流が欠かせないという指摘があり、大変印象的だった。

●現地のニーズに自分がこたえられるものを持っているか、アピールできるものを準備できるか、しっかり考えていきたい。

●理念的な内容と具体的な個人の体験や苦労話が程よくミックスされており、とても濃い内容の講義だった。

●言語のみならず、私たちを通して、日本への魅力が伝えられ、モチベーションを上げることができる先生になるために、今すべきことを学んだ。

●実際にあり得る事例を沢山聞くことで、断片的なイメージからの過度な期待や不安を払拭でき、フラットな見方や心の準備をすることができると感じ、現地で勤務されている先生方の実体験のお話を伺うのは大変意義があると思った。

●授業では日本語以外に日本文化が学べるような内容を組み込むのが良いだろうと考えていたが、現地の習慣・文化を取り入れた導入や例文を取り入れることが学習者にとってより楽しい授業ができる、という新しい視点を得ることができた。

●オンラインで世界中と繋がれる世の中で、「どうして自分が海外で教えたいのか、どうして海外じゃないとダメなのか」ということを考えさせられる講義だった。

●海外で日本語教師をするまでの道のりは本当に人それぞれであるが、今回のお話しで具体的なイメージを持つこともできた。

#### 【成果と課題】

海外で活躍する教師の生の声を届けることで、一例ではあるが、海外で働くというイメージが具体的なものとなったのではないかと感じる。求められる能力を知ることと、それを身に着け、実践することは別ではあり、そこをどうするかは課題ではあるが、それぞれの今後の道筋を改めて考える機会となった。



参考資料	<ul style="list-style-type: none"><li>・「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版」 平 成31年3月4日 文化審議会国語分科会</li><li>・『ことばで社会とつなぐ仕事 日本語教育者のキャリア・ガイド』凡人社</li><li>・「ナージャの6ヶ国教育比較コラム」より <a href="https://www.konnano-dodaro.jp/projects/nadya">https://www.konnano-dodaro.jp/projects/nadya</a></li><li>・比較すると面白い世界の座席 (Hugo Yoshikawa) <a href="https://www.kyobun.co.jp/commentary/cu20190311/">https://www.kyobun.co.jp/commentary/cu20190311/</a></li></ul>
------	---

科目名	日本語教育事情 マレーシアの事例
担当講師	西尾亜希子
単位時間数	2 単位時間
目的	マレーシアという国、マレーシア国内の日本語教育、民間日本語学校で日本語を教えるということに知識を深める
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マレーシアとは</li> <li>・マレーシアの教育制度</li> <li>・多民族国家としてのマレーシア</li> <li>・マレーシア国内での日本語教育の現状</li> <li>・当校の生徒が日本語教師に求めるもの</li> <li>・当校の教師から海外で働く先生へのアドバイス</li> </ul>
内容	マレーシアについて概要、歴史、民族について、まずマレーシア人の生徒に教える場合に知っておいたほうがいい内容を伝えた。マレーシア国内で、どのような機関でどのように日本語教育が行われているか、また生徒たちの学習のきっかけやモチベーションとなるところも紹介した。生徒と教師にインタビューをし、どのような能力や人材が求められているのか、赴任前にやっておいたほうがいいことなどを話した。
受講者の声／ 成果と課題	<p>【受講者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●多民族国家であるマレーシアの民族構成や、各民族の言語事情など、漠然としか知らなかったことを具体的に学ぶことができました。</li> <li>●マレーシア人とひとことで言っても、教育バックグラウンドも言語も宗教も考え方も大きく異なるので、その点十分に知って理解しておく必要があると思った。</li> <li>●マレーシア人の概ねは日本人に対して好意的な印象を抱いていたが、未だ戦争の傷跡が癒えない方も多いと知り、赴任前に改めて両国の歴史を学び直す必要性を感じた。</li> <li>●民族によって避けた方が良い話題や教材があるのだということを知った。食べ物のタブーについては分かっていたつもりだったが、想像力を働かせないと、知らぬ間に学習者を不快にさせてしまう危険性がある。</li> <li>●異国で日本文化に触れるチャンス、学習へのモチベーション維持につながる、思い出作りにもなる、生徒同士が仲良くなるきっかけにもなるなどイベントの重要性について学べた。</li> <li>●イベントの必要性について、一人ではできることは限られる、周</li> </ul>

	<p>りを巻き込んでということが聞いてよかった。学校以外の人に入ってもらふことで、学生にとっても、そして参加する日本人にとっても得るものがあるのだとわかった。まわりをつなげていけるような人になりたいと思った。</p> <p>●日本語教師という仕事は、日本といろいろな国の橋渡しができるが、現地で日本人コミュニティの橋渡しの的なこともできるんだと見方が広がった。</p> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>ネットで調べて出てくる情報だけでなく、実際の現場からの声が伝えられたと思う。特に生徒と教師に実際にインタビューした動画を交えたことで、受講者の方にマレーシアでの日本語教育についてのイメージを持ってもらいやすくなった。質疑応答の時間は取れなかったが、終了後にいただいた質問に書面で回答し、受講者の方と共有することができた。</p>
参考資料	なし

科目名	日本語教育事情 タイの事例
担当講師	長谷川卓生
単位時間数	2 単位時間
目的	日系企業が多数点在するタイにおける日本語教育の重要性を理解する
教育概要	海外で日本語教師を考える際、その国における日本語話者へのニーズ、ならびに日本語話者の役割を把握すること 各種教育機関の形態の違いなど
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本語教育の社会の中での役割</li> <li>・ タイの社会・産業における日本語教育の重要性</li> <li>・ 日本語に対する個人のニーズ・重要性</li> <li>・ 当校の学生にみるタイ人日本語学習者の動向</li> <li>・ 日本語教師のタイにおける勤務先の形態</li> </ul>
受講者の声／ 成果と課題	<p><b>【受講生の声】</b></p> <p>●海外へ行く前にしておいた方がいいこととして、赴任国の習慣や文化を知っておくことや日本のことを知っておくこと（特にアニメやマンガ）、日本のいろいろなところへ行っておくこと（旅行）が挙げられており大変共感した。</p> <p>●自分が外国人として生活しているのだから、学生が日本に行ったら、こういうことに困るのではないかとといった授業のヒントが得られると話されている先生がいて、外国で教えるからこそ感じられる事だと思った。</p> <p>●タイで日本語教師をすることが目標なので、今回の授業はとても参考になり大変貴重でリアルな意見が聞けた。実際は理想と現実が異なる部分もあるとは思いますが、想像していたタイ人の学習者の印象、タイでの生活だったのでより一層タイで働きたいと思った。</p> <p>●たくさんの講師のインタビューが聞けて、これをやっておけばよかった点、タイで働くうえでの心構えなども具体的に教えてもらえて、今後の自分の課題が見つかった点は良かった。</p> <p>●オンライン授業のやり方も初めて目にすることが出来、またオンラインの長所、短所を直に聞けたことは、大いに参考になった。</p> <p>●タイにおける日本語教育の現状や需要等、ビジネス面からの話もたくさんあり勉強になった。タイに進出している企業は現時点でも多いので、今後さらに増えればもっと日本語教育の需要も高まって</p>

	<p>くるところ</p> <ul style="list-style-type: none"><li>●日本国内の一般的な東南アジアのイメージと実際はかなり違っているのが改めてよくわかった。</li><li>●タイ全体の日本語へのニーズを、商工会議所の資料からの説明は、なかなか他では聞けない内容で、有意義な講座だった。タイでの今後の日本語話者の役割、コロナ終息後のオンライン授業の見解等、経営者としての考えが聞けたことが良かった。</li></ul> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>実際にタイで働く日本語教師の声を届けたことで受講生にはタイでの生活の大変な面も含めてリアルな現場の状況がイメージできたのではないかと思う。また、実際のオンライン授業の様子や学生の声を通して、客観的にオンライン授業のメリットデメリットを考える機会となった。日本語学校の経営者目線からの話もあり、多角的にタイの日本語教育事情を伝えることができたが、一方で、渡航する際のビザ取得についての話を聞きたいという声もあったため、どこまで授業の内容を広げるかについてはさらに検討が必要。</p>
参考資料	なし

科目名	日本語教育事情 イタリアの事例
担当講師	西岡芳栄
単位時間数	2 単位時間
目的	海外に赴く日本語教師の方に向けて、イタリアの日本語教育事情や、日本語学習者の学習目的について解説する。
教育概要	日本とイタリアの関係 イタリアの日本語教育事情 イタリアにおける外国語学習について イタリアの日本語学習者はなぜ日本語を勉強するのか
内容	<p>イタリアと日本は友好関係を150年以上前から続けている。現在は日本文化に関心を持つイタリア人がその延長線上で日本語学習を始める場合が多い。そこで、日本語学習に関心を持つ人がイタリアでどのような場で日本語を学ぶことができるのか、現状を初等教育から高等教育にかけて説明した。</p> <p>また今後イタリアで日本語教育に従事することを希望する方に、どのような機会があるのか、またどのような心構えが必要かについてもお話した。</p> <p>さらに、イタリアで日本語を学んでいる学習者はどのような目標を持って、将来学んだ日本語を何に活かしたいと思っているのかについて、学習者にアンケートを実施し、その結果についてお話した。</p> <p>さらに、高等教育において日本語を学ぶ学生たちが、日本語を用いて作った動画作品についてご紹介した。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p><b>【受講者の声】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ヨーロッパ圏での日本語教育は第3言語であることについて、教え方についても東南アジア圏の学習者とはかなり違いがあると感じた。</li> <li>●これは他のヨーロッパの国でもいえることだが、イタリアで日本語を学ぶ人が少ないのは、生活に直結した必要性がないことと、第二、第三外国語としてヨーロッパの他の言語を学ぶこと、そして趣味や興味関心で勉強するには漢字などハードルが高いことなど、いろいろな角度から見てとれた。</li> <li>●2部構成で、イタリアの国の情報、日本語教育事情・イタリアでの日本語教育・学生へのインタビューなど、色々な項目がありとて</li> </ul>

	<p>も内容が濃かった。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>●アジア圏とヨーロッパ圏との日本語学習の需要の差異を、イタリアの実情の紹介等、普段聞けないことが多く有益だった。ベトナムと比較した日本語学習者数など具体的な数字をだしたことで、イタリアの実情をより理解できた。</li><li>●日本語学習者の学習動機としては、学習者自身の興味関心に基づくことが多く、中級以降の学習意欲が続きにくいということがとても興味深かった。仕事や進学という、自身の差し迫った必要性がない学習者に対する、学習意欲付けの難しさを感じる。日本語をマスターすることによって、自分の将来がどのような可能性が広がるのかを伝えていくことの重要性を学んだ。</li><li>●大学での日本語のビデオ作製という課題は興味深かった。オンライン授業では出来ない事で、なにより自分たちが発信したいことを話すというのは、SNSやInstagramでの発信にも似ていて、違う言語話者に向けて発信する力という今の時代に合ったスキルにも結びつく面白いプロジェクトだと思った。</li><li>●イタリアはオープンマインドなイメージがあるが、先生の話からそうでもないことが理解できた。ステレオタイプにならないよう、何事も先入観なく受け止める姿勢が大切であるという先生のお話に共感した。</li><li>●身近にイタリア人学習者がいないので、イタリアの日本語教育は未知の内容だった。なんとなくアジアだけを対象にしていたが、視野を広げて良いんだと気づいた。</li><li>●今回のビデオ講座を見て、イタリアでの日本語教育は需要が高まってきているとはいえ、学べる場所が多いわけではないので、これからますますオンラインレッスンを受ける人が増えそうだと感じた。</li><li>●イタリアは今までのアジアの国と比較して日本語を学ぶ目的が違い、どちらかというとなかなかモチベーションをあげるのが難しい国だと思った。学校教育の中でもそんなに重要視されていないこともあり、その中での日本語教師の果たす役割は、夢をもってコツコツ学ぶ学生に寄り添い、夢を実現するためのサポートを行うことでもあることを痛感した。</li><li>●日本語教師として日本語を教えるだけでなく日本人として日本を知ってもらうことも大切なことだと改めて考えることができた。</li></ul>
--	---

	<p><b>【成果と課題】</b></p> <p>日本ではアジア圏の学習者に触れることが多く、ヨーロッパ圏の日本語教育事情を知る機会が少ない受講生も多い中、学習者へのアンケートや高等教育での学習者の様子を届けたことでイタリアの日本語教育事情の現状に一端を伝えることができた。録画授業だったため、受講生との生のやりとりはできなかったが、授業後に質問を受け付け、後日回答を書面で受講生に共有できたことで授業内容からさらに一歩踏み込んだイタリアの事情を学ぶことができたのではないかと。</p>
参考資料	国際交流基金 海外日本語教育機関調査



科目名	日本語教育事例 アメリカの事例
担当講師	井上とも子
単位時間数	2 単位時間
目的	現在のアメリカ合衆国における日本語教育事情について知るとともに、求められる教師の役割、態度、スキルについて考える。
教育概要	アメリカ合衆国の日本語教育について
内容	<p>1. アメリカ合衆国について</p> <p>2. アメリカの日本語教育</p> <p>1) 学習者数、2) 日本語教育機関と学習者、3) 日本語教員の資格</p> <p>3. テキサス州ヒューストン地区の日本語教育</p> <p>1) 日本語教育機関、2) 日本語教師会の役割</p> <p>4. 日本語教師インタビュー</p> <p>1) 公立中学・高校、2) 日本語補習校、3) 日本語教育の目的と授業のあり方</p> <p>5. アメリカの日本語教室を取り巻く話題</p> <p>1) 積極的な教育テクノロジーの活用、2) マルチレベルクラス、3) Inclusive な教室</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>「受講生の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●アジア圏の日本語教育事情と違い、アメリカでの日本語教育事情の実情は知る機会が少なく、とても参考になった。</li> <li>●アメリカはテクノロジー先進国だけあって、使用されているアプリも沢山あることに驚いた。</li> <li>●対面授業とオンライン授業の授業後の成果の違い（テスト、パフォーマンス）や定着率の違いが、興味深かった。</li> <li>●アメリカの現地の日本語教育の状況のお話は興味深かった。現地の教科書が非常に高額という事例のような、行ってみないとわからない細かいことが他にも沢山あるのだろうと思った。</li> <li>●現在、日本の教科書は「日本語を使って何ができるかに着目した</li> </ul>

	<p>ものが多い」が、逆にアメリカの教科書は「文学的要素や言語文化的要素をたくさん盛り込んでいるものが多い」というのも面白いと思った。日本語を学ぶゴールの違いによって教科書も変わってくるということから、自分が実際に赴任する国や環境に応じた教材を選定することも大切だと感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●日本語補習校ではもっと簡単な、必要最小限の日本語を学ぶのかとイメージしていたら、帰国後にも対応できるような高度な日本語教育を行っているのだと知って、驚いた。</li> <li>●同じ日本語学習者だとしても、東南アジアでの日系企業勤務を目指している、あるいは技能実習生として日本に赴くことを目標としている日本語学習者とは、動機や関心が異なっている事が分かった。日本語そのものというよりも、外国語や外国のことを知ること、自分の世界観や可能性がどう広がっていくかに重きを置いたアプローチも面白いと感じた。</li> <li>●「教育は動いている」という言葉には大変共感した。教授法に関してもIT等のツールに関しても、新しい知識を学ぶとともに、自分が持っているビリーフについても定期的に再チェックする必要があると感じた。</li> <li>●紹介されていた「必要なのはExtra Time ではない。Extra Support だ」という現場の語学教師の声は、本質を捉えた素晴らしい考え方だと思った。</li> </ul> <p>「成果と課題」</p> <p>今年度の講座では、受講者が自分の状況に置き換えることができる話題を多く扱ったため、より多くの有益な意見や質問を得ることができた。また、講座期間中に受講者と講師間での文字での会話が加わったことによって、講座で扱った個々の話題がより深みのある内容に引き上げられ、受講者個人にとっても意味のある内容にすることができた。これらのオンライン上の会話を、講座全体（受講者、講師、運営者）に負担がない方法で、よりシンプルに行うことで、更に学習効果の高い充実した意見交換ができると思われる</p>
参考資料	なし

科目名	多文化社会
担当講師	清水広美
単位時間数	2 単位時間
目的	海外の多文化社会の事例や講師の活動経験等を通し、日本語教師として大切なことや、真の多文化共生のために必要なことは何か、共に考える。
教育概要	ボリビア多民族共和国の日系社会と継承日本語教育、講師の海外活動経験による気づきを共有し、日本語教師として、多文化社会における異文化理解や共生を、どのように実現していくか考えていくための道標とする。
内容	<p>ビデオ授業：</p> <p>ボリビアは、多言語・多文化社会であるが、その中で日本人はマイノリティーである。日本人の海外移住の歴史を概観し、ボリビアの日系人の継承語教育について戦前移住と戦後移住の違いをその背景から考察。また、母語と母国語の違い、アイデンティティーとは何で決まるか、サードカルチャーキッズという概念についても触れた。そして多様性とは何か、多文化共生のために必要なことは何か、考えるヒントを伝えた。最後に、ライブ授業で受講者に考えてもらう課題を2つ提示。</p> <p>ライブ授業：</p> <p>課題1では、「視点が変われば見え方が変わる」ことを4枚の世界地図で感じてもらい、「当たり前を疑い、思い込みを捨てる」ことが、海外での活動や異文化理解に必要なことだと知る。</p> <p>課題2では、ある国際支援の実例から、それぞれ考えたことをグループでまとめたことを発表。様々な意見をシェアし、この事例からわかる共生と自立につながる支援の在り方について考えた。</p> <p>最後にまとめとして、多文化共生に必要なものは、他者理解のための「エンパシー」であることをキーワードとして取りあげた。また、多文化共生社会実現のために立ちはだかる3つの壁のうち、「心の壁」と「言葉の壁」を取り払うことは、日本語教師ができることであると述べてしめくくった。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>「受講者の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●多様であることは世界や人々を豊かにすること、いろんな視点で物事を考えたり、学生のことを見なければならぬことを学んだ。</li> <li>●日系人について身近に考える機会が無かったため、良い機会だった。</li> </ul>

た。中南米に移住した日本人と、現在日本に滞在している外国人が抱える問題や環境は重なる部分がある。多文化理解や平等性といったことについて考える際に、自分事としてイメージができると思った。

●日本語教師として多文化社会にすることが多いが、やはり国籍や年齢、環境などでその人を見ってしまうことがある。自分の考えを見つめ直すきっかけになった。

●自分の常識が世界の常識ではないということ、違いをありのまま受け入れるということを知る、という言葉がとても印象的でした。

●「木を見て森を見ず」という援助形態については、これまでの経験から思うことは多くあり、また自分もそのようなことをしていないかと絶えず気にかかっていたところでもあった。他の人のことはよく見えるけれど、自分のことを客観的に見ることは難しいことでもある。本当に受け手が必要なものを届けることができているのかということは、常に意識して日本語教師として活動したいと再認識した。

●共感力と傾聴はどんな仕事をしていても大切だと思うが、国や文化が違う分、なおさら大事になってくるなど改めて感じた。考えを固定せず、柔軟に対応できるように常に学生たちは心の壁と言葉の壁を持っていると思って接していかなければならないと感じた。

●多文化共生社会に必要なものは何かを深く学ぶことができた。課題での問いで、「海外では日本の常識が当たり前じゃないことを知る 思い込みがときに偏見であることを知る」という言葉に、改めて自分の考え方を振り返ることができた。個人とコミュニティー全体、国際援助の在り方について、国際支援と異文化理解の重要性をもっと考えていきたい。

●課題を通して、柔軟に物事を考えることの大切さ、当たり前を疑い、思い込みを捨てることが必要と認識させられた。グループワークは、他の人の考え方を知り気づかせてくれるので、楽しく有意義な時間であった。

「成果と課題」

・今回は事前ビデオ授業とライブ授業の2段階方式だったため、昨年よりも、理解が深まったように思う。また、既に海外経験のある受講者もいたため、ライブ授業で、他の意見も聞くことができ、多様な視点を共有するいい機会となったと思われる。

	<p>課題としては、ライブ授業内で、質疑応答の時間が取れなかったことだが、それは文書にて回答することによって、ほぼ解決できると思われる。</p>
参考資料	<ul style="list-style-type: none"><li>・外務HP<a href="https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bolivia/index.html">https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bolivia/index.html</a></li><li>・海外日系人協会HP <a href="http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html">http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html</a></li><li>・一般社団法人日本ボリビア協会HP<a href="https://nipponbolivia.org/">https://nipponbolivia.org/</a></li><li>・『日本人移住100周年誌 ボリビアに生きる』ボリビア日系協会連合会</li><li>・Equity &amp; Inclusion Lens Handbook/City of Ottawa and City for All Women Initiative (CAWI)</li><li>・『サードカルチャーキッズ 多文化の間で生きる子どもたち』デビッド・C. ポロック, ルース=ヴァン・リーケン他. スリーエーネットワーク</li><li>・『他者の靴を履く』ブレイディみかこ 文芸春秋</li></ul>

科目名	「継承日本語」 ～子供の事例～
担当講師	深本明見
単位時間数	2 単位時間
目的	「継承日本語」について知る・理解する
教育概要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 継承語とは？</li> <li>2. ことば育て～子供への3つの贈り物～</li> <li>3. 楽しさ溢れる継承日本語幼児クラス実践例</li> <li>4. 継承日本語教育への親の想いと問題提起</li> <li>5. 子供の幸せと豊かさを求めて</li> </ol> <p style="text-align: center;">問題提起からのグループディスカッション・発表・まとめ</p>
内容	<p>・継承日本語とは、どんな役割を持っているのか、又、成長過程の子供の「ことば育て」をしていく上で必要なことは何かを継承語の文献とシュタイナー教育のエッセンスから伝えた。</p> <p>・実際の授業動画を事例として挙げ、どのような活動をしているのか、教材・文字学習に使用している「ひらがなクレヨン画」の紹介等、その活動を通しての子供の様子・子供が得られること・配慮していることなどを話した。</p> <p>・海外在住の親御さんの、継承日本語についての悩み、心配事、願いをインタビュー動画で紹介。その後、2つの問題提起「継承日本語を伝えていくためには何があればよいか?」「子供に継承日本語を伝えていく上で大切なことは何か?」について各自考え、グループディスカッションをした。</p> <p>・子供の幸せと豊かさを求めて、そこに寄り添っていくということが、未来に向かう子供たちの自己実現へのサポートになる。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>「受講者の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●実践的かつ具体的な事例が豊富に紹介されて、継承日本語をめぐる諸問題がよく理解できた。</li> <li>●なかなか聞くことができない講座内容だった。インタビュー、オンライン授業の様子等 臨場感たっぷりの講座であった。</li> <li>●継承語は現地語を取り巻く環境がこどもたちのアイデンティティの形成にとって、とても大切な問題なのだと感じた。</li> <li>●子供たちに教えるときに興味を持たせることや発見や驚きなども大切になると言われていたが、子供だけではなく学生に教えるときも大切になると感じた。イメージさせたり、理解させたりすることにさらに重きを置き、授業や学生との関わり方に気を付けていきたい。</li> </ul>

- 子供という観点の話ではあったが、学生に対しても同じことが言えるのではないかと思い、「分かる、できる」の発見をいかに多く作れるかが日本語を勉強するときの楽しさだったり、継続のモチベーションになるのではないかと感じた。
- シュタイナー教育を実践しながら子供へ継承日本語を教えることは大変興味深いと感じた。同様に自分が持っている他の知識と日本語教育を掛け合わせることで、より効果的な日本語教育につながるのではと気づき、自分ならではの日本語教育の姿を考えていきたいと思った。
- 言語形成期前半における授業方法を具体的にイメージできる内容は非常に参考になった。
- 子供は無垢な存在だと思うので、良い影響も悪い影響も大人よりもたくさん受けると思う。そこをいかに良い方向にうまくアシストしていくこと、そして親の継承語教育に対する想いも組みつつ、あくまでも学習者は子供なので、子供にとってストレスフリーな継承語学習は何なのかを考えさせられる講義だった。
- 子供にとっての言語という存在を改めて考え直すきっかけになった。普段はどうしても手段としての言語に目が行きがちになるので、子供の成長・発達の一部としての言語という新しい視点を得ることができたと感じた。
- 日本語を母語または母国語としてではなく、第二・第三言語として学ぶ子供たちは、日本語を学ぶのに「ハンディ」を抱えているのではなく、日本語以外の「言語資源」に恵まれているのだ、という視点を忘れてはならないと思った。
- 課題をみなさんと話し合うことで、それぞれの立場で継承語の大切さを考え、意見できたことは、良い経験になった。

#### 「成果と課題」

継承日本語について、講義と子供の事例を通して、大まかに理解していただけたと思う。継承日本語の大切さに共感していただき、継承日本語に関心を持ってくださったことは、この講座の大きな成果だと思う。

実際に継承日本語に関わっていく人材確保・質の向上が今後の課題だと思う。

参考資料	バイリンガル教育の方法・言葉と教育・マルチリンガル教育への招待（中島和子）、家庭でバイリンガルを育てる（桶谷仁美）、親と子をつなぐ継承語教育（近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美）、母語を育てるということ（海外子女教育振興財団）、海外で子供の言葉を伸ばす（カルダー淑子）、子供の健全な成長・シュタイナー教育の実践・教育の基礎としての一般人間学（ルドルフ・シュタイナー）
------	--



科目名	言語の構造
担当講師	石原嘉人
単位時間数	2 単位時間
目的	日本語の漢字の字形、字音語の発音、語義について、また漢字語彙に「スル」が後続した動詞等の文法について、漢字文化圏の出身者が日本語を学ぶ際に役立つ情報を体系的に提供すること。
教育概要	中国語圏、韓国語圏、ベトナム語圏では、それぞれの言語における漢字語彙の知識が役に立つ場合もあるし、逆にマイナスの転移を引き起こす可能性もあることを、数多くの実例とともに指摘した。同時に、「旧漢字圏」という枠組みを理解することで、同形同義の語彙が数多く存在する理由についても提示した。
内容	<p>I. 表記について：いわゆる繁体字、簡体字、常用漢字の字体</p> <p>II. 音韻について：韻尾と特殊モーラ、漢字語彙の促音化</p> <p>III. 共有されない漢字語彙：各言語の固有例、語義が微妙に異なる例</p> <p>IV. 同形同義語について：近代化のため新たに作られた漢字語彙群</p> <p>V. 文法項目：語順、品詞、自動詞と他動詞、格助詞について</p> <p>それぞれに関して、共通点のある語彙のグループを提示し、文法に関しては文中における用いられ方について例示した。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>【受講者の声】</p> <p>●養成講座の時に学習したことを、再確認することができた。言語の構造は、複数の言語を比較してはじめて構造的に見えてくるものであると感じた。</p> <p>●4つの言語（日本語、中国語、韓国語、ベトナム語）を比較対照しながら、検証することは初めての経験だった。新鮮に感じられたとともに、今一步それぞれについて知りたいという気持ちが出てきた。</p> <p>●誤用は、中国語、韓国語、ベトナム語話者に共通して多くみられるが、非漢字圏の学習者にとっても同様な問題が生じ、語彙を導入するには適切な例文を示して文型単位で記憶させるよう指導することが必要だと感じた。</p> <p>●韻尾については知らなかったもので、音節数とモーラ数が違っていたり、長音、促音、撥音に関わってくるという内容はとても興味深かった。今まで音節とモーラについては何となくしかわかっていなかったが、このような法則を知っておもしろいと思った。</p> <p>●漢字圏、旧漢字圏で見られる相違点が多く例、表などで分かり</p>

やすくまとまっていた。学習者の母語の干渉から来るよくある間違い、発音しにくい言葉の原因を知識として持っておき、分かりやすく説明できることが必要だと学んだ。

●言語の特徴を知ること、その地域の学習者の誤用を推測できたり、原因が分かったりする。赴任した際には、地域の言葉を研究してから授業に臨むのが大切だと感じた。

●漢字の学習は学習者の習得度合いも考慮しなければいけないし、学習者のニーズに合わせて、どこまでを進めるかも迷うところだったが、今回の講義で導入する際の注意点など勉強になった。

●漢字圏であるからこそそのメリット・デメリットを学んだ。漢字圏は漢字圏でも例外というものが少なからずはあるため、「漢字圏だから漢字で書けば通用する」という安易な考え方は気を付けようと思った。

●詳細な韻尾とモーラの関係性が学べてよかった。また、同形同意語もそれぞれ国によって共有されていたり、また共有されない漢字語彙があり、広がりと繋がりを感じ漢字の面白さを学べた。

●学習者が間違え易いところについて具体的に例文をあげて示していて、大変勉強になった。

●言語を教える際に、言語の作りを知っておくことが、動機付けにも役立つことを学んだ。

●表記や音韻についてここまでじっくり学んだのが初めてだったので、少し難しいと感じることもあったが、誤用の分析の際に役立つそうだと感じた。今後は生徒の母語によって招きやすい誤用なども事前に気をつけていけたらと思う。

●日本語の語彙量を増やしていくため、中・上級での学習者が漢字語彙を整理する必要性や体系的に覚える重要性を認識した。

●主に中国語圏の学習者を想定とした学習内容で、自分自身も中国語学習経験があるので興味深く学べた。一方で漢字圏外の学習者がどんなことにつまずくのかが分からないので、別の漢字圏でない学習者への指導方法についても知りたい。

#### 【成果と課題】

要点やそれぞれの問題点について提示することはできたが、短い時間であったため、最小限の例を挙げるにとどまった。もっと多くの例を示すことができればより理解が深まったと思われる。ライブ授業では、録画授業に対する質問等に答える形で授業を進めたため、

	<p>受講者にとってより理解を深める時間となった。今回は主に漢字圏の学習者に対する漢字指導を想定したが、非漢字圏の学習者に対する指導法についても触れることができれば受講生の講座に対する充実度が高まったと思われる。</p> <p>短い時間で要点を提示し、それぞれの問題点の「入り口」を提示することはできた。もっと多くの例を示すことができれば理解が深まったかと思われるが、時間的な制約もあり、最小限の例しか挙げられなかった。</p>
参考資料	<p>「漢字圏の学生にとっての漢字語彙習得」『留学生教育 第9号』 石原嘉人（2012）琉球大学留学生センター</p> <p>「漢字圏の学生に対する漢語スル動詞の導入」『留学生教育 第10号』 石原嘉人（2013）琉球大学留学生センター</p> <p>「ベトナム語話者に対する漢字語彙の指導について」 『留学生教育 第11号』石原嘉人（2014）琉球大学留学生センター</p>

科目名	言語習得
担当講師	大関浩美
単位時間数	2 単位時間
目的	第二言語習得過程での習得メカニズムおよび習得に何が必要かについて理解を深め、日本国内と海外での日本語教育における習得環境の違いを考えながら、第二言語習得研究からの知見を現場に応用できる力をつけることを目的とする。
教育概要	第二言語習得過程における中間言語の発達プロセス、習得が起こるために必要なもの、文法学習の役割、訂正フィードバックの必要性等を中心に講義を行い、海外と日本の習得環境の違いについて考える。
内容	1 コマ目では、まず、第二言語の習得プロセス、およびインプット・インターアクション・アウトプットの役割をまとめ、文法学習の役割を考え、さらに、発達段階に応じた訂正フィードバックの必要性に関する講義を行った。 2 コマ目では、外国語学習適性の影響、動機づけの影響についての理解を深め、これらが海外の教室ではどう影響するかを考えた。そして、海外と日本国内の習得環境がどう異なり、どのような工夫が必要かに関して受講者に考えてもらい、意見交換を行なった。
受講者の声／ 成果と課題	「受講者の声」 ●養成講座ですっと前に教わったことの復習ができて、よかった。日本語教師として数年経験を積んだ今、新たな視点でこのテーマを見ることができた。 ●養成講座で学んだ言葉が次々と出てきたが、実際それらの知識があったとしても、普段の授業で、その仮説について、どれだけ意識して授業ができているのか反省する良い機会となった。 ●理論を実践と結びつけるヒントが沢山あったように思う。 ●実際の場面を想起させながらの解説がわかりやすかった。特に訂正フィードバックに関することは、国内でと海外での用い方の違いがあるという気づきを得られたのがよかった。 ●学習者への訂正フィードバックの仕方ひとつをとっても、学習者が自分で修正させるように促すことによって習得が促進されることが、参考になった。

	<p>●指導する際は言語発達の理論を踏まえた上で、練習課題を考えることが大切だということがよくわかった。</p> <p>●学習者のモチベーションを高めるには「第二言語の理想自己」をイメージさせるのが大事、ということは、私自身が外国語を学ぶ中で実感していたことだったが、自分の生徒にそのイメージを持たせるということまでは考えたことがなかった。今後のレッスンで意識してみようと思った。</p> <p>●海外で学ぶ学習者は、インプット、インターアクション、アウトプット共に機会が限定されているため、教室内だけでなく宿題やアクティビティなどの工夫が必須だと思った。それにより、言語習得面のみならず日本の文化理解、モチベーションの維持向上にも繋がるということをも日本語教師は常に念頭に置いての工夫が必要だと感じた。</p> <p>●海外の教室で内発的動機付けをいかに維持させるかがとても重要。海外で日本語を学ぶ外国人の内発的動機付けを維持させるには、目的によるがやはり日本人と関わる大切だと思う。現在はオンライン授業も普及してきたので、日本に来られなくてもオンラインで日本人と関わるなど日本文化を体験できる機会をより多く増やすことが大切だと改めて思った。</p> <p>●初心に戻り、理想に近い授業になるように、もう一度、教案がどうあるべきか、ティーチャートークは、何に気をつけなければいけないか、学習者のモチベーションを維持するための声かけなど、改めて考える良いタイミングになった。</p> <p>「成果と課題」 日本国内と海外での習得環境の違いと必要な工夫について考えてもらえる講義になったのではないかと考える。養成講座での学習内容をどれくらい覚えているかに個人差があるため、どの程度詳しく伝えるかが課題である。</p>
<p>参考資料</p>	<p>特になし。</p>

科目名	日本語教育事情
担当講師	坂本彩（インターカルト日本語学校非常勤講師）
単位時間数	1 単位時間
目的	海外に赴任する前に自身で調べておくべき赴任先の日本語教育事情や必要な項目について考え、調査してみることで、実際の赴任時に役立つ調査能力や視点を身につける。
教育概要	日本語教育事情（自主調査）
内容	<p><u>事前課題</u></p> <p>既に受講済みの講座「国際関係・海外の日本語教育事情」「日本語教育事情（各国の事例）」を参考に、受講生各々が興味を持っている国、赴任したいと考えている国の日本語教育事情等について調査し、A4 - 1枚程度にまとめる。</p> <p>調査項目は指定せず、各自必要だと思う項目を調べた。</p> <p><u>ライブ授業</u></p> <p>ブレイクアウトセッション機能を使い、グループに分かれ、事前課題で調査した内容を共有した。</p> <p>各グループ4～5名で、授業内で2回のグループセッションを行った。</p> <p>受講生が調査してきた項目は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各国の基本情報：人口、教育制度、言語環境、言語の特徴、宗教、国民性、住環境、インフラ、物価</li> <li>・日本語教育の概要：歴史、学習者数、日本語教育機関、教師数、学習動機、日本語教師の需要、雇用状況、使用教材、JLPT 受験者数など</li> <li>・その他：各民間語学学校・大学の給料等の待遇面や応募資格ビザの取得について 日本語学習者への聞き取り調査（学習目的など）</li> </ul> <p><u>授業後</u></p> <p>調査結果のまとめを提出。その後、受講生に全ての調査結果を共有した。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p><b>【受講者の声】</b></p> <p>●自分が海外に赴任する際に知りたいことは、その国の教育事情ではなく、自分が実際に働く学校のお給料や授業時間数、家賃相場、治安、物価など、自分の生活に直接関わることだったが、今回の課題で、自分が今滞在しているメキシコの日本語教育事情について知</p>

	<p>ることができ、新たな発見があったので、取り組んでよかった。</p> <p>●同じ課題でもそれぞれ切り口が違って「多様性」について感じ考えるよい機会になった。また、これまで気になっていたけれど時間がないということを言い訳にしていたことを調べる良い機会となったし、すぐに使うことのできる知識を得ることができた。</p> <p>●今回の課題に対して、「自分の持っている学歴で就職できる機関はどこか」とアジア圏複数の国の機関を調べて比較されている方がいた。一つの課題に対して人によって異なる解釈がされていたこと、実際に働くことを意識して課題に取り組まれた方がいた、ということがとても興味深かった。</p> <p>●インドネシアで生活し、日本語を教えた経験があるが、インドネシア全体の日本語教育事情を調べてみると、自分が知らなかったこと、ぼんやりとしか分かっていなかったこと、またインドネシアを離れてからの日本語教育事情の進展など、様々な発見があった。なんとなく分かった気になっていることも、客観的データに基づき、様々な状況を把握しておくことが大切であると改めて感じた。</p> <p>●自分が行ってみたいと思う学校や教育機関について調べたことはあっても、国全体で考えることはこれまであまりなかった。今はコロナ禍で事情は変わっているかと思うので、引き続き情報収集をしっかり行いたい。今回の調査を通して自身の問題点や課題なども見えてきた。</p> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>●受講生自身が調査した国以外に、さまざまな国の日本語教育事情を知ることができたと同時に、赴任前にあらゆる観点から赴任国の情報を得ることの重要性を認識できたのではないかと。</p> <p>●他の受講生と話す時間を持てたことで、それぞれのバックグラウンドや思いを話し、互いに刺激し合い日本語教育へのモチベーションにもつながる有意義な時間となった。</p> <p>●4, 5人のグループで20分のブレイクアウトでは各自が発表するだけで終わってしまい、その後グループ内で話し合う時間が十分に持てなかったグループもあった。グループの人数、ブレイクアウトの時間が適切だったかは検討の余地がある。</p> <p><b>【成績】</b> A:41名 B:5名 F:8名</p>
参考資料	なし

科目名	外国語コミュニケーション
担当講師	Trinh Thi Phuong Thao
単位時間数	1 単位時間
目的	ベトナム語学習の体験を通じて、受講者（日本語教師）が生徒の立場や気持ちを理解し、より効率の良い教案づくりやクラス管理をできるようにする。
教育概要	オンライン形式の基礎ベトナム語体験授業
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ベトナム語の6つの声調紹介および発音練習</li> <li>- 名前、国籍の言い方の自己紹介</li> <li>- 「私は～～が好きです」の言い方紹介および練習。（食に関連する語彙を例に使用）</li> </ul>
受講者の声／ 成果と課題	<p>「受講者の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●学習者の立場で授業に参加できて新鮮な気持ちだった。</li> <li>●日本語初級の生徒の不安な気持ちを感じることができたので、今後の授業計画などを行う際に参考にしたいと感じた。</li> <li>●初めて耳にし、全く知識のない言語を学ぶ学習者の不安や興味といった心の動きを経験することができた。</li> <li>●発音した後も必ず褒めることはモチベーション維持につながると思った。教える際に必ず学生の気持ちなどを考えなければならないと思った。</li> <li>●今回の授業を踏まえ外国語を学ぶ学習者の立場に立って改めて考えると、日本語の「ひらがな、カタカナ、漢字」の発音を覚えるだけでもストレスがたまるし、延々と続く新しい文字学習に飽きてしまうだろう。途中で挫折しないように興味を引く学習内容を工夫しなければならないことを学んだ。</li> <li>●母語にない発音や発声法は、学習者にとっては何度聴いても難しいため、はっきり繰り返すことが必要だと理解できた。先生が笑顔で明るいと、クラスの雰囲気も和やかになるので、コミュニケーションをとる上で大事なことだと再認識した。</li> <li>●オンラインではとくに音が聞こえづらいなどのトラブルを想定し、スライドのわかりやすさも意識する必要があるな、と感じた。</li> </ul>



	<p>●絵はわかりやすい一方で絵だけではわからなくなり文字情報も大切だと思った。</p> <p>●新しい言語を覚えることの難しさ、またモチベーションを維持させる難しさ、それらは教師によって大きく変わるなど感じる授業だった。</p> <p>●この授業ではベトナム語を学ぶことによって学習者が抱える気持ち、問題点、間違いやすい点等を実感した。この体験を通して自身が日本語教師として教壇に立った時、学習者の立場に立ち、寄り添ってより良い授業ができるように意識したい。</p> <p>「成果」</p> <p>- 受講者が教師の意図（教師が意図的に例を選んだり、スピード調整したりして授業を進め、受講者を落ち着かせないようにしたこと、 敢えてイライラを受講者に感じてもらうなど）を理解していたことから授業の目的は達成されたと思われる。</p> <p>- 担当教師の情熱やオンライン授業運営及び管理の大切さや難しさも実感してもらえたと思う。</p> <p>「課題」</p> <p>オンライン授業のため、技術から人的なことまでの色々なトラブルが発生する可能性があり、よりうまく時間及び生徒管理ができるように努力する必要がある。</p>
参考資料	サイゴンランゲージセンターのベトナム語オリジナル教材

科目名	異文化コミュニケーション1
担当講師	室田真由見
単位時間数	2 単位時間
目的	海外で教えることを意識した上での異文化コミュニケーションのあり方、教室で日本語教師が直面する異文化について考え、理解を深める。
教育概要	海外に赴く日本語教師のための異文化コミュニケーション
内容	<p>&lt;録画授業&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 香港の日本語教育</li> <li>● 「異文化コミュニケーション」と「海外で教えるということ」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「異文化コミュニケーション」が日本語教師にとって大切なのはなぜ？</li> <li>・ 「文化」「異文化」とは？</li> <li>・ 異文化理解・異文化コミュニケーション能力で大切なことは？</li> </ul> </li> <li>● 異文化適応とカルチャーショック、ステレオタイプ <ul style="list-style-type: none"> <li>・ カルチャーショックとは？</li> <li>・ 異文化理解を阻害する要因になるものとは？</li> </ul> </li> <li>● 日本文化を教える <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「日本的なもの」を授業で教えることについて</li> </ul> </li> <li>● 実践紹介 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ステレオタイプに向き合う」実践について</li> </ul> </li> </ul> <p>&lt;ライブ授業&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 異文化との出会い</li> <li>● 異文化適応とカルチャーショック <ul style="list-style-type: none"> <li>・ U字曲線とW字曲線</li> <li>・ カルチャーショックをどう乗り越える？</li> <li>・ 異文化受容とプロセス</li> </ul> </li> <li>● ステレオタイプ <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本語教師として日本のステレオタイプ、イメージをどう扱っていくか？</li> <li>・ 実践例</li> </ul> </li> </ul> <p>教室の中の異文化</p>

<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p><b>【受講者の声】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>●教師がレッテル貼りを避けるだけでなく、学習者に自分で考え判断してもらうことに気づかせることも必要だということがわかった。日本語教師は、ただ日本語を教えるだけでなく、学習者に別の視点や気づきを与える場面も多いのだととても感じている。</li><li>●「ステレオタイプ」はなくすことはできないし、必要なものでもあるが、それが偏っていること、自分が間違えているかもしれないことを常に肝に銘じて人に接することが大切だと思った。</li><li>●香港の日本語学習者の学習動機の話から異文化に対する理解と、常に内省が日本語教師にとって大切だということをあらためて認識させられた。</li><li>●誰しもが無意識のうちに、ステレオタイプになってしまう可能性があることが理解できた。固定観念には、少なからず自分の文化が影響するので、柔軟な思考力で向き合っていきたい。</li><li>●「日本的なコミュニケーション方法」の特性として、学習者にこれまで話していたことが、逆に「日本」についてのステレオタイプなイメージを固定化してしまう結果になっているのでは、という指摘にハッとさせられた。時代とともに、また世代によってコミュニケーションのスタイルは変わっていくので、それを一般化・固定化して述べることは危険であるとも感じた。</li><li>●この講座を通して、自文化の特性や相手の異文化の特性、そしてコミュニケーションに及ぼす文化の影響を理解することの重要性を強く感じた。日本語教師は、学習者の異文化理解や異文化適応を助け、学習を支援する際に学習者の心理的側面も理解しなければならないと改めて感じ、理解が深まった</li><li>●先生の具体的な経験をシェアしていただいたことで、自分の経験もそのままにせずに次へ進むきっかけやチャンスにしていこうと思った。特に教室の中の異文化については、多様性を認めることの大切さを学んだ。</li><li>●日本人のクラスの中でも衝突は起きるのに、多国籍のクラスだとなおさら色々な衝突があるんだと改めて感じた。クラスでそのような衝突が起きたら、自分はどのような態度を取ればよいのか、考えさせられた。</li><li>●あらためて異文化ということ国籍という点だけではない個の面から考えた講義だった。</li><li>●これまでの日本国外での経験や、また日本を訪れた時に感じる感</li></ul>
-------------------------	---

	<p>覚を再度、自分の中で客観的に考え直すとても良い経験ができた。</p> <p>●さまざまなアイデンティティを持つ学生がいるなかでの「個性」と「集団（クラス）」のバランス調整は非常に難しいだろうし、それをうまくコントロールしていくことが教師には求められると思った。</p> <p>●受講者や先生からいろいろな事例を聞いて、心の準備ができたと思う。インタラクティブでとても楽しく、納得できる授業だった。</p> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>&lt;成果&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 海外で日本語教師として直面する可能性のある文化摩擦やそれにより起こるカルチャーショックについて、受講生同士の経験も交えて考えてもらうことができた。</li> <li>・ 人が避けることのできない「ステレオタイプ」について考えるきっかけを提供できた。</li> <li>・ 学習者一人一人の視点で異文化・日本文化を捉え、考えるきっかけを与えられるような実践を紹介した。</li> </ul> <p>&lt;課題&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 動画45分、講義90分という形式は初めてだったため、バランスを取るのが難しかった。効果的な時間配分を考えたい。</li> <li>・ 時間が足りなかったため、講師と受講生のインターアクションを行うことができなかった。質疑の時間をしっかり設けたい。</li> </ul>
<p>参考資料</p>	<p>岡部朗一(1996)「文化の定義、機能、特性」古田暁(監修) 『異文化コミュニケーション』(pp. 41-43)有斐閣</p> <p>川上郁雄(2007)『「ことばと文化」という課題—日本語教育学的語りと文化人類学的語りの節合—』『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』20, 1-17.</p> <p>久保田竜子(2012)「日本語教育における文化」, 『アメリカにおける日本語教育の過去・現在・未来』全米日本語教育学会・国際交流基金</p> <p>久米照元、長谷川典子(2007)『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣</p> <p>ゴージュ編(2015)『ニッポンのトリセツ』立東舎</p> <p>牲川波都季(2000)「剥ぎ取りから始まる「日本事情」」『21世紀の「日本事情」』第2号, pp. 28-39. くろしお出版</p> <p>竹内愛(2021)『やさしい異文化理解 理論から異文化トレーニング』</p>

<p>方法まで』上毛新聞社 中根千枝 (1972) 『適応の条件』 講談社 長島信弘 (1973) 「カルチャ・ショック」『教育と医学』21 巻4号, 慶応通信 原沢伊都夫 (2017) 『異文化理解入門』 G・ホフステード G・J・ホフステード、M・ミンコフ (2013) 『多文化世界 違いを学び未来への道を探る』有斐閣 OHRI Richa (2016) 「『〇〇国』を紹介するという表象行為」 『言語文化教育研究』14, pp. 55-67. 香港日本語教育研究会 HP <a href="https://www.japanese-edu.org.hk/jp/jlpt/statisticsg.html">https://www.japanese-edu.org.hk/jp/jlpt/statisticsg.html</a> 国際交流基金 HP <a href="https://www.jpj.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/hongkong.html">https://www.jpj.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/hongkong.html</a></p>
---

科目名	異文化コミュニケーション2
担当講師	渡辺彰吾
単位時間数	2 単位時間
目的	日本と異なる文化圏の一例としてインドネシアの概要、日本との関係、文化、習慣、国民性などを学び、その比較から日本の特徴やインドネシア人の視点から日本がどのように見えるかを考える。
教育概要	<p><b>【録画】</b>  異文化コミュニケーションとは  インドネシア概要・日本との関係・日本語教育・インドネシア語  インドネシアと比較してわかる日本の特徴  インドネシア人から見て日本はどのように映っているか</p> <p><b>【講義】</b>  インドネシア人の性質  日本人から見たインドネシア人  インドネシア人から見た日本人  外国生活で気をつけたいこと、はじめにしておきたいこと  日本語教師として赴任国の言語・習慣を理解しておくことの利点</p>
内容	<p><b>【録画】</b>  異文化コミュニケーションとは</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 相手の文化を知る</li> <li>② 相手の文化を知ることを通して自分の文化を知る</li> <li>③ 自分の文化が相手の目にどのように映るかを知る</li> </ol> <p>インドネシアについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基本情報（国是、独立、人口、気候、季節など）</li> <li>・インドネシアの多様性、宗教、マルチリンガル</li> </ul> <p>インドネシアと日本との関係</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日伊国交略歴</li> <li>・日伊の経済的関係</li> <li>・人の往来（訪日インドネシア人、訪インドネシア日本人数）</li> <li>・2 国間の文化交流</li> </ul> <p>インドネシアにおける日本語教育</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者数・教師数</li> <li>・学習者の日本語学習動機</li> </ul> <p>インドネシア語と日本語の比較</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インドネシア語の特徴（文字・音声・文法）</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インドネシア語との比較からわかる日本語の特徴</li> <li>・インドネシア人学習者から見た日本語の印象</li> </ul> <p><b>【講義】</b></p> <p>インドネシア人の性質</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゆっくりのんびり生きていく</li> <li>・見栄っ張り（自分の非を認めない、弱みを見せない）</li> <li>・相互扶助（助け合いの精神）</li> <li>・長期的な計画を立てるのが苦手</li> </ul> <p>日本人がインドネシア人に抵抗を感じる部分</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「すみません」が少ない</li> <li>・時間にルーズ</li> <li>・効率を考えない</li> <li>・返事が少ない など</li> </ul> <p>日本人がインドネシア人に疎まれる部分</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・けち</li> <li>・日本の尺度で考えてそれを共用する</li> <li>・人前で怒る</li> <li>・宗教に対して理解が少ない など</li> </ul> <p>インドネシア人（外国人）とうまく付き合っていく方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・柔軟性を持つ</li> <li>・何でも試してみる</li> <li>・婉曲表現を避け、はっきりと返事をする</li> </ul> <p>インドネシア（外国）生活ではじめにしておきたいこと</p> <p>日常生活で心がけておくべきこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手と自分に上下の関係があるという気持ちを持たない</li> <li>・近所付き合い、助け合いを心がける</li> <li>・宗教について理解することを心がける など</li> </ul> <p>日本語教師として理解しておくことと良いこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・赴任国の言語</li> <li>・赴任国の人々の生活習慣や価値観</li> <li>・赴任国と日本との関</li> </ul>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>「受講者の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●インドネシアでの教師経験、生活経験が豊富な講師の方の授業ということで、インドネシアのことをよく知る良い機会になった</li> <li>●相手の文化を知ること、そして相手を知ることを通して自分の文化を知ること、自分の文化が相手にとって好意的であるかそうでないかを認識する事が大事だと学んだ。</li> <li>●日本語との比較の大切さもそうだが、現地の理解を深めるために</li> </ul>

	<p>現地語を使えることはやはり重要だと認識した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●異文化コミュニケーションとは、相手を知り、相手との比較から自身の特徴を知ることであり、それを通して、相手から自分がどのように見えるかを考えるという、3ステップであるという説明が印象に残った。</li> <li>●異文化のとの比較の中で、自分かがどのような特徴があるのかを考えることは、とても大切な視点だと思った。</li> <li>●他の国の文化や言語を知ること、自分では当たり前と思っていた、日本のことや習慣を考えるきっかけになった。</li> <li>●海外で働く場合は特に風土や習慣、民族性を知っておくことはコミュニケーションを円滑にするためにも大切だけれど、自身の身を守るためにも大切だと思った。</li> <li>●文化の違いが誤解につながるので、事前に文化理解しておくことや、文化を理解しようとする姿勢、日本語学習者にもそのことを伝えていくことは日本人とのコミュニケーション、相互理解に役立つと思った。</li> <li>●異文化を理解することの利点として、日本語との相違点だけにとどまらず、日本人教師が自国の文化を積極的に理解しようとしている姿が相手に与える好印象は計り知れないのではないかと感じた。</li> <li>●赴任する国の人々と宗教との関わり方を知り理解することも重要だし、自分が日本語教師という立場から、その国から日本へ留学する学習者に対しても「日本人と宗教」ということは伝える必要があるかと思った。</li> </ul> <p>「成果と課題」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで、実際に外国滞在経験がおありの方から、海外渡航経験のない方まで、異文化コミュニケーションのあり方について改めて考え、一歩理解を深める機会としてもらえたように感じる。</li> <li>・異文化コミュニケーション理解を促すための手段としてではあるが、インドネシアについての情報を紹介し、受講生にインドネシアについての理解を深めてもらうことができた。</li> <li>・講義の回の内容について、インドネシア駐在日本人の意見をまとめたものを参照し、お話をさせていただいた。しかし、今後機会があれば、私個人の経験を具体例として、より興味を持ってもらえるようなお話ができればと思う。</li> </ul>
参考資料	特になし



科目名	評価法
担当講師	伊東祐郎
単位時間数	2 単位時間
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外に赴く日本語教師に必要な、言語テストの基本的な機能と役割、特徴を考える</li> <li>・言語テストが測定可能な日本語能力について確認する</li> <li>・妥当性と信頼性の高いテスト作成に必要なヒントを共有する</li> <li>・海外の教育機関で評価を行う際の留意点について理解する</li> </ul>
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テストと評価</li> <li>・評価法の実際</li> <li>・課題</li> <li>・評価の多様性</li> <li>・海外での評価とその方法</li> </ul>
内容	<p><b>【言語テストの種類】</b></p> <p>(1) 大規模テスト＝<u>集団規準準拠テスト</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・統合的言語能力の測定→<u>熟達度テスト</u></li> <li>・<u>相対評価</u></li> <li>・利害関係の大きいテスト (high stakes tests)</li> </ul> <p>(2) 小規模テスト＝<u>目標基準準拠テスト</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・目標基準に対する達成度・到達度の測定及び判定→<u>到達度テスト</u></li> <li>・<u>絶対評価</u></li> <li>・利害関係の小さいテスト (low stakes tests)</li> </ul> <p><b>【よいテストの基本要件（言語テストの条件）】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・信頼性 (reliability)</li> <li>・妥当性 (validity)</li> <li>・実用性 (practicality)</li> </ul> <p><b>【教師作成テストの実際】</b></p>

	<p><b>【テスト開発における留意点】</b></p> <p><b>【評価方法はどうしたらよいのか？】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日本語の授業で教授されている内容（言語的知識や文化など）や運用力（聴解力・口頭表現力・読解力・文章表現力など）によって決まる。</li><li>・日本語教育プログラムの目的や目標によって決まる。</li><li>・教師がテストから何を知りたいのか、どんな情報を入手したいのかによって決まる。</li></ul> <ul style="list-style-type: none"><li>・テストの可能性と限界</li><li>・テストで測定したいものは何なのか？</li><li>・テストで測定できるものは何なのか？</li></ul> <p><b>【日本語力レベル（＝基準）】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・通称（業界？）基準・クラス基準：初級・中級・上級・超級</li><li>・外在基準</li></ul> <ul style="list-style-type: none"><li>①日本語能力試験（N1・N2・N3・N4・N5）</li><li>②CEFR（A1・A2・B1・B2・C1・C2）</li><li>③ACTFL（Novice・Intermediate・Advanced・Superior）</li></ul> <p><b>【言語テストの形式と採点方法】</b></p> <p><b>【言語テストの対象領域】</b></p> <p><b>【テスト作成の実際＝何を出題しているか】</b></p> <p><b>【教授項目中心テストの問題点】</b></p> <p><b>【テスト以外の評価法】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・観察（observation） ・授業中の質疑応答（questioning strategies）</li><li>・紙筆（選択式／短文）テスト（traditional paper-and-pencil tests）</li><li>・エッセイ／作文（essays）・スピーチ／会話（speeches）</li><li>・ロールプレイ（problem-solving activities）</li></ul>
--	--

	<p><b>【評価における最近の動向】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・行動主義／心理測定アプローチ<ul style="list-style-type: none"><li>→信頼性を優先するために、妥当性を犠牲？</li><li>→知識面の測定に偏りがち？</li></ul></li><li>・社会／文化アプローチ<ul style="list-style-type: none"><li>→学習を個人的なものとして捉える</li><li>→学習を他者との相互関係として捉える</li><li>→学習を社会的なものとして捉える</li></ul></li></ul> <p><b>【代替アセスメント (alternative assessment)】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ジャーナル：学習者の思考過程や行動に注目するために、内省を中心としている。</li><li>・ポートフォリオ：言語活動を成果物化し、学習の発達段階や達成度を実感させている。</li><li>・ピアアセスメント：評価は教師だけという考えから離れ、学習者視点からの学習奨励や学習促進をねらいとしている。対話、協働活動。</li><li>・自己評価：自己内省と自己評価を中心。</li><li>・評価方法の多様化</li><li>・代替評価＝教育的評価 (instructional assessment)<ul style="list-style-type: none"><li>→学習者に長所、短所を自覚させる</li><li>→自律 (autonomy) の必要性を認識させる</li><li>→学習者自身の変化・変容・成長をねらう</li><li>→評価が教育を一体化する</li></ul></li><li>・評価結果の出し方：“Pass” or “Fail”</li></ul> <p><b>【よりよい教育実践のために】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・海外の教育機関に赴いて日本語教育における評価を行う際の留意点</li></ul>
--	--

	<p>(1) 現地教育機関の日本語プログラムの位置づけや全体像を把握する</p> <p>(2) 現地教育機関における日本語テストの種類や実施方法について確認する</p> <p>(3) 現地教育機関の成績のつけ方、修了認定や進級許可に関する方針の有無や実情を把握する</p> <p>(4) 現地教育機関の経験ある教師から、成績をつける際に留意すべき事項について事前に確認しておく</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>「受講者の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●テスト作成について、知識がなかったのでこの講義でテストを作成する際の留意点や、教室内テストでどのように信頼性、妥当性を高められるかを学べた。</li> <li>●一言に「試験」と言っても、どんな能力を測るのか・どのような形式で行うのか等、様々な方法があり内容についてもいろいろな角度からしっかり考えた上で試験作成を行わなければいけないことを改めて感じた。</li> <li>●なぜ評価をするのか、その目的を明確にする必要性を感じた。</li> <li>●客観的テストのような測定しやすいテストも目安としては必要だが、一方で主観的テストで発揮される言語運用能力が実生活では求められる。教育機関の方針や、学習者の目標によってバランスを変えながら授業することが大切だと思った。</li> <li>●今回、評価法を学び直し、教師作成テストの実際を学び、評価における最近の動向も知ることができた。言語テストの条件も詳細にわかり、現地教育機関においての種々の事項において確認、把握することなどのアドバイスもあり、現地仕様の合わせていく大切さを学んだ。</li> <li>●改めて「評価法」を復習したことにより、学習者にとってなるべく公平で、透明性のある試験を実施する重要性に気がついた。</li> <li>●評価というのは、現状レベル把握や目的達成度を測るために大切であり、正確に測れるテストを作成するためには多側面での配慮が必要だということがわかった。日本語教師としては、それを使って学習者がいかに日本語を現実場面で運用できるかも同時に考えていきたい。</li> <li>●良い評価をすることは、学習者に長所・短所を自覚させ、学習者自身の変化や成長につながる。日本語教育では「教授法」に目を向</li> </ul>

	<p>きがちだが、正しい「評価法」を身に着けることが大切だ。</p> <p>●クラスで小テストを作る時の妥当性を考え、その採点方法、結果をいかに次に繋げていけるかが大切だと思い、もう一度主旨を明確にして、テスト作りから考えていこうと思った。</p> <p>●常に学生の様子や成長を見守ることで評価することができるのだと感じた。現地の評価の仕方や進級するためのルールなども知ることが大事だと思った。</p> <p>●学習者への評価方法も学校によって異なる中で、その学校それぞれにあった試験を作り、成績をつけるためには教師一人でやるのではなく、学校全体での取り組みも必要だと思った。</p> <p>●ピアアセスメントの説明もあったように、教師だけが評価するのではなく、学習者同士で評価し合うということも大事だと感じた。</p> <p>●あとで自分はこういうことで評価を測りたいといった齟齬を防ぐため、海外勤務する場合その対象場所での評価法を詳しく聞いておくことは大切だと感じた。</p> <p>「成果と課題」</p> <p>・アンケート結果から当初の目標をほぼ達成したと判断できる。一部の教育未経験者にとってはやや難解な部分もあったかと推察できるが、海外赴任前の心構えとしては認識していただけののではないかと考える。今後の課題としては、概論・理論と実践の割合を検討する必要がある。</p>
<p>参考資料</p>	<p>①『日本語教師のためのテスト作成マニュアル』伊東祐郎(2008)アルク</p> <p>②『日本語教師のための評価入門』近藤ブラウン妃実(2012)くろしお出版</p> <p>③『日本語教師のためのExcelでできるテスト分析入門』小野塚若菜他(2008)スリーエーネットワーク</p> <p>④『外国語教育リサーチとテストの基礎概念』静哲人他(2002)関西大学出版部</p> <p>⑤『言語テスト概論』マクナマラ, T.、伊東祐郎他監訳(2004)スリーエーネットワーク</p> <p>⑥『言語テストの基礎知識』ブラウン, J. B.、和田稔訳(1999)大修館書店</p> <p>⑦『&lt;実践&gt;言語テスト作成法』バックマン, L. F. 他、大友賢二他</p>

	<p>監訳(2000)大修館書店 ⑥ Council of Europe (2001) ⑧Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment. Cambridge University Press. (吉島茂、大橋理枝訳編 (2004)『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)</p>
--	--

科目名	シラバスカリキュラム作成
担当講師	久保田美子
単位時間数	3 単位時間
目的	シラバス・カリキュラム作成について基本的な知識を整理し、新しい考え方について理解すること。さらに、実践するうえで直面する課題について自律的に考えることができるようになること。
教育概要	<p>1. シラバス・カリキュラムを作成するうえで必要な知識の確認 ①日本語教師としての仕事 ②コースデザインの流れ ③ニーズ・レディネス調査 ④目標言語調査・目標言語使用調査 ⑤コース目標と評価基準⑥シラバス・カリキュラムとは ⑦各国のガイドライン ⑧教える内容 ⑨教え方・教材 ⑩評価</p> <p>2. シラバス・カリキュラムの作成について具体的な例をもとに検討する ①教師のレディネスを知る ②目標言語を内省する ③到達目標とシラバス・カリキュラムの関係 ④シラバス・カリキュラムと教え方の関係 ⑤シラバス・カリキュラムと教科書の関係 ⑥シラバス・カリキュラムの変更がもたらすもの ⑦課題をシラバス・カリキュラムの観点から見直す ⑧まとめ</p>
内容	<p>最初にシラバス・カリキュラム作成に関して、知識に関する簡単なチェックリストに回答することを求めた。</p> <p>1 回目（オンデマンドによる授業）シラバス・カリキュラムを作成するために必要な知識について解説。</p> <p>2 回目・3 回目（リアルタイム配信による授業） シラバス・カリキュラムの作成にあたって重要なポイントを確認しつつ、具体的な例を出し、各課題について検討。いくつかの課題については、グループでディスカッションして、話し合った結果を全体で共有。最後に最初に行ったチェックリストを見直す。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>「受講者の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●コースデザインは実際に自分で体験してみなければわからないことが多くあると感じた。</li> <li>●実際に教える場面を考えながらどのように対応したらよいかというシュミレーション的なことができたのがためになった。</li> <li>●シラバスデザイン・カリキュラムデザインの前提として 学習者の実態・学習者の目的・学校の実態・学校の目標等を把握しておくことがとても大切であると強く感じた。</li> <li>●日本語教師は教える内容の知識も膨大だが、学習者に合わせた適</li> </ul>

切な授業の組み立てるスキルも重要で、とても大変だがやり甲斐のある職業だと思った。

●常に自分の授業を客観的に観察するために第三者のコメントを真摯に受け止めて、実施後に十分な時間をかけ改善に努める姿勢が大切だと再度認識した。

●学生の向き不向きによってシラバスを選ぶことが語学習得において大切だと感じた。国や個人によってシラバスデザインを考慮すると、即効性高く習得できたりする為、上手く組み合わせて学習内容を選ぶとよいと思う。

●シラバスを考える上で生徒の年齢や母語、学習経験を踏まえて考えるだけでなく、生徒の心理面まで考慮して考える必要があると学んだ。

●教科書自体の面白さが学習者の動機につながることを学び、改めて教科書選びの大切さに気づいた。

●現実の教育現場ではなかなかニーズやレディネスが分析されないままコースがデザインされ授業が実施されていると感じた。

●グループディスカッションをしてみて、提示の条件から単純に導き出されるシラバスはどの先生もだいたい共通しているが、学習者のニーズや興味によっては選ぶべきシラバスやカリキュラムが変わってきたり、また先生によっても様々な角度からの考え方があり興味深かった。

●学習者の情報が不足していると、適切なコースを提供できないことや学習が継続しないことの要因になるので、教育を提供する側は慎重に事前調査を行う必要があると思った。また、定期的にヒヤリングをすることで、修正をして学習者が学習しやすい・学習したいと思ってくれる環境づくりも大切だと思った。

●420 時間講座や検定試験で何度も学んだが、どうしても理解が難しく苦戦していたポイントだった。今回の授業内容はとてもわかりやすく、敬遠していたシラバス作成をやってみようかなという気持ちになった。

●コース内容の変更には、背後に隠れたカリキュラムがあるかもしれないことを知り、単に学習項目だけではないものがあることを認識することも必要であることを学んだ。

#### 「成果と課題」

基本的な知識や予想される問題に対する解決策を考える力は身に



	ついたものとする。海外で様々な問題に直面したときに自律的に考えられるようになるまでには、さらに多くの時間と経験が必要になるものとする。
参考資料	国際交流基金／久保田美子(2006)『日本語教師の役割／コースデザイン』ひつじ書房

科目名	ICT 教材の活用例
担当講師	長谷川卓生
単位時間数	1 単位時間
目的	ロイロノートの使い方、活用方法
教育概要	オンライン・対面問わず、学生のモチベーションの維持向上を目的とした ICT の活用について
内容	当校で使用している「ロイロノート」という、小中学校など一般教育の現場で使用されている教育支援アプリについて、当校でどのように日本語教育に活用しているのかを解説しました。
受講者の声／ 成果と課題	<p><b>【受講者の声】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ロイロノートは4技能のバランスがうまく調整されていると感じた。コロナ禍でオンラインが主流になってきているなか、対面授業とさほど大差がなく授業が受けられ、ネット環境さえあればどこでも受講することが可能なので、学生の負担は軽減されると思った。しかし、機能が多く便利すぎる分、扱う者としては使いこなせるまで時間がかかりそうだと懸念する。どんなに良いアプリでも、使う人次第で、使えるアプリ・使えないアプリになるため、扱う際は慎重にならなければならない。</li> <li>●対面授業よりもオンラインで ICT 教材を活用した授業のほうが良いと感じる学習者も多いように思う。 教師側の授業の準備や授業時間以外の作業量は非常に多くなるが、時代の流れなのかもしれない。</li> <li>●音声を録音して提出する宿題を出し、そこに間違ったところを書き込んで返却出来るというのとても良いと思った。この音声録音の宿題は初級から上級まで使えるのではないか。自分の発音を聞き直すことでネイティブの発音との違いも認識しやすいかもしれない。色々な活用例が見られてとても参考になった。</li> <li>●実践活用例では、ロイロノートを使用した「スピーチ、ロールプレイ」の指導が、大変参考になった。</li> <li>●ICT 教材を使ってどんなことができるのかを学んだ。使いこなせれば、これまで難しかった「話す、聞く」の練習が充実すると思う。どうせ学ぶならネイティブ教師から、と考える学習者は多いと思われるので、我々ネイティブ教師は働く場を広げる大きなチャンスになるかもしれないことを学んだ。</li> </ul>

	<p>●学校にどのような ICT 教材を導入するかは、学校の方針や予算、その他の要因があるため一教師では決められないが、常に他校で活用されている事例についてはアンテナを張っておき、もし学内で意見を求められた場合はすぐに意見を述べられるようにしたいと感じた。</p> <p>●ロイロノートは学校単位での導入には向いているが、個人での使用は難しいように感じた。また、勤務先の学校がロイロノートを使用していない場合には、学校の運営側にロイロノートの導入を検討してもらわないといけないので、海外の学校（特に運営・経営が日本人でない場合）はいろいろと乗り越えないといけないハードルが高いように感じた。</p> <p>●私自身は様々な IT ツールをそれぞれの機能の特徴ごとに組み合わせて授業で使っているため、一つのツールの詳しい説明もありがたいが、加えて様々なツールを機能別に紹介してもらえそうなものがあればうれしいと感じた。</p> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>今後日本語教師には様々な ICT ツールを使う機会があり、求められると思うが、今回 ICT 教材を活用している実際の授業を見てもらうことで、実践のためのヒントを与えることができたのではないかと。しかし、今回紹介したロイロノートは学校単位での導入が必要なため、個人使用には向かないという声もあった。様々な機能を実践例とともに紹介することで、ロイロノートに限らず、様々な ICT ツールを組み合わせさせて使っていくことが必要だということを伝えきれなかった。この点を次回への課題としたい。</p>
参考資料	ロイロノート公式サイト <a href="https://n.loilo.tv/ja/">https://n.loilo.tv/ja/</a>

科目名	対象別指導法 1
担当講師	笈川幸司
単位時間数	2 単位時間
目的	カリキュラム通り、あるいは教案通り授業をするのではなく、学生に興味を抱かせ、学生が自分から授業に参加しようという気持ちにさせて、最終的に発音、アクセントが改善され、自分の頭で発表内容を考え、堂々と発表し、授業が終わったときに以前の自分よりも上達したと実感ができ、自信をつけること。
教育概要	発音・アクセント練習。②発話練習。③例文を思考時間 0 で回答する練習。 練習を通して、発音・アクセントの練習が大事だと本人に自覚してもらうことで、放課後自主練を促せる。②できないと決め込まないで、良い方法を知った後は、話すことができるということを体験を通してわかってもらう。③単語や文法を暗記するなど、勉強の嫌いな学生に勉強の面白さをわかってもらう。
内容	1 発言する学生のプレッシャーを軽減させるための工夫を毎回行い、できることから発言してもらう。そのために一番易しいのが単語の朗読。反面教師の発音と良い発音のギャップを示すことで、良いものが何かを知ってもらい、良いものを真似したいという気持ちにさせる。よくできたところを指摘し、よくなかったところをもう一度繰り返してもらう。 2 いきなり自分の意見を言うのは難しいので、流暢に朗読できるよう教師がサポートし、流暢にできるようになった段階で、学生一人一人に自分の回答を出してもらう。よくできた部分を指摘することで、学生には自分の良かったところがどこだったのかを理解してもらえらる。 3 単語や文法の暗記に役立つ学習方法、そのためのテキストを使って、勉強の面白さを知ってもらう。そのために大事なのはテンポの良さなので、教師がテンポを崩さないように、気をつける必要がある。
受講者の声／ 成果と課題	【受講生の声】 ●学習者の日本語の発音の間違いの原因を分析をすること、実態を把握することがまずは大切であると感じた。 ●発音指導をする機会がこれまでなかったが、初級時にしっかりきれいな発音ができるようになれば日本語のレベルに関係なく、話した印象もよくなると思った。

- 発音の練習では、口を開けないとか語頭を発音せずに聞かせるなど、具体的なポイントで教えていて、学生にすごくわかりやすいし、応用しやすいと思った。
- 中国人特有の日本語の発音の癖を、どのようなアドバイスを与えることで修正することができるのか、実際の学習者の声も聞きながら具体的に学ぶことができた。
- 教師の話し方が生徒の発音に大きな影響を与えるということをもう一度きちんと考えるべきだと感じた。授業内で何人かの生徒の発音を聞いたが、同じ学習速度であるとする教師の教え方の違いでこんなに発音の差が出るというのは生徒にとって教師がどれだけ大きい存在か改めて感じた。
- 海外で指導をする際には、その国の生徒はどんな誤用をしやすいのか、どんな発音の癖があるのかを調べ、授業で活かしていきたい。
- 大量のインプットと、無理のないアウトプットのやり方を学んだ。
- 躊躇する学生に対して、「学生が話したいと思ったこと、自分は独自にこう考えたということ」を引き出し、話させる手法に学ぶべきところがあると思った。
- 学習者の反応を見て改善が必要ということを感じた。常に学習者のことを考え、水先案内人として、できる限り効率的にかつ飽き無い授業運営が大切だと感じた。
- 初級の学習者にはゆっくり話すほうがいい、と思い込んでいたが、先生の教材とスピーディーなやり方について知っている中国の学習者の声を聞いて、ゆっくり話すよりも自然な流れ、スピードで話すことが大事だということに気付いた。

#### 【成果と課題】

今回の授業では、模擬授業の様子を見てもらうことで受講生には発音・発話指導のヒントを得ることができたのではないかと考える。模擬授業後には指導法に関する質疑応答の時間を設け、受講生個人の疑問を全体で共有することができ、授業の内容がより深いものとなった。実際に発音・発話指導を実践するには各自のスタイルを確立していくことが望ましいが、そのためには数多くの実践と時間が必要となる。

参考資料	『日語演講と辯論』 笈川幸司著（華東理工大学出版社）
------	----------------------------

科目名	教材の探し方
担当講師	株式会社凡人社 渡辺唯広・大橋由希
単位時間数	1 単位時間
目的	海外に赴く日本語教師の教材準備に関する心構えや活用できる情報を紹介する。赴任前の準備の支援だけではなく、赴任後に各自で教材・リソースを活用・アップデートしていくための情報も提供する。
教育概要	教材の準備・手配の際に考慮するとよいことや活用できる情報を、渡航前・渡航後の両観点から検討し、4つのステップで紹介した。準備項目をフローチャートで示したり、ウェブサイトや教材、リソースを具体的に提示したりすることで、受講者が講座後に各自の状況に合わせて活用できるようになることを目指す。
内容	<p>教材にまつわる準備を4つのステップで考え、それぞれのステップで行うとよいこと、活用できるリソースの情報などを紹介した。</p> <p>STEP1 準備の準備（情報収集） 赴任する国・地域の日本語教育事情について情報収集をする／赴任する教育機関・コース・授業について情報収集をする／授業準備・授業実施の環境について情報収集をする</p> <p>STEP2 教科書・教材の準備 紙媒体のもの（現地のもの）／紙媒体のもの（日本のもの）／電子媒体のもの</p> <p>STEP3 リソース／アイディアの準備 教材作成のリソース／学習のリソース／教具やネタのもの</p> <p>STEP4 渡航後のネットワークの準備 教師会・学会／SNS</p>
受講者の声／成果と課題	<p>【受講者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●現地で教材を準備する際のフローチャートがとてもわかりやすかった。現地に行けば何かしらの不備や予想外のトラブルがあると思うので、赴任前にしっかり現地とやりとりをして確認しておくことが重要だと感じた。</li> <li>●さまざまなリソースについての情報は、知らないサイトも多くとてもありがたかった。</li> </ul>

- 日本語教師に限らず、海外で仕事をする際は何事も事前準備や情報収集が大切だと改めて実感した。ここを怠らずに学習者のため、そして自分のためにもしっかり取り組むことで、何か問題が起きたときや新しいことをするとき柔軟に対応できる教師像を目指したい。
- 現地で必要とされているニーズをできる限りの確に把握したうえで、渡航前の国内での事前の準備が大切だと思った。
- 教材を準備するヒントや情報が詳細に知ることができた。まずは、赴任する国・地域の日本語教育事情や情勢について調べたり、社会的背景などを知る ことが重要だと分かった。ニーズやレディネスの理解につながり、コースデザイン、教材選びにつながると思う。
- 教科書以外のリソース、アイデアなどいろいろなものを取り入れる柔軟性、それから海外ではとくに新しいことを始めるにはキュレーション力の高い教師であることが必要ということに共感した。
- 海外で教えるにあたり、これほどまでの準備が必要だとは思わずにいた自分自身にまず反省させられた。使いたい教材一つとっても紙媒体、電子媒体を利用し、さらに著作権をも意識しながら選定しなくてはならない。アンテナをあちこちはりめぐらせて、現地でのセミナーに参加したり、どん欲に吸収し更に幅広く意識的に違う意見に耳を傾けられる柔軟な日本語教師を目指していきたい。
- リソースやアイデアはとても豊富にあることが分かった。それらを如何に効果的に活用して学習者にプラスとなるように届けるか、今後の個人の意識次第だと感じた。
- 順を追って、何をしなければならないかがよく理解できた。海外に赴任した時のためではなく、日本で教えている今も使える大切な情報や考え方を学ぶことができた。
- 著作権が重要であることを再認識した。そのこともふまえ、自分自身で教材を作成していくスキルを養う必要性を感じた。
- 教材探しというのは、自分がこれで教えたい、この教材が好きだといった独善的なものではなく、まずは働く国や地域の状況、さらに勤務先の方針等の情報収集が必要であり、そこから選択したり決定したりするものだとすることを再確認した。
- 「教材の探し方」というのは、単なる「教材」を探すだけではなく、最後に渡辺先生もおっしゃっていたように情報収集に役に立つネットワーク作り、ネットワークへの参加なのではないかと感じて

	<p>います。</p> <p><b>【成果と課題】</b> 海外へ渡航する前には事前準備がいかに重要であることを伝えることができた。フローチャートを使い解説したことで、何をすべきなのかが明確になったのではないかと。実際に適切な教材選びや教材作成をするためには、十分な調査と実践が必要となり、時間がかかるものと思われる。</p>
参考資料	なし

科目名	ICT 教材作成
担当講師	都築鉄平
単位時間数	2 単位時間
目的	近年のスマートフォン等のモバイル端末の普及やネット環境の整備状況を踏まえ、タッチ操作やオンライン授業や教材の配布が可能になったことを活かした教材の活用方法を知る。また、教材制作アプリを使用してカスタム教材を制作する際のポイントについて知る。
教育概要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教育と ICT の現状 <ol style="list-style-type: none"> <li>1.1. 技術の進歩と ICT について</li> <li>1.2. 教育における ICT 技術の活用例</li> </ol> </li> <li>2. 電子教材について <ol style="list-style-type: none"> <li>2.1. 電子（デジタル）教材とは何か？</li> <li>2.2. インタラクションとユーザーインターフェイス（UI）</li> <li>2.3. 電子教材のもつその他のメリット</li> </ol> </li> <li>3. 電子教材の設計 <ol style="list-style-type: none"> <li>3.1. 電子教材の制作に向けて</li> <li>3.2. ケーススタディ</li> </ol> </li> </ol>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育の分野における ICT の歩みについて概観し、教育に ICT を取り入れる上で DX（デジタル化の結果に焦点を当てる）という観点が重要であることを確認。</li> <li>● タッチ端末のメリットとして「インタラクティブ（相互作用的）」な教材・学習が可能になることを提示。</li> <li>● 紙の教材や黒板上の板書とインタラクティブなタッチ端末上の教材との違いを対照的に確認し、メリットを考察。</li> </ul>



	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 電子教材のもつ特徴（即時フィードバック、スコア記録、etc）と、そこから生じるメリットを確認</li> <li>● カスタム電子教材の制作におけるポイントの確認。</li> <li>● ケーススタディによるカスタム電子教材の制作の考察</li> </ul>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>【受講者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ICT 教材が日本語教育でどのように使われているのか、具体的なドリルの例を実際に見て学ぶことができた。ただ単に教室でアナログでやっていたものを作り替えるのではなく、ICT ならではの良さはどんなドリルをすることで出せるのかを知ることができた。</li> <li>● チャットに意見や質問がたくさん出て、とても活発な授業だった。先生のタブレットと同じ画面を見たり、画面上でいろいろな動きがあったりなど、視覚的な情報が多く、電子教材初心者にも大変わかりやすくて、楽しかった。</li> <li>● 個別最適な学びが目指されている現在、ICT の活用は避けては通れないということを改めて感じた。ICT の可能性を更に探っていきたい。</li> <li>● 電子教材を使うということは「使うこと」が目的ではなく学習者の学習体験をどのように豊かにするかという視点から行うべきだとおっしゃられた点に共感し。</li> <li>● 日常的に PPT を使った指導行っているが、インタラクティブな学習をモジュール的に配置することで、学習者の学習体験が主体的にかつ効果的になることがよく分かった。</li> <li>● 自分でもいくつかのアプリを使ったことはあるものの、自分が作成するとなると非常にハードルが高く、抵抗感が強かった。しかし今回、先生が実際にアプリを動かしながら説明して下さったことにより、自分にもできるのではないかと興味が出てきた。なかなか手を出す気になれなかった ICT 教材を試してみようと思えるようになったことが本日の一番の収穫だった。</li> <li>● ICT 教材を取り入れ、授業をより良いものにしていきたいと強く感じた。アイデア次第で様々な使い方があり、日本語学習・教育の幅がおおいに広がると思う。</li> <li>● 紙や黒板では難しい、ICT 教材のメリットを活かすことができれば、今まではできなかったような分かりやすいインプットが可能だと思え可能性を感じた。</li> <li>● 利便性や効率性や多様性などからデジタル教材にとっても興味はあるが、イレギュラーでデジタル教材が使用できない時（起動しな</li> </ul>

	<p>い、画面が止まる、など)の授業の進め方も頭に入れておかないといけないなと思った。そうすると教師の準備が結局は膨大になるのでそこが今後の課題にはなるのかなと思う。</p> <p>●電子教材だと各自の通信状況によるテクニカルな問題や、またテクノロジーが得意でない生徒さん等、新たに色々と対応しないといけないこともあるかと思う。このあたりの対処法についても聞きたかった。</p> <p>●教師がこのような教材を授業で採用するには、どのような扱い方が最も効果的か、ICT教材に溺れない、ICT教材の活かし方というポイントについてもお話を伺えれば、より多くのヒントを得られたように思う。</p> <p>●コミュニケーションとしての言語を学ぶ上で、デジタル化がどれだけ必要なのか、習熟度においての実績のデータ化などの実証をしてほしい。少しずつ幅を広げながら、使えることから、使っていくようにすることが大切なのだと思う。</p> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>日本語教育においてICT教材を使用するメリットや必要性を伝えることができた。今回実際にいくつかの例を見てもらったことで、ICT教材の使用に苦手意識があった受講者の心理的ハードルを下げることができ、ツールを使った授業の可能性を見せることができたと思う。実際に受講生が授業内で使いこなし、ICTツールのメリットを最大限生かすには実践が必要となる。また、ICT教材を使うことでどのような効果があるのかをデータの観点からの話もできればより説得力のある授業となると感じる。</p>
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <a href="#">タブレット端末の特性を効果的に活かした言語学習</a> 掲載誌 徳山大学論叢 = The Review of Tokuyama University (80):2015.6 p.57-78</li> <li>● <a href="#">日本語教育機関へのICT導入に関する考察</a> 掲載誌 徳山大学論叢 = The Review of Tokuyama University (83):2016.12 p.19-34</li> <li>● 教材制作レッスンチュートリアル (ウェブ資料) <a href="http://fingerboard-app.com/blog/main/category/tutorial/basic-lesson/">http://fingerboard-app.com/blog/main/category/tutorial/basic-lesson/</a></li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>● 「Zoom+電子教材」のオンライン授業（ウェブ資料） <a href="http://fingerboard-app.com/blog/main/2020/04/23/online-lesson/">http://fingerboard-app.com/blog/main/2020/04/23/online-lesson/</a></li></ul>
--	--

科目名	対象別指導法2
担当講師	西尾亜希子
単位時間数	2 単位時間
目的	「日本語教師」として国と国、会社と人をつなぐ橋としての役割を担っていることを伝え、教師が幅広くフレキシブルな視点を持つことを助ける。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業レッスンとは</li> <li>・企業レッスンの難しさ</li> <li>・企業が求めるもの</li> <li>・さまざまな形での評価法</li> <li>・事例①～③</li> <li>・企業からの声</li> </ul>
内容	当校が企業レッスンを受注するに至ったきっかけとどのような会社を担当してきたかを紹介し、企業レッスンを担当する際の注意点、アドバイス、難しさを話した。お金を支払う企業の要望と実際の受講者の状況をすり合わせることも日本語教師の役目であることを伝え、この橋渡しをどのような方法で円滑に行うことができるかを過去の事例をもとにできる限り具体的に紹介した。最後に質疑応答の時間をとり、受講者の皆さんの質問にお答えした。
受講者の声／ 成果と課題	<p>「受講者の声」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●企業との信頼性の為に、レッスンの報告が大事であることを学んだ。</li> <li>●「企業」と「個人」、対象が変わると教える内容や評価方法に違いが出てくるのが分かった。</li> <li>●ただ単に日本語を教えるだけではなく、社内の人間関係を良くする橋渡しの役割も日本語教師は果たせるということを学んだ。</li> <li>●企業研修ではコースがスタートする前に企業と学習者のニーズをしっかりと調査し、コースの目標を何に置くのか、企業や学習者は何ができるようになりたいのかといったビジョンをしっかりと持つことが大切だと感じた。</li> <li>●ニーズを把握することはもちろん大切だが、さらに目的を達成するための教師のクリエイティビティも必要だということを感じた。</li> <li>●日本語教師の「非常にクリエイティブな仕事面」を拝見できて、あらためて日本語教師としてモチベーションが上がった。</li> <li>●日本語教師は、単に日本語を教えるだけではなく、日本語を通じて「日本人の考え方や文化」など、日本人の精神性を伝えていくこ</li> </ul>

	<p>とが大切なのだと学んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●内発的動機で受講する学者者ではなく、企業からの指示で受講する生徒へのアプローチについて考えさせられた。</li> <li>●たとえ難しい要望が企業や生徒からあったとしても、何ができるかを柔軟に考える事で良い方向に進むことができると教えて頂き、このことはどんなことにも通じると思った。</li> <li>●どのくらいの日本語定着を求めているのか、福利厚生として日本語を入れている企業に対して、どのような授業展開をしていくとよいか、ヒアリングがとても大切なことなのだと、事例を聞いていて感じた。</li> <li>●実例紹介がとても参考になった。難しい条件を言われても問題を分解してクリアすべきポイントを押さえ、できることから組み立てていった、という過程を伺うと、柔軟に考えられるかで、提供できるものが変わってくると思った。日本語を学びたい/学ばせたいという期待に応えられるよう、可能性を諦めずできることから取り組むようにしたい。</li> </ul> <p>「成果と課題」</p> <p>企業レッスンは学校に与える影響と、当校が企業レッスンを請け負うことになったきっかけを話し、誰しも直面する可能性があることを最初に伝えたことで、自分事として聞いてもらえた。一見無理そうな要望でも、コミュニケーションを重ね、紐解いていけば解決策が見つかる可能性があるということを理解してもらえた。企業レッスンだけでなく、子どもの学習や、マンツーマンレッスンの生徒のカリキュラム作成時にも役立ててもらえたらうれしい。</p>
<p>参考資料</p>	<p>特になし</p>

科目名	イベント企画
担当講師	西尾亜希子 (ATOZ ランゲージセンター) 長谷川卓生 (JEDUCATION CENTER 代表)
単位時間数	1 単位時間
目的	海外の日本語教育機関では、教師は授業以外に文化交流等のさまざまな目的を持ったイベントの企画・運営を求められる。今回の授業では、イベント趣旨に沿った企画の考案、講師からのフィードバックを通して、実際の赴任時に活かせる能力や求められるものに 대응するためのヒントを得る。
教育概要	イベントの企画考案
内容	<p><u>事前課題</u></p> <p>両講師からそれぞれイベントの趣旨（目的、場所、所要時間等）を提示し、受講者は趣旨に沿ったイベントの企画書を作成し、授業前に提出することを事前課題とした。</p> <p>提出された課題は講師のみではなく、受講生すべてが閲覧できるようにし、授業までに他の受講者の企画書に目を通すことも課題とした。</p> <p>&lt;イベント趣旨&gt;</p> <p>西尾先生：目的「生徒のモチベーション維持と学校のPR」 長谷川先生：目的「自分（達）と日本語を勉強したいと思わせること」</p> <p><u>ライブ授業</u></p> <p>事前課題に対し、講師からのフィードバックを行った。前半は、長谷川先生、後半は西尾先生というように前後半に分けて行った。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p><b>【受講者の声】</b></p> <p>●イベントの企画内容がかぶることなく、様々なアイデアをお持ちで素晴らしかった。私の企画は、参加者の「心を動かす」ことに意識を置きすぎて、他の方のイベントにあるような「アウトプット」が足りなかったことに気づかせてもらった。</p> <p>●多くの方々の多様な考え方、面白いアイデアや発想に触れることができ、自分のこれからの活動にも取り入れたいと思うもの、新たにやりたいことを考えるきっかけになるもの等に出会うことが</p>

	<p>できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●自分のスキル、強み、趣味を活かした企画は、学習者からの関心を得られるのではないかと感じた。</li> <li>●みなさんのイベント企画の内容をみていると、日本人にとっては何気ないものや、逆にそれは難しいだろうと思えることであっても、工夫次第で楽しく有用な企画にできるということがわかった。</li> <li>●長谷川先生が仰っていたようにこれからは「個人」として選んでもらうことが主流になり、「個人」をいかにアピールできるかが重要になると思う。今後自分自身が学習者に選ばれるかどうかは個人のアピール力によると思うので、皆様の企画書はとても参考になった。</li> <li>●日本語教師としての専門性だけでなく、それ以外の「引き出し」がいかに多彩であるかもまた教師の力量の内と考えると、日本語教師として幅を広げる、成長するには、いろんなことにチャレンジしてみるが必要と改めて感じた。</li> <li>●これから学校や地域でいろいろなイベントの企画をする機会があると思うが、その主催者の主旨に沿って考える引き出しになった。</li> <li>●今回は対面のイベント企画を考えてみたが、普段オンライン授業を行っているので、オンラインを活用したイベントや文化体験等もぜひチャレンジしてみたい。</li> <li>●学校経営者の視点やイベント実施の経験からのコメントはとても勉強になった。</li> </ul> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>海外に赴任した場合は授業以外のことも求められるということを実感し、企画書の作成を通して、今後求められるであろうイベントの企画に対する考え方や気付きを得られたのではないかと。また、他の受講者の企画書を見ることで、新たな視点に気付き、刺激となったと思う。実際に企画書を実行するには、また別の問題や困難にぶつかることが考えられるため、そうした問題への対処法なども議論できると良い。</p> <p><b>【成績】</b> A:44名 B:2名 F:8名</p>
参考資料	なし

科目名	模擬授業
担当講師	西尾亜希子 (ATOZ ランゲージセンター) 渡辺彰吾 (ジャカルタコミュニケーションクラブ)
単位時間数	6 単位時間
目的	現地の学習者に対して授業を行うことで、海外に赴任した際の授業のポイントや注意点等を考える。
教育概要	模擬授業
内容	<p><u>事前課題</u>            模擬授業のテーマと対象者についての情報を提示し、各受講者が45分間の教案を作成してくることを事前の課題とした。模擬授業のテーマは「日本文化紹介」、マレーシア、インドネシアの学習者各3名に対し            Zoom 上で授業を行う想定とした。</p> <p><u>模擬授業準備 (2 単位時間)</u>            事前に振り分けられたグループ内で教案を発表し、その後、グループで一つの教案を作成した。1 グループ4～5名で全 10 グループとした。            準備時間中、各グループに両講師への質問等をする機会を設けた。</p> <p><u>模擬授業 (4 単位時間)</u>            代表者1名が実際に模擬授業を行った。45分想定の授業ではあるが、模擬授業は冒頭の10分間を行い、その後の授業の流れについて5分間で説明をするという流れで行った。            模擬授業後、講師からのフィードバックを行った。            受講者は各グループへのコメントをシートに記入してもらい、授業後に回収し、後日、受講者全体で共有した。            各グループの教案は課題として提出してもらった。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p><b>【受講者の声】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●複数人で検討することで、様々なアイデアが出てきて大変面白かった。自分一人では気づかないことや、思いもよらない視点や発想が出てくるのが楽しかった。</li> <li>●様々なご経験をお持ちの皆さんの模擬授業（授業進行のスキル）や模擬授業の流れについての教案を拝見し、また共有させて頂くことで、授業形態の様々な可能性について気付かされた。</li> </ul>



	<p>●日本の文化はたくさんあるので、もっと視野を広く持つことや学習者達が何を目標としているのかなど考えなければならない点がたくさんあることを改めて学ぶことができた。</p> <p>●非常に多彩な「伝え方」を拝見することができた。普段他者の授業を拝見する機会はほとんどないので、大変勉強になったし、刺激になった。</p> <p>●オンラインの授業を学習者の目線から見る事が出来たのも良かった。</p> <p>●各グループの授業内容のレベルの高さに驚かされた。教材も多岐にわたっていて、大変参考になった。</p> <p>●各班の趣向をこらした教案はどれも個性的で、生徒に楽しみながら学んでもらう工夫に富んでいた。また、オンライン授業に慣れていらっしゃる方も多く、クイズアプリの使い方など、とても参考になった。</p> <p>●このような協働作業は確実に実力をつける実践的なもので、カリキュラムの中でも重要な位置づけにあったと思う。時間的余裕があれば、もう1テーマほど実践してもよかったと感じた。</p> <p>●特にオンラインでは難しいと思っていた生徒主体の学習ができていたチームがあり、そのやり方に刺激を受けた。逆転発想でオンラインだからできることもたくさんあり、新しいことを更新していく気持ちを忘れないでやっという気持ちになった。</p> <p><b>【成果と課題】</b></p> <p>グループで一つの教案を作ることに困難を感じた受講者もいた一方で、グループで協同することで新たな視点や考え方を学ぶことができたという受講者もいた。講師からのフィードバックを経て、赴任先での授業のポイントや注意点についても受講者がそれぞれ得るものがあつたのではないかと感じる。2コマの準備時間では不足、時間外に連絡を取り合ったグループもあつたため、授業時間外でもグループで集まれる場所（グループごとの zoom アカウントなど）を事前に準備しておく必要があつた。準備時間、発表時間については検討が必要。</p> <p>また、使用教材の著作権については事前に注意喚起を行っていたが、十分ではなかつたと感じる。著作権の扱いについては次回への課題としたい。</p> <p><b>【成績】</b> A:38名 B:5名 C:2名 F:9名</p>
参考資料	なし

科目名	マネジメント
担当講師	加藤早苗
単位時間数	2 単位時間
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外での実務及び関係者との連携の必要性について理解する</li> <li>・日本語教師の海外でのマネジメントについて広い範囲から考える</li> <li>・講座全体を振り返り、各自の目標を明確にする</li> </ul>
教育概要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. (録画) 文化審議会国語分科会「報告書」の内容の理解</li> <li>2. (録画) マネジメントの実際を聞き、考える</li> <li>3. (ライブ) 講座全体の振り返り</li> </ol>
内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 文化審議会国語分科会の報告書に示された「海外での実務及び関係者との連携のために必要とされる能力」について</li> <li>2. 海外（インドネシア）でのマネジメントの事例から <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ことばの問題「ことばができずにマネジメントができるか」</li> <li>2 電話代とFAX代「どちらを向いて仕事をしたらいいのか」</li> <li>3 カンパニーレッスン 教育の営業「日本のイメージ、教師のイメージは守るべきか」</li> <li>4 1ルピア入札 袖の下「日本の尺度とどう闘うか」</li> <li>5 日本留学の最前線「日本の代表としての役割をどう果たすか」</li> <li>6 一教師として「教師をどう育成するか」</li> <li>7 お手伝いさんの妊娠「人として。甘やかすって何なのか」</li> <li>8 ことばと文化の継承「Besok（明日）が指すのはいつか」</li> <li>9 引継ぎ 期限付き「習うべきものはゴルフか。バティックか」</li> </ol> </li> <li>3. 各自、講座全体を振り返り、これからの自分について考えた後、ブレイクアウトルームでその交換をする</li> <li>4. 全員で共有し、各自の目標を明確にする</li> </ol>
受講者の声／ 成果と課題	<p>【受講者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●日本語教師として赴任しても、時と場合によりマネジメント能力が必要とされることがあり、色々な視点からマネジメントを考える必要があることがわかった。</li> <li>●海外で日本語教師をするのは予想外の仕事や問題が沢山起こるという事と、それを受け入れ解決するバイタリティや精神力が必要だという事を強く感じた。</li> </ul>

●どんな教師になりたいのか、学習者にどんな風になってほしいのか、会社（学校）としてどのようなようになっていってどんな風を持っていくのかなど様々な場面でマネジメント力は必要になるのだと感じ、今からできること、どんな日本語教師になるのかを改めて考えたい。

●一口に日本語教師といっても、会社によって付加される役割が違い、名前以上にいろいろな仕事があるということがわかった。

●日本語教師は、現地に行くと思定とは違う文化や慣習になれる必要もある。柔軟さと行動力は、海外へ赴く日本語教師に必要とされるスキルであると学んだ。

●私は今年、協力隊でチュジニアに赴く予定なので、言葉が出来なくても「気持ち」があれば、マネジメントが可能だ、という言葉に大いに勇気づけられた。

●現地に赴く前にしっかり基礎知識を習得した上で、現地で実際に肌で感じて学べることがあると思う。日々勉強を重ね、いろいろな意味で人間として、日本語教師として深みを増していけるよう、頑張りたい。

●現地人日本語教師の需要について、これまで考えたことがなかったが、日本語学習者を増やすためには、現地人日本語教師の育成に力を入れていかなければいけないという気付きを得た。

●現地に既に日本語を教えられる人材が育っている場合、育ちつつある場合、現地の事情をよく理解した上で、現地スタッフと協働しながら、彼らのマネジメント能力醸成に貢献していくことが、海外に赴く日本語教師の重要な使命の一つであると理解した。

●現地教師とネイティブ教師がうまく役割分担を行いながら、アナログとデジタルのそれぞれの良さを使い分けて効果的に授業を行っていくバランスの重要性を学んだ。

●事前調査や準備を念入りに行ったとしても、現地に行ってみないと分からないこと、生活してみないと分からないことは、沢山あるので、まずは現地スタッフや現地の文化や習慣から学ぼうとする姿勢が大切であると再認識した。

#### 【成果と課題】

様々な視点から経験談を交えて伝えたことで、これまでマネジメントについて考えたことのなかった受講者にもその重要性を理解してもらえたのではないかと思う。事例について受講者同士で話し合いの時間を設けられたらより実践的なものになったのではと感じ

	る。
参考資料	なし

【総合成績】 A: 41名 B: 2名 C: 4名 F: 7名

## 5 事業全体の評価

本事業の目的である「海外の日本語学習ニーズの高まりを受け、世界各地で求められている日本語教育人材の中で、特に各国の民間の日本語教育機関で主に成人を対象とした日本語教育を行う日本語教師が備えておくべき知識、技能、態度を身につけられる人材養成・研修カリキュラムを開発し、提供すること」について、『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』に示された「海外に赴く日本語教師【初任】に求められる資質・能力」に基づいた「教育内容」「教育課程編成の目安」に合致しているかどうか検討した。

### （1）検討方法

#### ①研修受講者による評価

- ・研修内容と教材の成果に対する評価…各回の研修後にアンケート調査を実施。
- ・研修受講者による成果の自己評価…教育内容について研修後にそれぞれ達成度合いの記入を実施。

#### ②実施機関による評価

- ・研修内容と教材の成果に対する自己評価…カリキュラム検討委員会、教材検討委員会、および研修担当講師それぞれの自己評価と三者間の成果の振り返りを実施。
- ・研修受講者の成果に対する評価…講義への参加度、レポートの結果等による評価を実施。

#### ③カリキュラム検討委員会・海外提携機関・評価委員会による評価

上記①②を踏まえた上で事業全体の成果の検討を、カリキュラム検討委員会において行う。

また、海外提携機関も適宜、第三者的な評価を行う。プログラムの中盤と最終時には、評価委員会がそれらすべての結果をもとに事業全体の評価をし、以降の研修実施に反映させる。

### （2）検討結果

- ・『報告書』の「求められる資質・能力」の「知識」に該当する部分【1 赴任国・地域等における教育実践の前提となる知識】【2 日本語の教授に関する知識】【3 赴任国・地域等における生活・文化に関する知識】については、まず研修の初めに全体的な知識についての、次に4か国のタイプの異なる日本語教育機関の講師による日本語教育事情・各国の事例についての授業、それから、受講者自身が国・地域を選び、日本語教

育事情について調べて発表するという授業を行った。その後、養成講座で行う理論から一歩進み、海外で教えるという視点から言語・教育にかかわる知識を得る授業を行った。

- ・「求められる資質・能力」の「技能」に該当する【1 赴任国・地域等における教育実践のための技能】【2 成長する日本語教師になるための技能】については、「教材の探し方」「イベント企画」「模擬授業」「ICT教材の活用例」「ICT教材作成」「マネジメント」などがこれに当たる。【3 赴任国・地域等で日本語教師として自立する技能】については必要であるということを伝えている。
- ・「求められる資質・能力」の「態度」に該当する【1 言語教育者としての態度】【2 学習者に対する態度】【3 文化多様性・社会性に対する態度】については、それぞれの講師の海外での日本語教育の経験、考えなどを授業内で伝えたこと、「模擬授業」「イベント企画」などにより学びがあったことがアンケートを通して感じ取ることができると。
- ・「教育内容の確認」添付3、4  
本研修は、『報告書』の「教育内容」に合致している。カリキュラムについては「求められる資質・能力」の向上を図るうえで有効なものだと言える。
- ・「振り返りレポート」添付5  
課題は令和2年度、3年度とも「この研修で学んだことを、今後どのように生かしていこうと考えているか」であった。A4 1枚にまとめ提出。
- ・（受講者の振り返りレポートより）知識系の授業で改めて自分の授業について見直すことができた、講義から刺激を受け自分を活性化できたと感じている、「イベント企画」について自分でイベントを考えるという経験とほかの方のイベント企画案を見て様々な企画が可能なることを学ぶことができた、「模擬授業」については同じテーマに関して参加者の多種多様な考え方や方法に接することができ、これから自分の考えを柔軟にし幅を広げてくれたと感じる、「ICT教材作成」が役に立った、など「求められる資質・能力」の「知識」「技術」について受講者自身が成長を感じていることがわかる。
- ・（受講者の振り返りレポートより）日本語を教えること以外にも日本の文化や歴史を知っておくことや現地の文化や言語施策などを理解することの大切さに気づいた、積極的に現地の先生と関わりを持ちいろいろな価値観の違いを受け止めたい、など前向

きな考えが多く記されており、「求められる資質・能力」の「態度」についても受講者自身、気づきが生まれたことが見て取れる。

- ・「修了アンケートまとめ」添付6、7
- ・令和2年度では講座の時間が足りないと思うことが多かった。評価委員会でビデオ授業とライブ授業を組み合わせ反転授業のスタイルにするのはどうかという提案を受け、令和3年度は多くの授業をビデオ授業とライブ授業のセットにした。ライブ授業も録画して視聴できるようにしたため、見直してさらに理解を深めることができたと感じる。
- ・令和2年度の評価委員会で海外の子供にもフォーカスしてみたらどうかという提案があり、令和3年度は「海外における継承日本語」について取り上げた。これまで「継承日本語」について考えたことがなかった、または知らなかったという受講者も多く、新たな学びとなったことは有益であった。
- ・令和3年度の検討委員会で、受講前に自己紹介をするオリエンテーションを行っては、という提案をしていただき、交流の場を設けた。これ自体はとてもよかったが、研修終了後に参加者同士が話し合う機会をもっと多くしてほしいという意見が出た。また、研修最終日にも、今後受講者同士がつながることができるようにしてほしいと要望があった。検討の結果、受講生の自主性に任せて行うことになった。授業内でもグループで話し合う機会は少なくなかったが、オンラインの研修ではさらに工夫が必要であることがわかった。
- ・zoomを利用することで、どこにいても受講できること、ビデオ授業とライブ授業の録画でいつでも繰り返し学習できることなど、さまざまな環境にある方に受講の機会を提供することができるようになった。  
2か年に渡って行った研修で、受講者のより良い学びにつながるカリキュラムを作成することができたが、さらに改良を重ねていきたい。

以上

## 添付資料



令和2年度文化庁日本語教育人材育成・研修カリキュラム等開発事業  
海外に赴く日本語教師【初任】研修

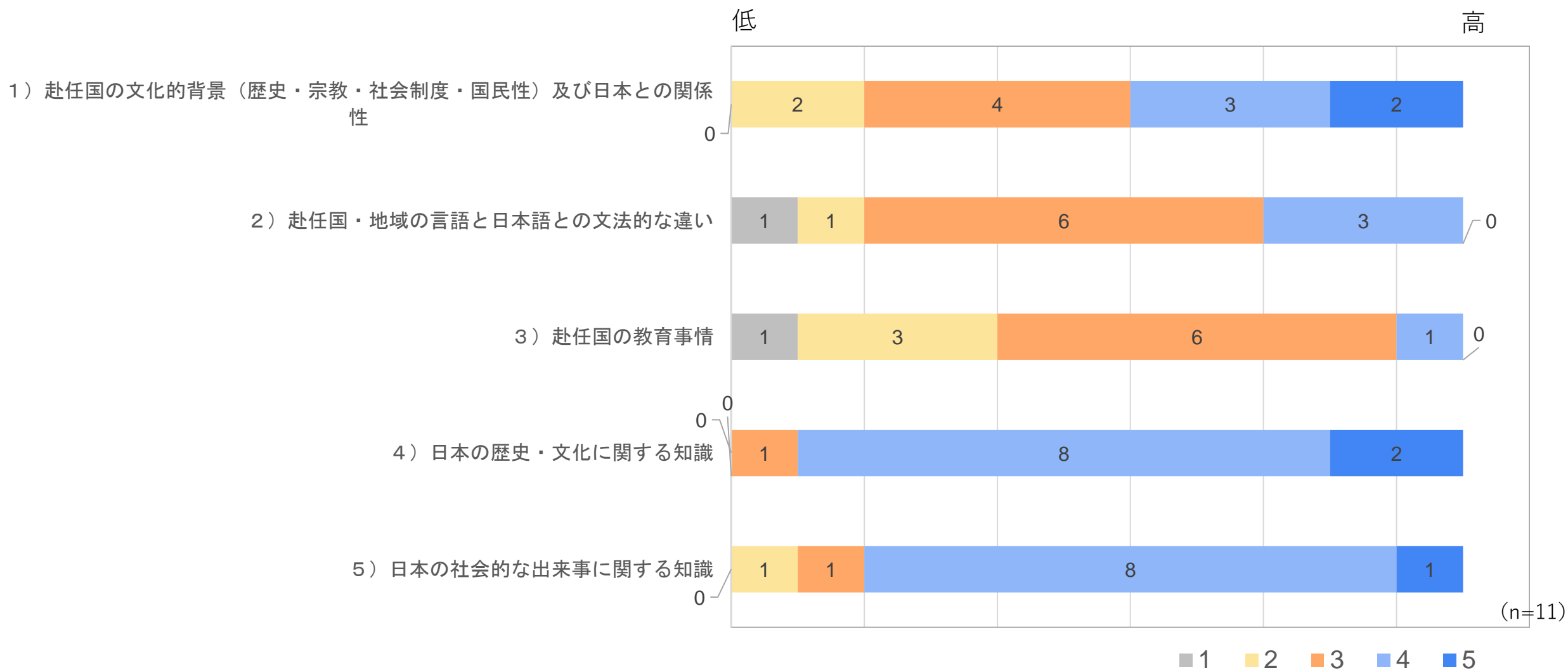
事前アンケート 集計結果  
《海外機関向け》

2020.08.28時点

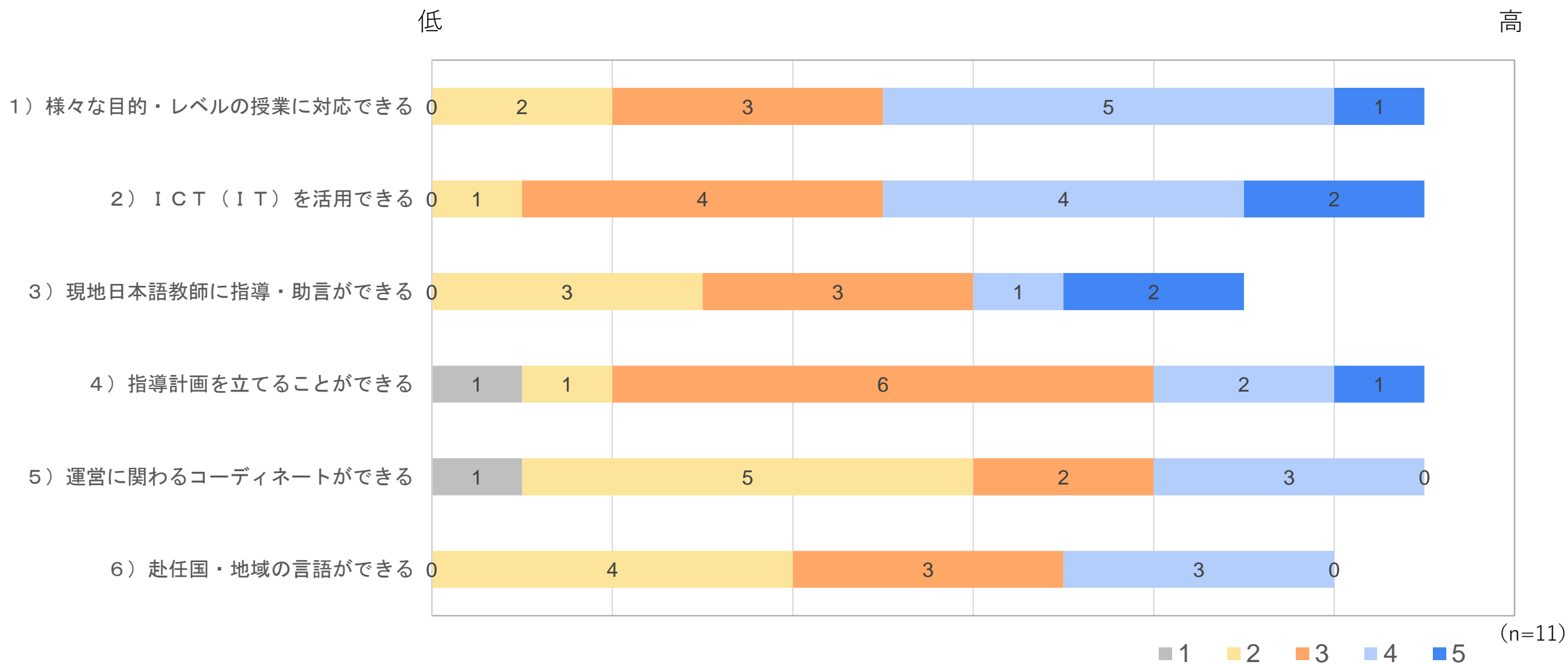
# 回答機関一覧

- マレーシア（民間日本語学校）
- インドネシア（民間日本語学校）
- ベトナム（民間日本語学校）
- タイ（民間日本語学校）
- 台湾（民間日本語学校）

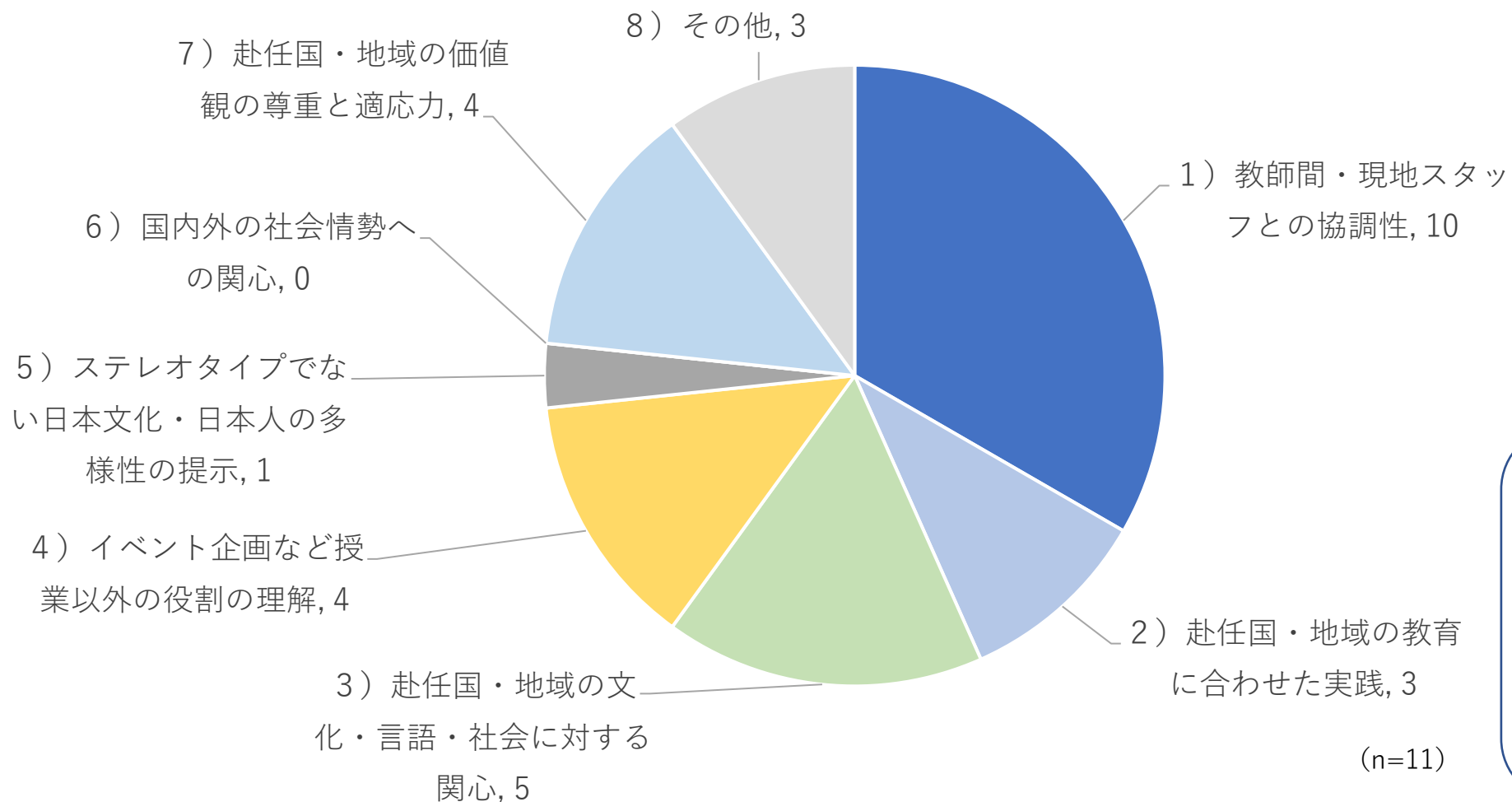
## 赴任する日本語教師に学んでおいてほしい知識の重要度



## 赴任する日本語教師に期待する技能の重要度



# 在籍している日本語教師に求めるものは何ですか。 (特に大切だと思うもの3つに印をつけてください)



## 《その他の詳細》

- 一般企業の人と普通にやり取りできるコミュニケーション能力。
- それを支える社交性、責任感、視野の広さ、好奇心の高さ、行動力。  
(すでにそうである必要はないですが、これらの点を高めようとする姿勢)
- 趣味、スポーツ、好きなことなどに関する知識や技能と、それを活用しようとする姿勢。

インターカルト日本語学校 海外に赴く日本語教師【初任】研修

令和2年度文化庁日本語教育人材育成・研修カリキュラム等開発事業  
海外に赴く日本語教師【初任】研修

事前アンケート 集計結果  
《日本語教師向け》

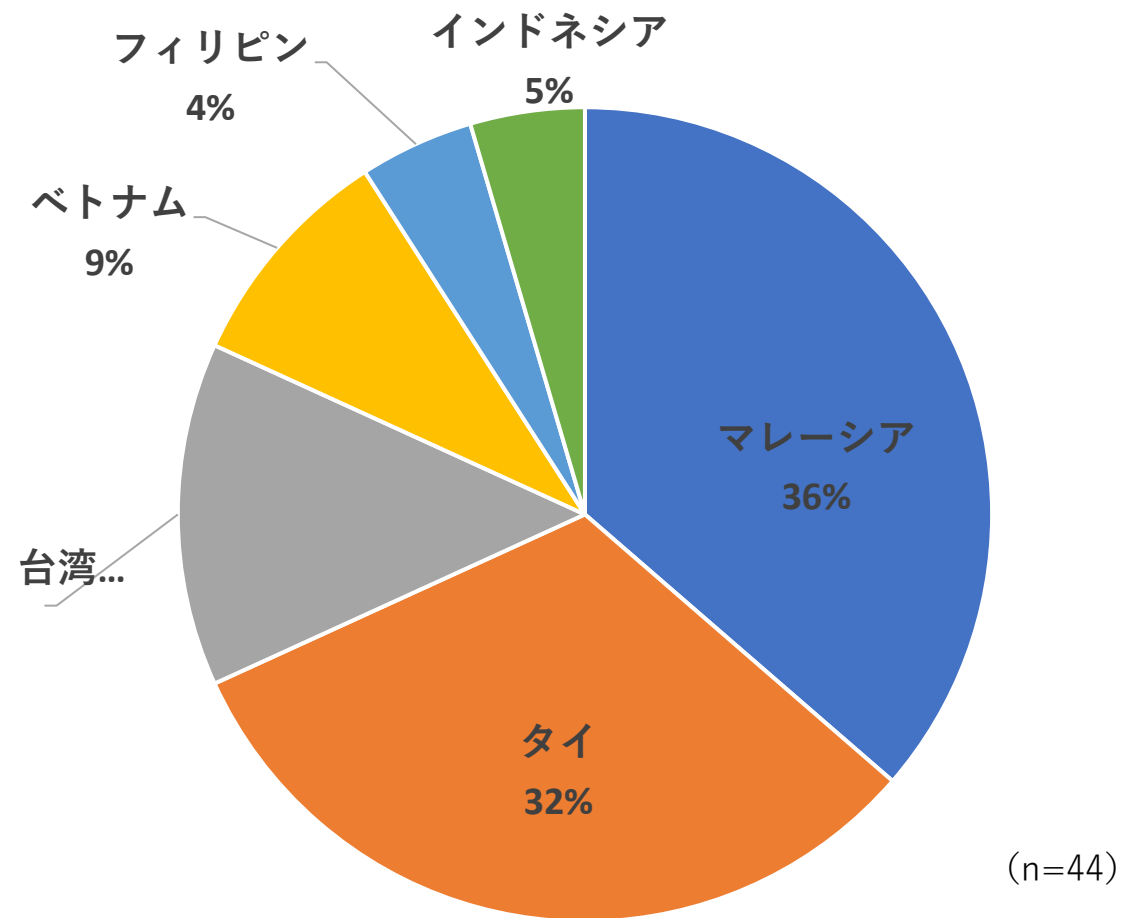
2020.08.28時点

## 回答者の所属機関

- |                   |     |
|-------------------|-----|
| • マレーシア（民間日本語学校）  | 15人 |
| • タイ（民間日本語学校）     | 13人 |
| • 台湾（民間日本語学校）     | 6人  |
| • ベトナム（民間日本語学校）   | 4人  |
| • インドネシア(民間日本語学校) | 2人  |
| • フィリピン（民間日本語学校）  | 2人  |
| • タイ（大学）          | 1人  |
| • 未回答             | 1人  |

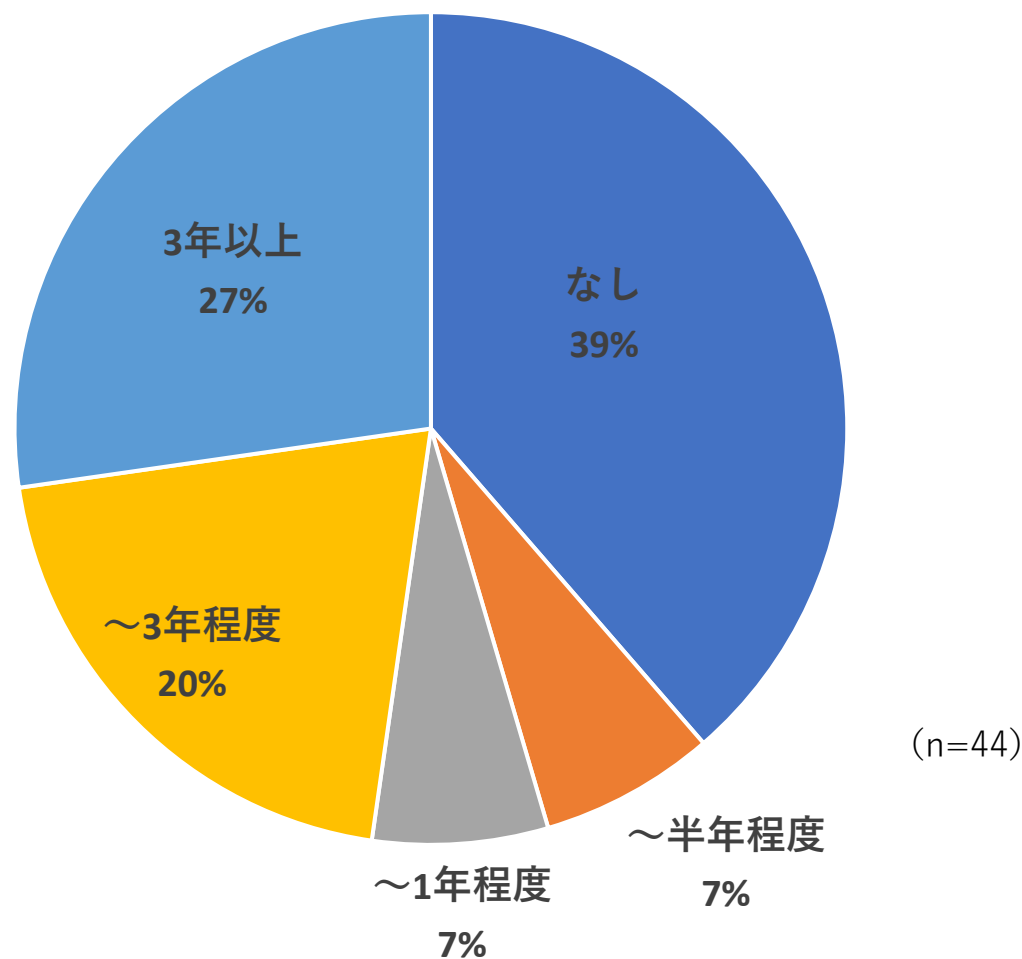
計44人

# 回答者の赴任国・地域

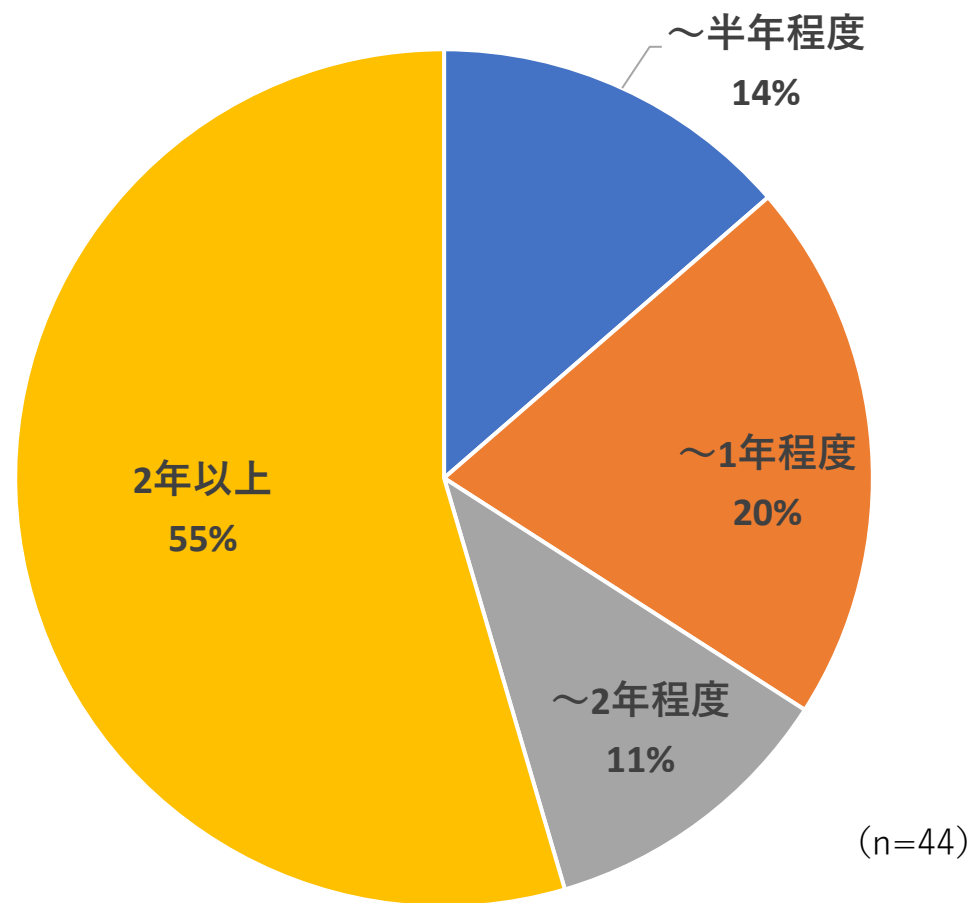




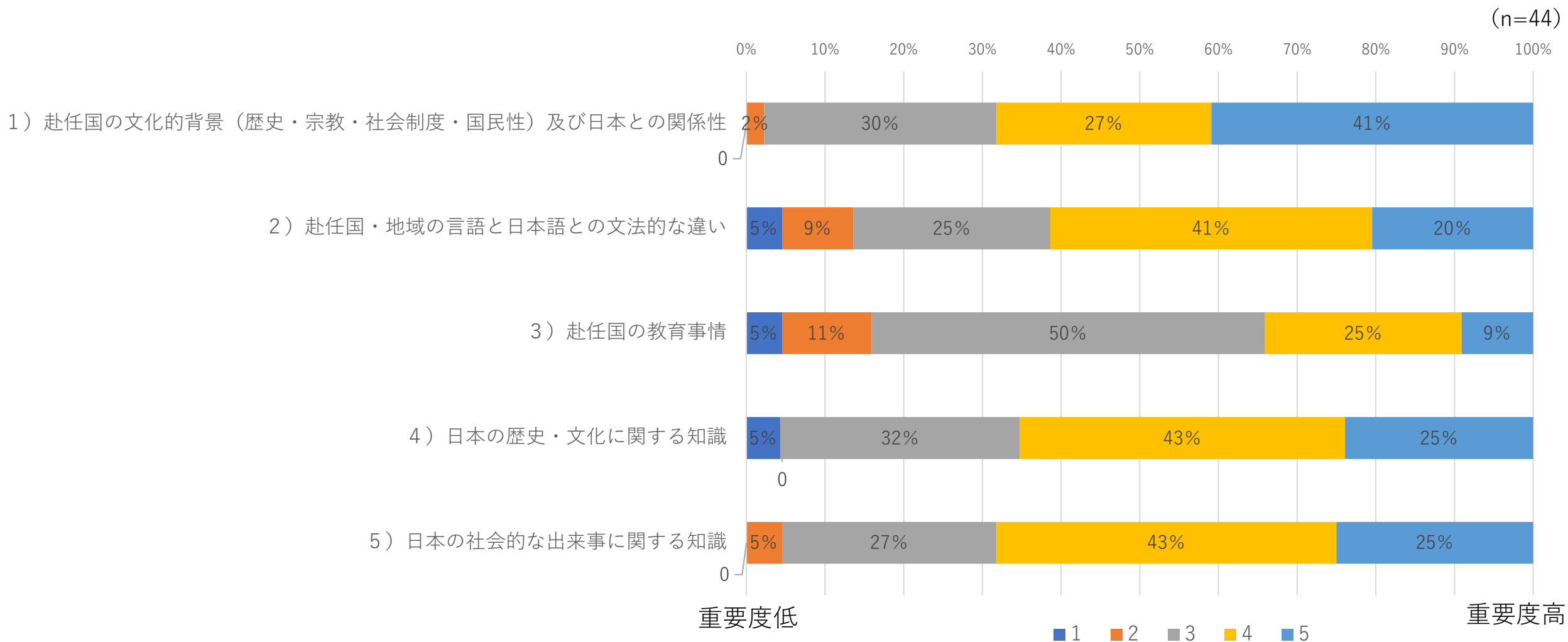
# 赴任時の日本語教師経験



# 赴任校での日本語教師経験



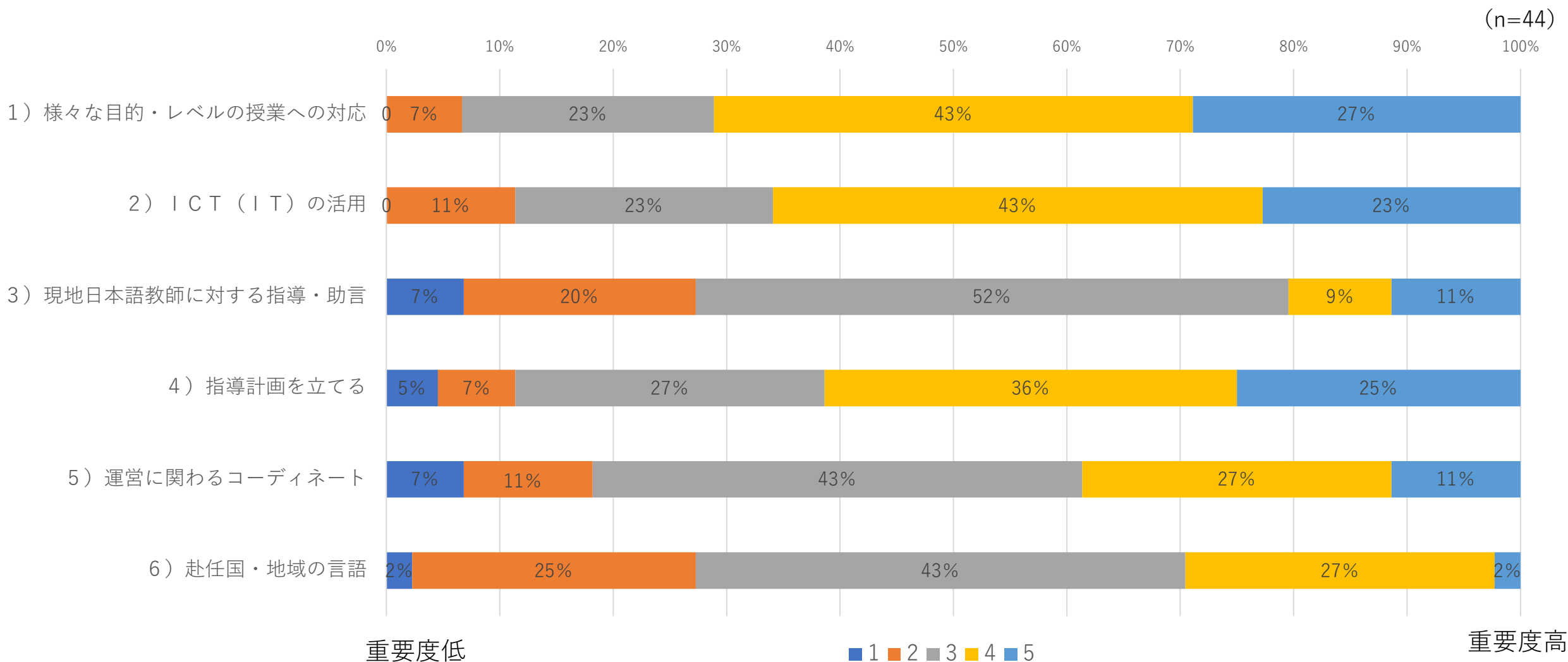
# 赴任する前に学んでおくべきと考える知識の重要度



# 赴任する前に学んでおくべきと考える知識の重要度 「その他」回答一覧

- ・事前に相手国の事情を知ることが大事だが、一方でその情報だけでものごとを考えるのではなく、柔軟に考えることが大事。
- ・働き始めた時に日本語教師としての経験が全くなかったのですが、授業見学後の指導があまりなかったので、教案チェックや授業のアドバイスをもっとして欲しかったです。
- ・台湾と中国との関係
- ・日本語学習者が主にどういった目的をもって学習に励んでいるか
- ・絵を描く技術
- ・ビザ、住居の手続き等の知識

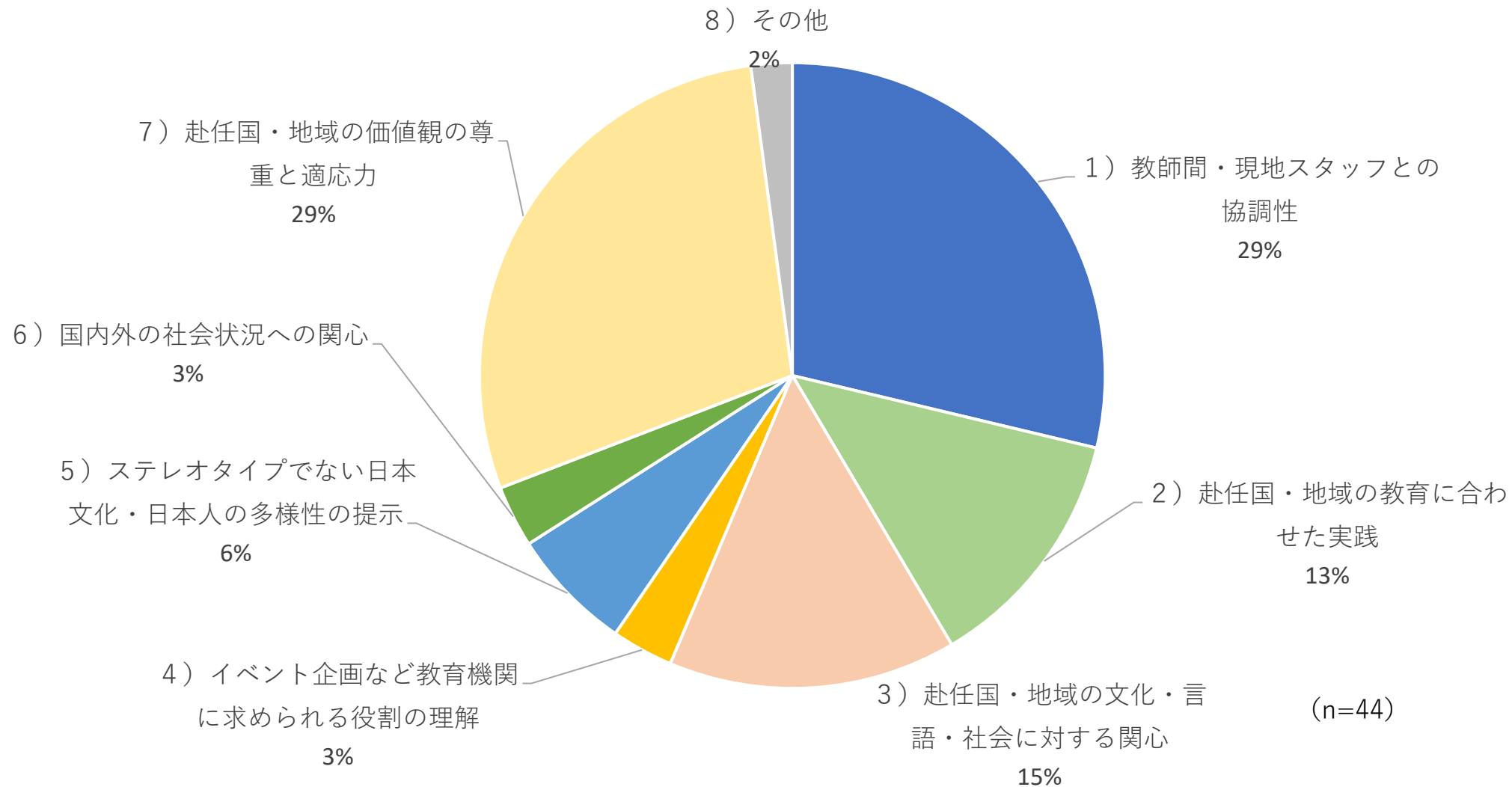
# 赴任する前に学んでおくべきと考える技能の重要度



# 赴任する前に学んでおくべきと考える技能の重要度 「その他」回答一覧

- ・文化的背景の理解はしっかりしておいた方が良いかと思います。
- ・人によって、食事や生活習慣に馴染めないことがあるので、出来れば事前に観光でも良いから、訪問してみる。
- ・その国の言語を知らなくても、レベルによっては日本語だけしか話さない先生の方が好まれることもありました。  
ただ文法的な細かい説明ができないので、その時に間違った解釈をされてしまう可能性もあるので、  
気をつけなければいけないと思いました。
- ・赴任地の生活に順応すること、異文化を理解しようとする姿勢
- ・赴任国の一般的な水準の生活に適應することができる
- ・経験が浅い時期でも色々なことを任される機会が日本国内より多いと思う。  
やりがいはあるが自己研鑽を怠ってはいけない。
- ・パフォーマンス力、海外で生活するにあたっての適應力
- ・日本語授業以外の文化紹介や体験イベントを企画する能力

# 赴任してみて、今、何が大切だと思いますか。 (特に大切だと思うもの3つに印をつけてください)



3 領 域	5 区 分	16 下 位 区 分	科目名（令和2年度）																							
			国際関係・海外の日本語事情	海外で必要な能力	日本語教育事情マレーシアの事例	日本語教育事情タイの事例	日本語教育事情ベトナムの事例	日本語教育事情イタリヤの事例	日本語教育事情アメリカの事例	多文化社会	言語の構造	言語習得	日本語教育事情	外国語コミュニケーション	異文化コミュニケーション1	異文化コミュニケーション2	評価法	シラバスカリキュラム作成	対象別指導法1	教具・教材のリソース	教材分析・教材作成	対象別指導法2	イベント企画	模擬授業	マネジメント	
社会・文化に関わる領域	社会・文化・地域	①世界と日本	○		○	○	○	○	○			○														
		②異文化接触	○		○	○	○	○	○			○														
		③日本語教育の歴史と現状	○		○	○	○	○	○			○														
	言語と社会	④言語と社会の関係	○		○	○	○	○	○			○														
		⑤言語使用と社会		○																						
		⑥異文化コミュニケーションと社会			○	○	○	○	○	○		○														
教育に関わる領域	言語と心理	⑦言語理解の過程									○															
		⑧言語習得・発達									○															
		⑨異文化理解と心理												○												
	言語と教育	⑩言語教育法・実習											○			○	○	○				○	○	○		
		⑪異文化間教育とコミュニケーション教育												○	○											
言語に関わる領域	言語	⑫言語教育と情報																		○	○					
		⑬言語の構造一般									○															
		⑭日本語の構造									○															
		⑮言語研究									○															
コーディネート能力													○	○	○							○	○		○	





振り返りレポート

【この研修で学んだことを、今後どのように生かしていこうと考えていますか？】

この4カ月の研修を通して、多くのことを学ばせてもらいました。

国際理解、各国における日本語事情、現実の取り組み方、日本語教師の役割、各国の事例、価値観の違いに対してどう対処するかなどです。研修前はただ漠然と海外で働きたいくらいのノーマルな考えでいました。

研修が始まったときは、まだ養成講座を勉強中であったため、海外で働く日本語教師のイメージもわかりませんでした。この研修を通して、現場で働くベテランの先生方の実体験に伴った貴重な異文化体験の話を伺い、グループディスカッションで多くの日本語教師の考え方の違いを学ばせていただいて、まさに目から鱗でした。

この研修を通して、これを今度どう生かすかを考えた時、まず最初に自分自身が、いかに日本について何も知らないかを痛感しました。それゆえ、どこへ赴任するにしても日本を背中にしょっていくわけですから日本の地理、歴史は最低限に知っておかなくてはならないと同時に、日本の文化を紹介できるスキルを何か一つ身に付けておく準備が必要です。それは、私を通して、日本を見ているわけですから、まず赴任前の準備が大切だと思いました。そうすればイベント企画などで日本の文化を伝えられることとなり、国際理解の一助に貢献できるのではと思いました。

勿論、日本語教師としての本来の日本語を教える新しい知識の積み重ねも必要ですが、それらを教えるにあたり、今のこの時代を反映し ICT の活用が必要ですので、それらを使いこなせる機器の操作方法も会得しておかなければなりません。この研修でも、数々の新しい教材作成の方法を学べたので積極的に活用し生かしていこうと思います。

赴任国が決まったら、その国の地理から始まって、言語政策、学習者の状況、宗教、使用されている言語や習慣、文化などを把握することが大切であり、それが授業の教案づくりにも生かせ、また学生が興味をもつこととなりコミュニケーションを図れることとなるのではないのでしょうか。

また、積極的に現地の先生と関わりをもちながら相談や指導を行ない、相手を理解するうえで誠実な態度で接していこうと思います。切磋琢磨し、しかも自分自身も楽しみながら行うことも大切だと考えています。試行錯誤しながら、タフな精神と体力も身に付けなければいけないでしょう。

しかし何といても、特にいろいろな国での価値観の違いを受け止め、その中でバランスをとる必要がある。決して、自分の価値観を押し付けないようにすることではないでしょうか。

バランス感覚をとりながら、価値観を共有していくことはたやすくはないが、チャレンジ、チャンス、キャンの精神で飛び込み自分を高めていきたいと思います。

2022/01/31

## 海外に赴く日本語教師初任研修

「この研修で学んだことを、今後どのように生かしていこうと考えていますか？」

### 1) この研修で学んだこと、気づいたこと

- ・海外赴任教師として、当事者（学習者、日本人教師、現地教師）、取り巻く環境（異なる言語・文化環境、教育ニーズ等）について、俯瞰する視野を持って行動すること。赴任国の実情を踏まえて適切な対応ができるように周到な事前準備が必要であること。
- ・日本語を教えるだけでなく、普段の生活の中で「日本人観」を自然に伝えることが重要。言語を超えて互いを知り理解して、思いや考え方を伝えようとする意思を大切にすることが必要。
- ・国民性を一面的に見ること（ステレオタイプ）は危険。教師は多面性を理解し、受け止めていく姿勢が求められる。思い込みや偏見を除いて、多角的な視点でものごとを考えることが大切。
- ・時代の変遷と共に、日本語学習指導も見直しが必要。試行錯誤しながら、対応を工夫して成果を挙げていくことが求められる。
- ・日本語学習のモチベーションを長期的、継続的に維持していくために、常に創意工夫して授業を創り上げていく努力を怠らないことが肝要。
- ・教育は種まきである。相手の可能性を信じ、相手と共に自分も成長することを意識すること。長期的視野と短期的目標をバランスよく調整すること。
- ・学習者は多くを学んだ後、自律して社会の荒波を乗り越えていかねばならない。その時学習者の「影の伴走者」としての存在になるよう、日々の教育に注力すること。

### 2) 今後心がけていきたいこと、生かしていきたいこと

語学の上達は日々の絶え間ない訓練、努力が必要だと言われます。教師は学習者の揺れる学習意欲、学習動機を随時支えていく必要があります。最終的に学習者の目標や理想の実現のために、伴走して支援できる教師となれるよう努力していきたいと考えます。

日頃から学習者の内発的動機付けを高めることに努めていきたいと思います。「日本語の勉強が楽しい」「日本語が上手に話せるようになり交友範囲が広がった」「もっと自国の文化や日本文化について会話したい」など、学習者の自然に湧き出てくる思いに基づいた会話が生まれるような環境づくりに心を配っていきたいと思います。

また発達が著しい電子教材を有効に活用したいと思います。但し、活用する際に留意すべきことは、それらを使って学習体験をどのように豊かにできるかというビジョンを明確に描き、導入を検討することが重要であると思います。

以上

## 振り返りレポート

### 【研修で学んだこと】

約4か月を通して、海外での日本語事情を深く学ぶことができました。

国においては自分では赴任を考えていなかった国のことまで知れて非常に有意義な時間でした。

どの国においても積極的に自らが先導する立場となって、現地の日本語教師の方々を指導、取りまとめをするという積極的な姿勢が必要であると感じました。またよりよいコミュニケーションをとることが必須になります。こちらの意思を伝える、理解してもらうことと同時に相手も知る、という相互理解も共通認識として持ちあわせていたいと思いました。自分の信念をもち、かつ相手とわかりあうために沢山話をして協力しあい、同じ目的に向かって日本語学習者の支援をすることが出来れば嬉しいと感じています。

各課講師の方のお話はどれをとっても貴重なお話でしたが、個人的には笈川先生の授業の一部を垣間見れたのは嬉しかったです。教材の探し方も参考になりましたし、継承日本語についても難しい一面もありますがとても大切なことだと思います。この講座は内容的にも多方面からカバーできていると思いますので視野が広がった気がしています。それはものの見方が変わり、あちこちの点が線で結んでいけることにもなると思います。

一番印象に残っているのはやはり最後の加藤先生のマネジメント授業です。

経験に勝るお話はないなと思います。

とても楽しかったのはイベント企画と模擬授業です。

自分で考えることは楽しかったしよいチャンスになりました。

皆さんの模擬授業の発表が非常にすばらしく大変参考になりました。

### 【今後どのように生かすか】

今後については海外で働けるチャンスがあればぜひどこでも行ってお仕事ができたならと考えています。

今回の研修ではマルチに色々な視点から物事をみれるようになりましたので、今までの教を常に念頭においてまた何か問題があったときに「そういえばあの時の授業で・・・」と思い出せれば最高だと思います。

加藤先生をはじめ諸先生方の実体験などもとても勇気と希望をいただけるものでした。

今後の指導のキーワードになるものを生かしてこれからも自分の目標を目指そうと思います。

今回の研修は非常に有意義なものとなりました。先生方、スタッフの皆さま、ありがとうございました。

令和2年度文化庁委託事業  
海外に赴く日本語教師【初任】研修  
修了アンケート 回答結果

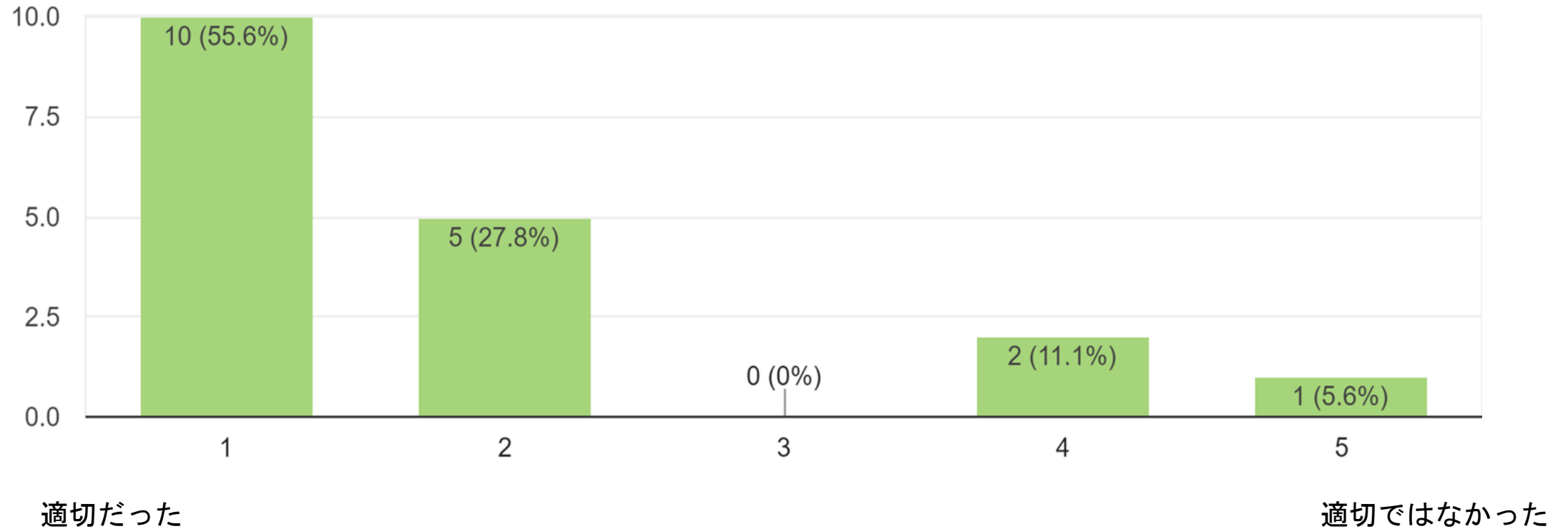
インターカルト日本語学校 日本語教員養成研究所 作成

# アンケート概要

- 回答期間：2021年2月27日～3月5日
- 対象者：文化庁「海外に赴く日本語教師初任研修」受講者（33人）
- 回答者：18人
- アンケート形式：googleフォーム

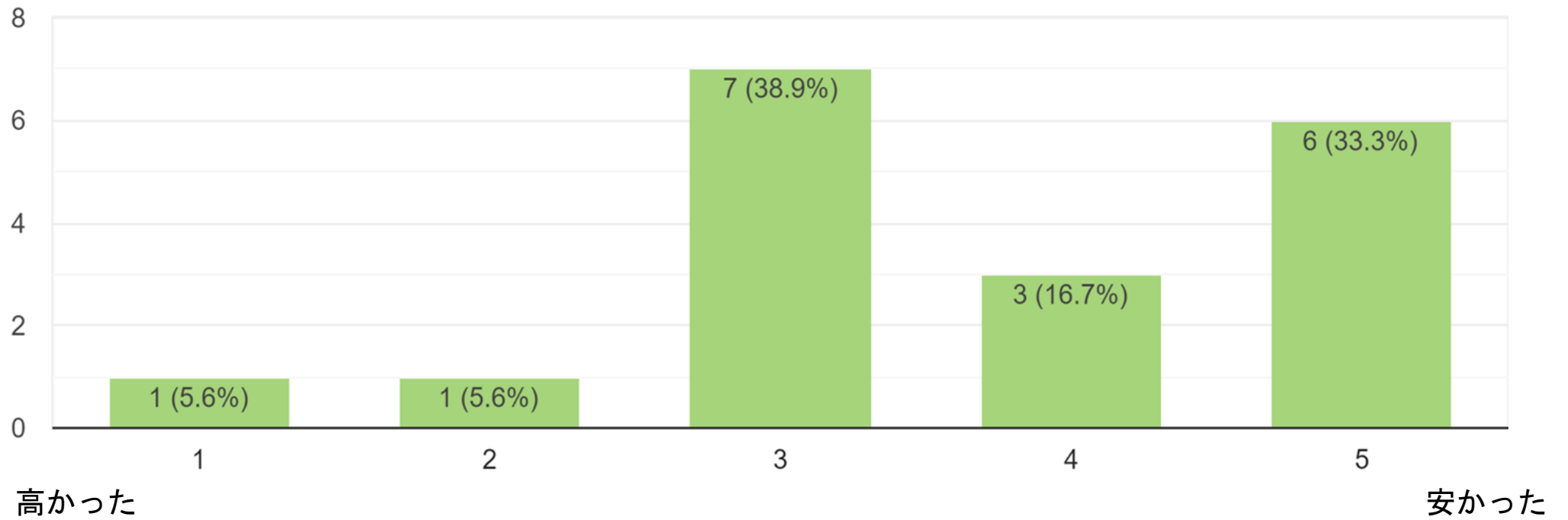
# 1. 日程は適切でしたか？

18件の回答



## 2. 受講料は適切でしたか？

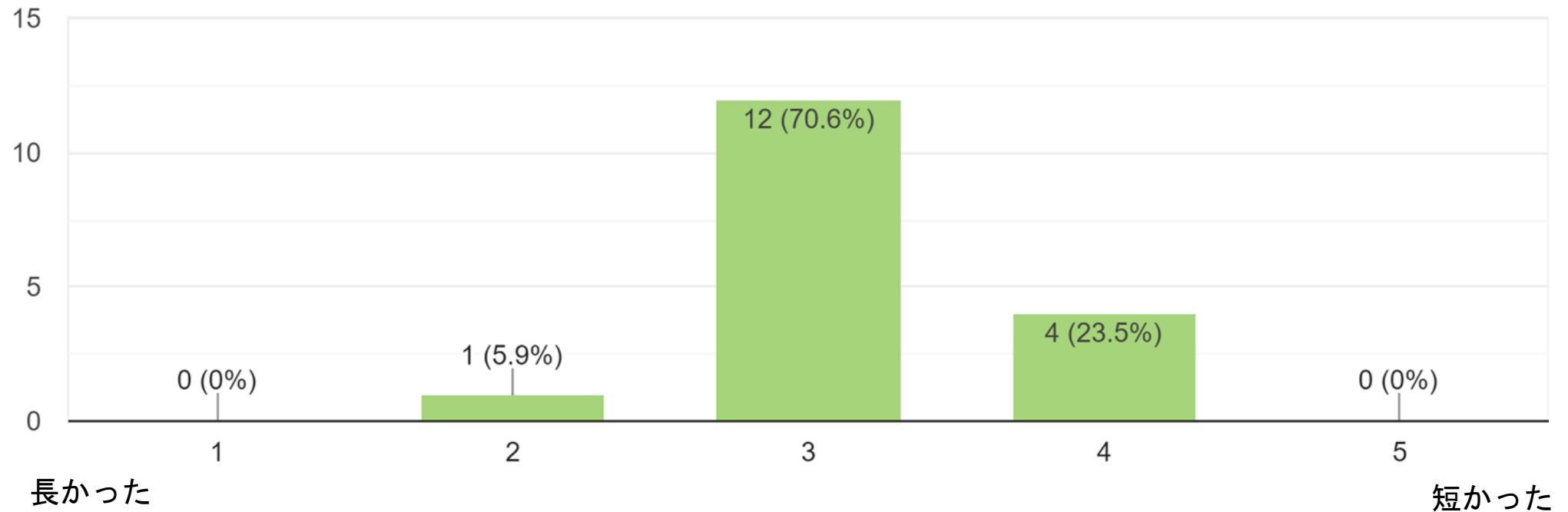
18件の回答





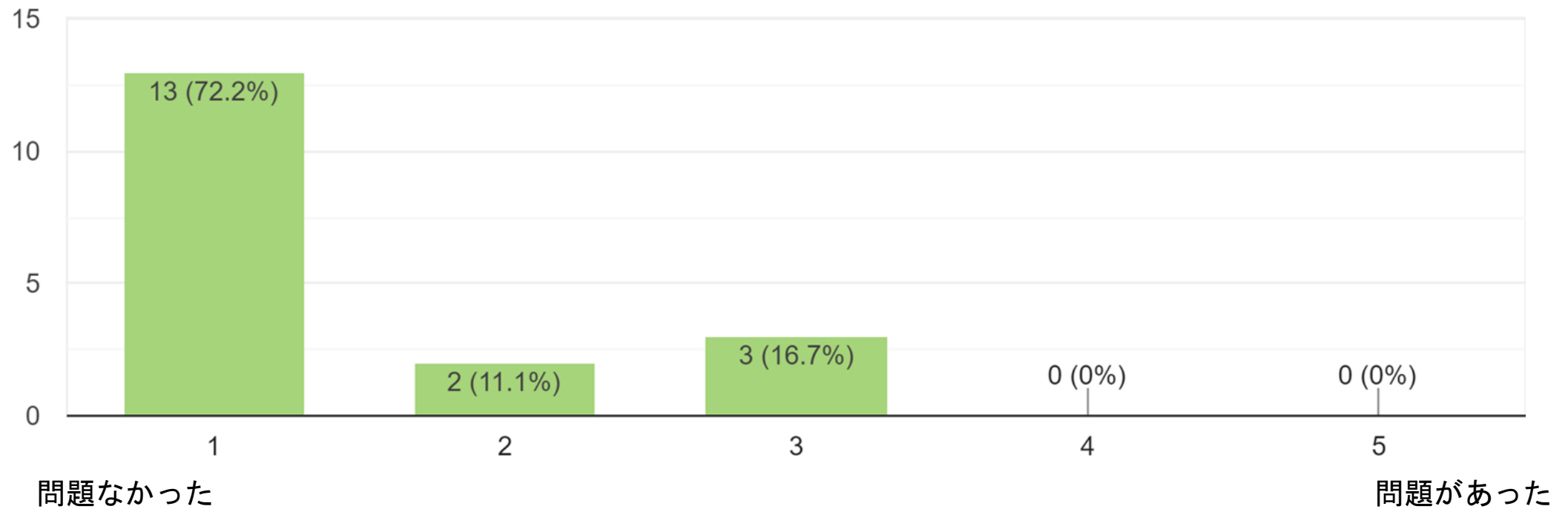
# 3. 授業時間の長さは適切でしたか？

17 件の回答



# 4. ZOOMの仕様は問題ありませんでしたか？

18件の回答



## 5. 1～4 について何かあれば自由にお書きください

- 日程も適度にちょうどよく 時間的には少しタイトな部分もありましたがダラダラ長くしすぎない点がとても良かったです。アンケートも 適切な量と内容 でした。
- コロナで海外で教師をすることができず、気持ちが下がっていましたが、定期的に海外の日本語教育について学ぶことができ、お財布にもとても優しいお値段で、とてもありがたかったです。現地で実際に働いていらっしゃる現役の日本語教師の先生のナマの話を聞いたのは、本当に興味深かったです。日本では知ることのできない情報ばかりで、大変ためになりました。
- 欠席してしまった際も、録画で拝見することができ大変助かりました。また、各国の最前線の日本語教育事情など先生方から赤裸々なお話を伺うことができ、とても面白かったです。受講料もとても安く、来年別の講座をぜひ受講できたらと思いました。
- オンラインで学習するには適切だったと感じた。
- とても費用対効果が高い素晴らしい研修だったと思います。
- 長いようで短い研修でした。様々な先生のお話を聞け、学ぶことがとても多かったです。
- ありがとうございます。今後ともよろしくお願い致します。

- 全体を通じて、レジユメがなかったことに大変苦勞をしました。講義を聴きながら、メモを取りながら…で慣れない最初のうちは、50分のビデオ一本視聴するのにも2時間近くかかり、視聴があるたびにいつも気が重くなりました。「言語の構造」のみ、最初から配布資料があったことが大変ありがたかったです。講師の先生方から前もって資料をもらうことは、難しい点もあるかと思いますが、Googleドライブなどを活用して、PDFでいいので配布していただけるとありがたかったです。
- 表示されるPPTの文字が読めない箇所があった。音声がよく聞き取れずノイズが入る時があった。グループで話し合う時間が短かった。
- 録画視聴分につきましては、せっかく録画なのでですから視聴スピードを変更出来るものにしていただけたらと思います。見直したいと思った時に変速できないのでは、見ること自体諦めてしまったりいたします。どうぞご検討できないでしょうか。
- 海外との時差の関係とは充分承知しておりますが、2/20のみ14:45までで、勤務との兼ね合いで最後まで受講できなかったのが大変残念でした。

## 6. 本研修の中で、もっと他に取り上げてほしかったテーマや内容があれば自由にお書きください

- 教材作成の方法や もう少し踏み込んだ 実践的 授業内容 または実習などを取り入れて いただけるともっと良いなと思います
- 中国、台湾、香港の事情についても取り上げて欲しかった。
- 現地の先生の一日の様子などを追ったビデオは、インタビュー等ではわからない海外で働く実際の学校の様子を知ることができて大変面白かったです。
- 教師の資質などは養成講座や個人でも学べることなので、指導法にもっと時間をとって欲しかった。具体的に〇〇の指導法のような具体的なもので、現場に直結できる内容で。それを中心に講座を開講することで、他の機関と差がついて良いと思う。
- 教材作成、実際にグループで1つの教材を作成したり、教材作成についてのアイデアを他の方々とシェアしたいと思いました。
- 初任者研修ですし、できれば、過去の企画の企画書や運営仕様書などを見せていただいていたらもっと共同作業時の企画に緻密さが出てきたのかもしれないとは思いました。

- 現場の授業で実際に発生する問題点を挙げて解決策を話し合う時間を多くほしい。最後のマネージメントの問題以外にあるはずです。
- 現地での実際の授業風景を見たかったです。どのような形態で、どのシラバスで行われているのかなど、ビデオ授業の中で見せていただけたらと思いました。また、手元に資料がほとんど残らないので、講義やビデオ授業などの資料やPPT資料などを共有してほしかったです。
- アメリカの学校のお話を聞いた際に、ハイブリッド学習についての話題が出ていました。on-line授業に関するテーマでの講義も聞く機会があればよかったです。
- 各国の授業でどの程度、ICTを活用しているのか 知りたかった。
- 現地教師の教育やコースデザインについて、もう少し時間があれば聞いてみたかったと思いました。
- 海外で教えた経験がなく、開講時には海外では何が必要なのかもわからない状態でした。掘り下げれば、あるいは広げれば、きりが無いのかもしれませんが、初任者向けとしては今回の研修でほぼすべて網羅して下さったのではと思います。

令和2年度文化庁委託事業  
海外に赴く日本語教師【初任】研修  
修了アンケート 回答結果

インターカルト日本語学校日本語教員養成研究所作成

目的：受講者からのフィードバックをもとに、研修内容を改善  
するため

形式：Googleフォーム

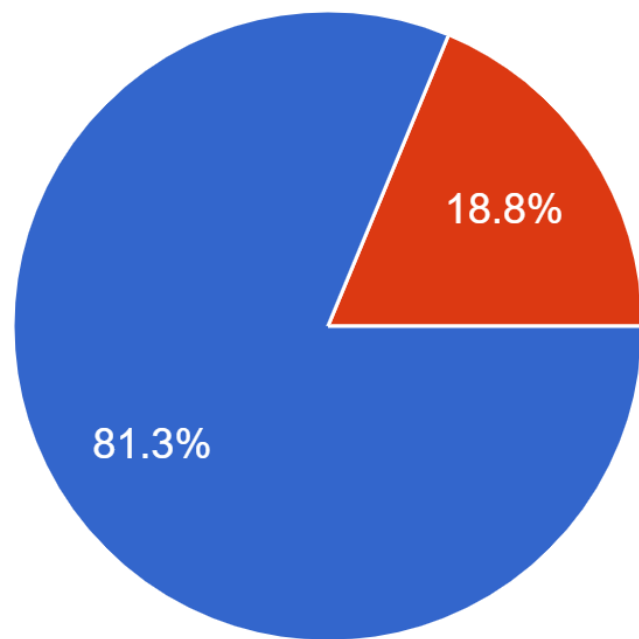
期間：2022年2月3日～2月7日

回答：32名



## 研修は有意義でしたか

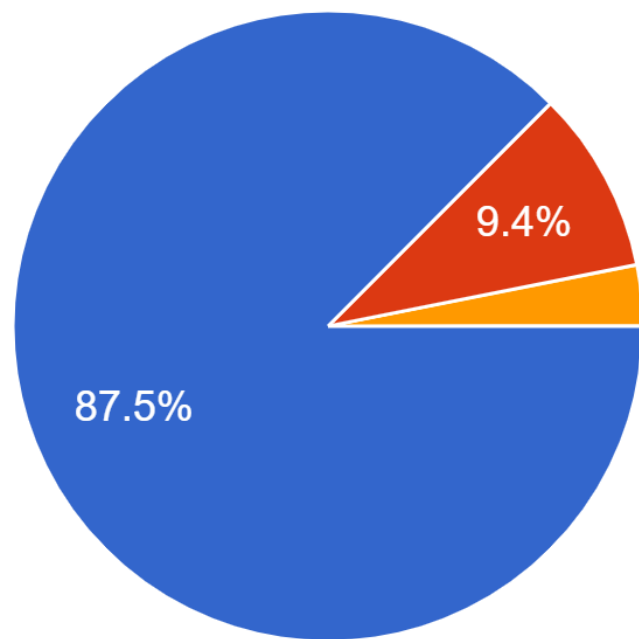
32 件の回答



- 有意義だった
- まあまあ有意義だった
- あまり有意義ではなかった
- 有意義ではなかった

## 日程は適切でしたか

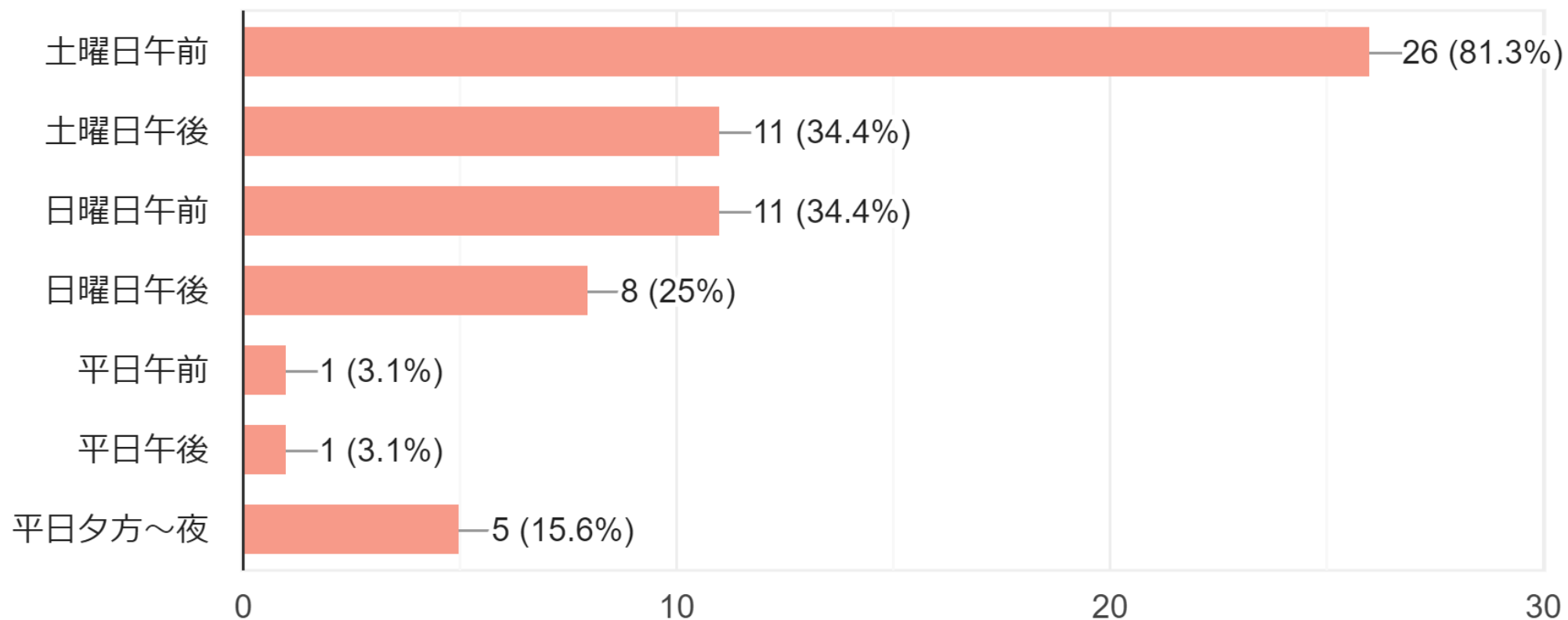
32 件の回答



- 適切だった
- 長かった
- 短かった

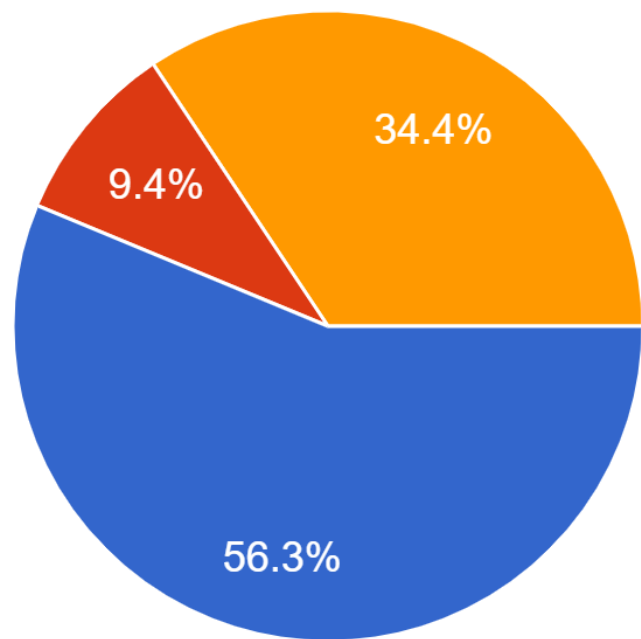
研修に参加する曜日、時間帯はいつが都合がよろしかったですか。（複数回答可）

32件の回答



## 受講料は適切でしたか

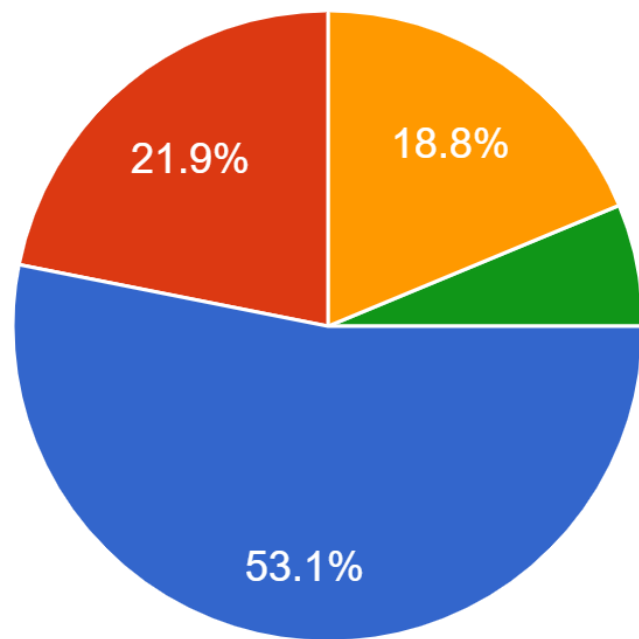
32 件の回答



- 適切だった
- 高かった
- 安かった

## 講義の「ノート」は活用しましたか

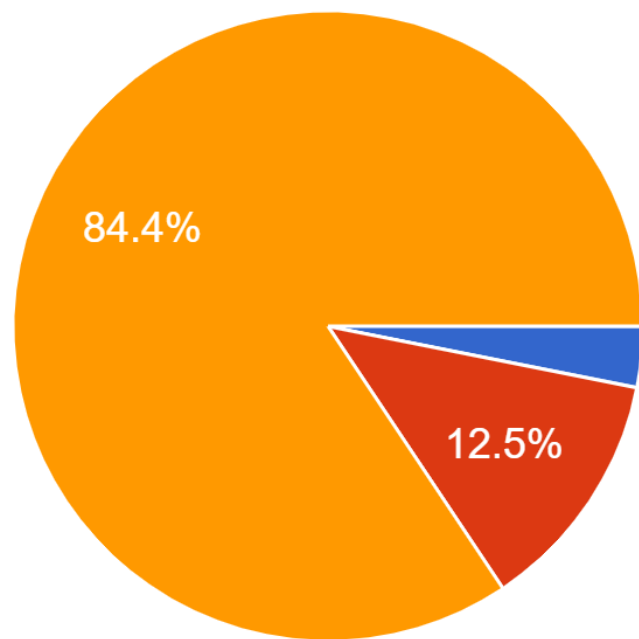
32件の回答



- 活用した
- だいたい活用した
- あまり活用しなかった
- 活用しなかった

ご連絡の方法はいかがでしたか。

32 件の回答



- Googleドライブだけでよい
- メールだけでよい
- Googleドライブとメールの併用がよい

この研修で取り上げてほしかった内容がありましたらお書きください。

- ・加藤先生の「マネジメント」ともかぶるのですが、海外で教えたが故の「苦労話」はもっとお聞きしたかったです。
- ・今回習った以外のICTの操作方法。
- ・以前この講座を受けた人たちがこの講座を通して学んだことをどのように活用したかなどの体験を拝聴してみたい。
- ・トラブル対処の仕方。
- ・日本語教授法、日本語教育史、日本語史、等々。
- ・日本で起きている外国人差別問題など（技能実習生や入管での事件など）。日本語教師養成講座で、日本語教師を目指している方の中でもそのような事件があることすら知らない受講者が結構いたことに衝撃でした。日本語教師として知っておくべき話題だと思いますので是非取り上げて欲しいと思いました。
- ・海外の教育機関での求人情報の集め方と、そのための採用に近づくためのノウハウ。ほとんどの人が知っているとは思いますが、共有することで新情報があるかもしれないので、少し期待していました。
- ・「発音（音声）指導」（養成講座のような理論ではなく、実際の指導例）があれば聞いてみたかったです。音声の指導は母国語の影響が大きいので、汎用化して教えようとするとうまく理論を教えるようになってしまいます。例えば、日本在住の外国人数2トップの中国、ベトナムに特化してそれぞれの国別の指導例の研修があれば取り上げていただきたいです。（中国は筧川先生の講座がありました）
- ・「学習者の会話能力を高めるテクニック」「zoom上でも使える『Kahoot!』等のツールの実践例」「海外への就職手順や募集先の紹介」「研修参加者との情報交換会や懇親会」等があったらと思いました。
- ・現地スタッフとのコミュニケーションのとりかた。非漢字圏の生徒と漢字圏の生徒に対する教え方のポイントの違い
- ・もう少し、各自の状況や将来の展望に沿って、カスタマイズできるような自由度の高い授業、アクティブラーニング系の授業が増えればいいなと感じました。
- ・他の先生方の授業を拝見するのは勉強になった。今回はグループに一つの模擬授業でしたが、もう少し時間をとって頂き、もう少し長く、たくさんの模擬授業を拝見したかった
- ・イベント企画の授業も勉強になった。企画だけではなくイベント実践授業もあると楽しい
- ・参加者の中には、とても経歴がユニークな方が多く、もっとお話を聞きたいと思った。そのご経験をシェアして頂く時間があると良いと思った。
- ・ICTツールの講座。「触り」程度だったのでもっとしっかり学びたかった。カフトやクイズレド、ジャンボードやグッドノートや動画編集、YouTube作成等々、オンライン日本語のTIPSをもっと学びたかった
- ・海外の授業で喜ばれるアクティビティやゲームなど"
- ・初級と中級でそれぞれ何か具体的な文法を取り上げた講義、上級のJLPTクラスの講義があったら良かったと思いました。また、授業の見学20分+講義25分のような形で録画でもいいので、いくつかの国の現地の対面授業を見て、それぞれの国の雰囲気を知りたかったです。
- ・世界各地のお話が聞けましたが、まわりではベトナム人がとても増えているのでもう少しベトナムについてあるとよかった。
- ・オンライン授業の経験がなかったので、ZOOMなどを使って授業を進めるコツや方法などの授業があったらよかったです。また模擬は発表者が一人だったので、学習者のグループでZOOMの模擬授業ができたならよかったですと思いました。
- ・一緒に勉強している方のプロフィールとか自己紹介の時間があるともっと良かったです。

その他、何かありましたらお書きください。

- ・企業研修の話など実際海外で教えていらっしゃる先生方の話を聞くことができたのは有意義だった。
- ・最初の方の講義は理解できているかよくわからなかったので、数分でもいいので質問コーナーを挟んでほしかった。
- ・事務局の皆様、誠にありがとうございました。途中「講義で質問するときのルール」ができたのは大変有意義であったと思いました。またお世話になることもあろうかと思しますので、今後ともよろしく願いいたします。
- ・メキシコ在住の私でも参加できる時間帯（時差15時間）でしたので、助かりました。濃い内容の研修をお安く提供していただけて、有り難かったです。他の受講生の皆さんともいろいろお話しできて、楽しかったです。ありがとうございました。
- ・この研修とは直接関係がありませんが、今後オンライン授業(教材)に特化した研修があれば、ぜひ参加させて頂きたいなと思います。
- ・ビデオ講義とライブ講義の併用は是非続けていただきたいと思います。時間的、理解能力的なことでもとても有意義な研修でした。ありがとうございました。
- ・リーズナブルな料金で、ここまで丁寧におしえてくださり、知らない世界を身近に感じました。また、海外での日本語教師の役割を改めて自覚できたことに感謝するのみです。全く違うことなんです、大勢の方が学ばれると、やはり対応に対しトラブル事があるのだなぁということも知り、海外でも苦情に対し、どのように処理したら良いのかも学びたいと最後の時痛感しました。
- ・一方的な講義調の授業が多すぎる。我々は受動的にならざるを得ない。各自参加型の授業を工夫すべきである。講師は後でアンケートを見るだけではなく、授業中に受講生と司会を介さず直接意見交換する方法を考えて欲しい。
- ・このような機会がなければお話しを聞くことも出会うこともなかった方々を知れて本当に楽しかったです。このボリュームでこのお値段は他の研修セミナーと比較すると申し訳ないほど良心的で、今後もこのようなセミナーがあれば絶対参加したいと思いました。その日参加ができなくてもその後動画で確認できる場所もとても有り難かったです。セミナーのご準備やご手配など、本当に大変だったかと思いますが、大変学びになりました。ありがとうございました。
- ・充実した内容でした。ありがとうございました。今後、つながっていこうという呼びかけはその後どうなりましたか？
- ・地方在住の私にとってオンライン形式で、しかもこれだけの講師の先生を揃えた講習を破格の受講料で学べる本セミナーはとてもありがたかったです。講師の先生方および運営を担っていただいた事務局の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。とても楽しいセミナーでした。
- ・ブレイクアウトルームは思わぬ弊害もあるので、必要性、効果を吟味して使用していただきたいと思います。また、頻繁にグループを変えるのも色々な人と出会う以外の意義が見出せなかったです。むしろ講師の話を時間いっぱいにお聞かせいただきたいかったです。
- ・長期に亘り丁寧なご指導を賜りありがとうございました。全体のカリキュラムはバランスよく構成されており、多方面からの講師の方々の講義も内容の濃いもので、大変よかったです。唯一の希望としては、参加者とのブレイクアウトルームでの交流時間がもう少し欲しかったと思いました。様々なキャリアの参加者のお話がとても参考になりました。その意味で、模擬授業をもう一つ別のテーマでメンバーも組み替えて、実施していただけたらと思いました。
- ・有意義なセミナー受講ができました。講師陣も素晴らしく、これからもいろいろな視点で学んでいきたいと思わせてもらったセミナー勉強会でした。ありがとうございました。



その他、何かありましたらお書きください。

- ・はじめに注意事項を配ってほしかった。解答する際に、ビデオをオンにできない人やできる人がいたので、アクションボタンを必ず使用する、他の人の学習の妨げるような発言を控えるなど。人数が多かったのである程度の注意事項必要だったのではと思いました。
- ・ちょっと変わった方がいて、授業の妨害を感じました。またその方がいると話し合いをやめて、グループを退席してしまう方もいたので困ってしまいました。自己の意見を伝えることはいいと思いますが、発言方法をもう少し厳しく律してほしいです。授業の時間が短くて、毎回担当の先生が内容を端折ってしまったのが残念です。期間や内容を検討するとしょがないとは思いますが、もっと詳しく聞きたかったな～という講義が多かったです。
- ・研修参加者の方の中には百戦錬磨の方も、複数回参加差有れた方もおいでの様ですが、ビデオ教材の視聴方法やレポート提出手順等、もう少し丁寧な案内があった方がありがたいです。海外では不案内は日常茶飯事とは承知していますが、初心者もいますのでよろしくお願いします。
- ・受講料が安く感じられるほど、内容が充実していましたし、インターカルトの方々のサポートがとても丁寧でした。このような機会がありましたら、また積極的に受講したいと思いました。
- ・模擬授業のグループワークを見直すべきだと思った。グループに欠席者や参加に消極的な方がいる場合、模擬授業の準備は一部の人のみに偏り、実質、何もしない方、アイデアすら出さない方が同じ評価だととても不公平な気がした。他のグループにはネットカフェからの出席でグループワーク中、ずっと音声をミュートにしていた方もいたそう。
- ・素晴らしい教師の方々の講義を受ける事が出来て、感謝しております。上にも書きましたが、現地の対面授業を拝見させて頂いたら、更に良かったと思いました。それから、模擬授業はそれぞれのグループに運営側から前もってテーマを振り分けて頂いた方が、バラバラなものを持ち寄って話し合うよりスムーズだったのではないかと思います。アンケートで質問を書くのと答えて頂けるのは、とても良かったです。公開して頂いたので、他の方のご質問なども興味深く読ませて頂きました。ありがとうございました。
- ・質問したいと思いつつ、期限（月曜日）を過ぎてしまいできずじまいになってしまい残念でした。でも、他の方がたくさんして下さっていたのを拝見することができたので良かったです。質問の形式がアンケートと一緒にではなく、期限ももう少しゆとりがあれば質問しやすかったのではないかと思います。
- ・数か月にわたり研修ありがとうございました。
- ・各国の現役の教師の方のお話やコロナ禍の現状などたくさん聞くことができとても有意義な講座でした。動画での学びとその後の対面が上手く繋がっていて、反転授業の活用方法も勉強になりました。海外の方と直でつながれる点など、ZOOM講座の利点を最大限活かされた授業内容でした。生徒さんも個性的で魅力的な方が多く、難しい方も多くいらっしゃると思うのですが、実際の対面授業も数回あったらよかったです。オンライン授業は横のつながりを築きにくいので、何か学習者同士のネットワークを作れるような仕組みがあると嬉しいです。全体的にはとても充実した内容で、たまたま見つけたのですが受けることができ本当に良かったです。とても楽しかったです！！短い期間でしたがありがとうございました。
- ・初任研修となっていました。実際は長年海外で活躍している方も多くいらして、とても興味深くお話をお聞きしました。ひとりペースを乱す方がいて、先生方も大変苦慮されていたのが残念でした。とはいえ値段の問題ではなくこれだけ質の高い内容を学ぶことができ本当に嬉しいです。本当にありがとうございました。

以上